

大判を横2分の1にし、更に縦三等分したサイズ。

※千穂庵三陀羅法師の狂歌グループによるもの。小野小町にまつわる七つの伝説を基にした謡曲や浄瑠璃・歌舞伎等からの画題。文化4年～10年にも「屏風七小町図」（北斎改戴斗）を描いている。

☆〈きよみつ〉（日本浮世絵博物館蔵）

※立札のある石段の下に松の木が二本あり、その側に立つ清水小町。小野小町が清水寺に参詣した折に、修行中の僧正遍照に逢い「岩の上に旅寝をすればいと寒し 苔の衣をわれにかさなむ」と歌を贈ったところ、遍照は「世をそむく苔の衣はただ一重 かさねばうとしいぎ 二人寝む」と返歌したという話からの取材と思われるが、それらしい図柄ではない。富多板貫、千穂庵三陀羅の狂歌が記される。

259 きよみつ



☆〈あまこひ〉（日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館蔵）

※立って閉じた蛇の目傘を持っている雨乞い小町の後ろには、三囲神社の石の鳥居の上部と「三囲神社」と書かれた額が見えている。鳥居は土手より下にあった。鳥居より高く梅の木が伸びている。俳人室井其角が、ここで雨乞いの句「夕立や田を三囲の神ならば」を詠んだところ、雨が降ったという伝説を踏まえた図。小野小町が勅命で雨乞いの歌を詠んだところ雨が降ったという伝説も踏まえる。蝶々亭春友の狂歌が記される。

260 あまこひ



☆〈そとハ〉（日本浮世絵博物館蔵）

※「左 恵方みち」と彫られた道標と柳が立つ道に、笠と杖を持って立つ卒塔婆小町。能の四番目物では、高野山の僧が都に上る途中、卒塔婆に腰掛けた老女に出会う。老女は小野小町と名乗り、話しているうちに、小町に思いを寄せる深草の少将の怨霊が取り付いて物狂いになるという話。有雅亭琴魚の狂歌が記される。

261 そとハ



☆〈かよひ〉（日本浮世絵博物館/立命館大学蔵）

※柳の木の側に大八車が置かれ、そこに傘を閉じて持ち、高下駄を履き、左の袖を口に当てて立つ通い小町。能の四番目物では、比叡山の麓の僧の所へ、毎日薪と木の実を持って来る里の女がいる。僧が名を聞くと、市原野に住む姥で、小野と応えて消えてしまう。小町の幽霊だと知った僧は、市原野に行くと小町の幽霊が出てきて受戒を願う。すると深草の少将が現れ、小町一人が成仏すれば、自分一人が苦しむことになると受戒を受けさせまいとする。小町から離れまいとする深草の少将に、僧はそれならば、かつて小町のところにした百夜通いを再現するように言うという話。布子●丸、一瓶



活安の狂歌が記される。

262 かよひ

☆〈阿ふむ〉（日本浮世絵博物館蔵）

※柵に囲われた梅の木の脇で短冊の和歌を読む
鸚鵡小町。能の三番目物では、陽成天皇が、小野
小町が百歳になって落ちぶれて関寺辺りに住んで
いると聞き、「雲の上はありし昔にかわらねど
見し玉だれの内やゆかしき」という哀れみの歌を
新大納言行家に持たせたところ、「内やゆかしき」
を「内ぞゆかしき」と一字だけ直して返歌とした。
これは、鸚鵡返しという歌道の一つだと小町が説

明したという話。馬耳風、三番窓初丸の狂歌が記される。



263 阿ふむ



☆〈せきてら〉（日本浮世絵博物館）

※梅の老木の脇で、蓑を着て手には春の草を入れた籠を持って立つ能
の三番目もので

は、近江国の関寺の僧が、和歌の話を書くため稚児を連れて老女の荒
れ果てた庵を訪れる。老女の話から、老女は落ちぶれた小野小町だと
知る。老女は華やかだった宮中の昔を語り、現在の落剥ぶりが比較さ
れるという話。千種元方の狂歌が記される。

264 せきてら

☆〈艸帚あらひ〉（日本浮世絵博物館）

※衣桁には着物が掛かっている。その脇で大き
な水盆を前に紙と椀を持っている垂髪の草子洗
い小町。水盆の前には巻物が一部開いて置かれ

ている。能の三番目物では、歌合せで小町の相手になった大伴黒主
が、小町の下詠みの歌を盗み聞いて万葉集に書き入れ、小町が詠
ったものは万葉集の古歌の盗作だと主張したが、小町が草子を洗うと、
書き入れた小町の歌が消えたという話。小男黒面、萬能煉安の狂歌
が記される。

265 艸帚あらひ

●絵暦「朝日奈と美人」（18.0×23.2 すみだ北斎美術館蔵）

●摺物「神功皇后と武内宿祢」（九つ切判。色摺。画狂人北斎画。
13.5×18.1 北斎館蔵）

※神功皇后が鉢巻を締め、太刀を佩き、弓の裏弭（先端）で岩に文字を書き付けている。
岩にはこの年の「享和二壬犬（みずのえいぬ）」の文字が記されている。側で武内宿祢が
鎧姿で膝まづいて控えている。狂歌「戌 立春 のどけさよ風もなげたりわだつ海の
今朝はしほみつ玉の初はる 松風音成」が記される。弘化4年頃（1847）にも「神功皇后」
を描いている。



『日本書紀』によれば、神功皇后は14代仲哀天皇の皇后で、朝鮮の新羅を滅ぼせという神の託宣により、崩御した天皇に代わり、武内宿祢の助力を得て新羅を攻めて従わせた。

●摺物「雪月花 天地人」（中判色摺：十二切 3点続き。各図に画狂人北斎画。18.3×25.2 日本浮世絵博物館蔵）

※恵方参り（元日に、居住地から見て、その年の恵方にお参りする。恵方とは歳徳神のいる方向で、十干により年毎に変わる）の図。

☆〈地の月〉266 右図。

※注連縄の下がる朱塗りの鳥居と石灯籠の側の「はつむめ 御休処」と書かれた箱着板の前で、櫛に手を当てお盆を持っている女。店先の台の上には更に盛られた団子のようなものが置かれている。石灯籠には「享和二 戌春」と書かれている。狂歌は「生粋の礼者ハかへる足もとも おほろに見たる灯籠の月」（白髪年成）。

☆〈天の雪〉267 中図。

※右図からの続き。鳥居の前に、角隠しを被り傘を閉じて持ち、茶店の女と向き合いように立つ女。狂歌は「下駄懸に恵方参りの鳥井さき ひらく笠木に積るあわ雪」（役柄堅木）。

☆〈人の花〉268 左図。

※中図からの続き。うっすらと雪を被った石垣の向こうには梅の老木が花を咲かせている。前帯の女が錠前を付けた板を持って佇んでいる。狂歌は「星人に折らせはせしと錠まへを ひんと御せし梅の花守」（蛙可成） 雪月花 天地人（日本浮世絵博物館）



●摺物「中山道深谷駅」（「中山道深谷駅の僧と美人」とも。色摺。

画狂人北斎画。18.9×25.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/フランス国立図書館/太田記念美術館：長瀬武郎コレクション蔵）

※旅の女性たちが、「中山道深谷駅」と書かれた道標の側の茶屋で休んでいる図。一人は床几に腰掛け煙管を使い、もう一人は揚帽子（角隠し）を被り小奴に向かい手を上げている。小奴は、木の枝に吊るされた二匹の亀を指差している。道標の下に「画狂人北斎画」と書かれている。

※本図は当初横長判摺物であって、中央二ツ折の左半分に千鶴庵ほか八名の狂歌が載せられたもので、フランス国立図書館所蔵の摺物アルバム中には完品があり、図に「いぬのとし」とあるという（『ピーターモース・コレクション北斎図録』による）。 269 中山道深谷駅（すみだ北斎美術館）



●摺物「忠臣蔵」（1月。小判揃物。2図確認。画狂人北斎画）（『年譜』による）。

●摺物「梅花の婦人と小僧」（春。画狂人北斎画）

※便々館湖鯉鮒ほか 16 名の狂歌が記される。「戌のとし春日」と記される（『年譜』による）。

●摺物「三保松原図」（無款）「享和二壬戌」とあり（『年譜』による）。

●摺物「高砂の相生の夫婦」（色摺。歳旦摺物。画狂人北斎画）

※老夫婦が松の木と箒の絵のある衝立の前に座っている。翁が差し出している盃に媼が酒を注いでいる。二人の前には丸い重ね鉢があり上に熨斗をつけた箸袋がおかれている。衝立に「画狂人北斎画」とある。

●摺物「若菜摘み」（色摺。画狂人北斎画）

※雪降る日に、供の者に大きな傘をささせ、衣冠束帯姿の貴人が、大きな笠を被り、蓑を着て籠を持って若菜摘みに来た女に話しかけている。重ねた細い板のようなものを差し出しているが、何かは不明。七埋酒利の狂歌が記される。

●摺物「花相撲 東の方大関 西の方大関」（三丁掛。狂歌。色摺。三丁とも画狂人北斎画。18.6×25.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※図中央に軍配を持った行司役の女性が立つ。図右には、桜の小枝を挿した花瓶を台に乗せて持つ「花个住」の四股名の女、図左には、同じく花瓶に挿した花を持つ「千代松風」の四股名の遊女が優雅に立っている。

●摺物「狂歌五色摺」（色摺。北斎画）

☆〈関羽と遊女〉（13.6×18.3 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※狂歌「けさははや花の春とて儀理ことも かつや山里に咲く梅かえ 山里亭東士」が記される。図は、盃を持つ関羽の前で、青竜刀のような刃を持つ長刀の柄を肩にして、立膝で座る花魁を描く。

☆〈鉄棒を磨く美人と漢武人〉（13.4×18.1 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※盃の上で、錫杖のような鉄棒を藁で磨いている美人。その後、長煙管を銜えて立っている中国武人。この武人が誰かは不明。

☆〈張良〉（日本浮世絵美術館蔵）

※秦末期から前漢初期の政治家・軍師。劉邦に仕えて多くの作戦の立案をし、劉邦の覇業を大きく助けた。蕭何、韓信と共に漢の三傑といわれた（「ウイキペディア」による）。

☆〈項羽〉（日本浮世絵美術館蔵）

※項羽は秦末期、楚の武将。秦を滅ぼしたが、漢の劉邦に敗れた。

☆〈養由基〉（日本浮世絵博物館蔵）

※養由基は春秋時代・楚の武将で弓の名人。

享和3(1803)	癸亥	44 歳	画狂人北斎、北斎辰政、時太郎可候、可候、北斎、穿山甲
(戯作名か)、画狂老人北斎和泉橋辺、 印 辰・政、亀毛蛇足：こと (33 歳)、(富之助：17 歳)、阿美与 (15 歳)、阿鉄 (13 歳)、阿栄 (6 歳)			

◇相撲興行 (3 月、浅草八幡宮、10 月、本所回向院)

◇7月、米国船、長崎に来航。通商を求める。

◇9月、イギリス船、長崎に入港。

◇10月17日、前野良沢没(81)。

◇叶福助人形が流行。随筆集『甲子夜話』(松浦清〈1760~1841〉肥前国平戸藩題9代藩主)に「睦まじう夫婦仲よく見る品は不老富貴に叶う福助」とあるという(「ウイキペディア」による)。いわゆる福助人形で、正座して両手をついたちょんまげの大きな頭が特徴。願いが叶うお守りとされた。

○松平定信『花月草紙』。

○鋏形蕙斎「江戸名所之絵」(江戸全体を鳥瞰した絵)。北斎の「東海道名所一覽」(文政元年:1818)に影響する。

○山東京伝、読本『小幡小平次死霊物語 復讐奇談安積沼』。北斎「百物語」の〈こはだ小平二〉のモチーフとなる。

○高井蘭山『絵本 三国妖婦伝』(蹄斎北馬(北斎の弟子)画。享和3年~文化2年〈1802~05〉にかけて刊行。文化4年〈1807〉の北斎の「三国妖狐伝」刊行の火付け役になったか)。

★閏1月19日、大田南畝や名和氏に招かれ席画をする。

※『細推物理』(岩波書店『大田南畝全集』8巻)の享和三年閏一月十九日条の記述。

「名和氏注1にて、北斎をむかへて席画あり。山道高彦注2なども来れり。島氏の女注3、ならびに赤の歌妓注4お久来れり」

注1) 名和氏: 大田南畝と交流した人物とされるが、不明。

注2) 山道高彦: 狂歌師。山口彦三郎。馬蘭亭と称し、毎月25日に席画会を催した。

注3) 島氏の女: 大田南畝の妾。お香。

注4) 赤の歌妓: 赤坂の芸者。

★3月15日、大田南畝と烏亭焉馬に再び招かれ亀沢町の竹垣柳塘氏別荘で席画を描く。竹垣柳塘と南畝は古書画などで同好の士。

※『細推物理』(岩波書店『大田南畝全集』8巻)の享和三年三月十五日条の記述。

「烏亭焉馬はとくより別荘にして、北斎をよびて席画あり」

★山東京伝(北尾政演)の戯画「奇妙図彙」(文字絵)を北斎も見たか。

★双鳩子(斎藤秋圃)の戯画「葵氏艶譜」

(別称「廓中艶譜」)を北斎も見たか。

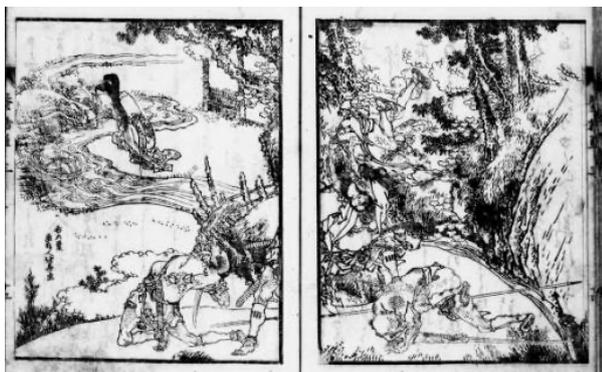
【読本初の挿絵】

●読本『蟹捨草』(角書

「古今奇譚」。

270 蟹捨草(函館市中央図書館)

1月。北斎の読本挿絵の初作。全六冊の全図(六図)を描く。右六葉画狂



人北齋画。流霞窓広住〈山家人広住。生没年不明〉作。丸屋甚右エ門版。半紙本。島根県立美術館/函館市中央図書館蔵)

※広住の読本『席上怪話 雨錦』(寛政12年〈1800〉正月刊)の挿絵を門人蹄齋北馬(1770~1844)が手掛けたのが刺激になったか。6図描く。

●狂歌絵本『はるの不尽』(『春の富士』とも。1月。歳旦集。折本一帖。末広庵長清撰。画狂人北齋画〈三図を描く〉。奥付に「末広庵蔵(浅草連)板」とあり。21.7×15.8 フリーア美術館/アーサー・M・サックラー美術館蔵)

☆〈三保松原と富士図〉(〈春の富士〉とも)白雪を被る富士の雄大さを描く。

☆〈梅花に旭日〉(〈日の出と梅〉とも)図の右上から左下に向かっての梅の枝に紅い蕾と白梅がついている。背後には大きな朝日が描かれる。

☆〈若菜摘みの夫人と娘〉(〈若菜摘み〉とも)母親らしい年増と娘が膝まづいて若菜を摘んでいる。もう一人の娘が立ちながら振り向いて、その様子を見ている。葵の模様の風呂敷包みが置いてある。

●狂歌絵本「狂歌五十之歌見」(一冊。北齋辰政画。頭の光注編。鳶屋重三郎版。21.3×15.2 フリーア美術館/たばこと塩の博物館)

注)頭の光:1754~96。江戸後期の狂言作者。四方赤楽、大田蜀山人の門下。寛政に入り狂歌集団・伯楽連を率いた。

※『狂歌書目集成』(菅竹浦著 星野書店 昭和11年:1936)の記載を『江戸の絵本画像とテキストの綾なせる世界』(p290 八木書店)で紹介している。

●狂句本『絵本 小倉百句』(1月。半紙本一冊。墨摺。反古庵白猿〈五代市川團十郎〉作の狂句集。奥付に享和三 癸 歳孟春 画工北齋辰政とある。西村源六・中川新七・今福屋勇助合版。島根県立美術館:永田コレクション/跡見学園女子大学図書館蔵)

※1 ページを縦に二分した枠の中に2名の歌人を割り当て、それぞれに狂句と挿絵が書きこまれた白猿作の小倉百人一首のパロディ集。21.5×15.5。

順徳院の「もしきや古き軒端のしのぶにも なほあまりある昔なりける」を「あさ漬けや古記入齒の志のぶにも」のように戯句にする。平兼盛の「しのぶれど色に出でにけりわが恋は ものや思ふと人の問ふまで」を踏まえて、「大晦日物や思ふと問いて人肌く」の句にして、大晦日の夜、提灯と箱物を包んだ風呂敷を下げる商人の女房は、物思いの様子で首を垂れている。荷物の上には正月用の新巻鮭を乗せている。春道列樹の「山川に風のかけたるしがらみは 流れもあへぬ紅葉なりけり」の歌を踏まえて、「蜻蛉や流れもあえぬ漣標」の句を添え、トンボ獲りの棹を手を持つ二人の子どもが描かれる。

【「亀毛蛇足」印初出か】

●狂歌本『夷歌 月微妙』(「ひなうた つきくわし」と読むか。狂歌絵本。半紙本。右三葉 画狂人北齋画、印辰・印政。22.8×15.9 島根県立美術館:永田コレクション蔵)

※一図「松島」に「亀毛蛇足」印が用いられている。この印の使用された上限とされる。他「三保浦」「隅田川」を描く。

※裏表紙の裏に「画工画狂人北齋 彫工 浅草田原町 朝倉清左衛門」とある。『江戸の

絵本』所収・マティ・フィラー「葛飾北斎と初期門人たち」p 290 より)

「亀毛蛇足」は「亀毛兎角」(亀の毛や兎の角は、ありえないもののたとえ)から取った戯号。実在せず、役にも立たない男の作品という洒落か。あるいは、誰も真似できないという自負か。文化10年(1813)4月まで使用する。同年の「鯉魚図」(埼玉県立博物館蔵)に、「年来持伝候亀毛蛇足之印御譲り申上候 御出精可致候以上 文化十癸酉四月廿五日」とあり、印を弟子の北明に譲っている。

●黄表紙『不厨庖即席料理』(1月。中本三冊。自戯作。時太郎可候画作。葛屋重三郎版。18.2×13.0 島根県立美術館:永田コレクション/天理図書館/国立国会図書館蔵)

※自序(お盆を捧げ持つ自画像あり)

「口上、当年も相不替、青本注1新作の儀被仰候所、御存知の不調法、何事も埒明キ兼候上、御急き被成候間、画より先キへしたゝめ候て、跡より趣向をつけ候得者、嘸々訳もなき事のミ書ちらし候半。是にて御間ニ合ヒ候ハ者御出板可被下候。猶延引之申訳旁、明朝参上花顔ニ可申上候。以上 九月廿七日 時太郎拜 重様注2御使」奥書「時太郎可候画作」(「西尾市岩瀬文庫 古典籍書誌データベース」より。句読点・ルビは筆者による)。

※様々な食材や台所道具を擬人化して描き、そこに北斎風のコメントを添えたもの。

注1) 青本: 草双紙の一。表紙が浅黄色に染められた草双紙。時代とともに滑稽・諧謔的なものが増え、後に文芸的な内容のものを黄表紙と呼ぶようになった。ここでは、黄表紙とほぼ同意で用いている。

注) 重様: 二代目葛屋重三郎のこと。

271 不厨庖即席料理 (国立国会図書館デジタルコレクション)



●黄表紙『胸中算用噓店卸』(角書「塵劫記由来三五十五張」。1月。三冊。画作時太郎可候。20.4×13.2 鶴屋喜右衛門版。天理大学図書館蔵)

※草稿本は、享和2年(1802)に西村屋与八版として出版されている。

●黄表紙『和漢蘭雑話』(春。角書「三国昔噺」。中本三冊。可候画。曼亭(感和亭)鬼武作。山口屋忠右エ門版か。加賀文庫蔵)。序文に「癸亥春日これを序す」とある。

●黄表紙『苦貝十念 嗚呼蜃気楼』(正月。三冊。曼亭(感和亭)鬼武作。北斎画。山口屋忠右エ門版。早稲田大学図書館蔵)

※帆立貝、鮑、蛤などに擬した人物の挿絵などを描く。

●噺本『はしか落噺』(秋。一冊。穿山甲(葛飾北斎の戯号か不明)天理図書館蔵)

※井上和雄『北斎』(昭和7年 高見澤木版社)では北斎の自画作の小咄本としている。一方、文も挿絵も北斎を疑問視するむきもある。

●狂歌絵本『諸芸三十六のつゞき』(九ツ切判。紙本狂歌摺物 色摺。揃物。浅草菴市人撰。画狂人北斎画)

※狂歌集団浅草側による春興狂歌全 36 枚の揃物。門人宗二に(菱川宗理)よる「将棋」「舞人」「拳」「枕拍子」の絵もある。

☆〈茶湯〉 (14.1×18.5 フランス国立図書館/すみだ北斎美術館蔵)

※「梅」「鶯」の字のある打掛けで座って茶を立てる年増と、それを待つ娘の図。

「あしやかた釜のけふりのあさかすみ 立初にけりはるの口切 天鶯堂張兼」、「其羽も茶の色なれはめつるなり 囿の窓に来なく鶯 陽彦亭舌高」、「鶯の音を待合の軒にさく利久のこのみのねち梅の花 方寸齋長麿」の狂歌が記される。

☆〈狂歌〉 (14.0×18.8 フランス国立図書館蔵)

※竹の図がある枕屏風の前で、筆先を口に含んで扇子を持ちながら狂歌を考えている遊女。膝の前の文机に短冊が置かれている。側で禿が墨を摺っている。「春風に枝もされ歌よミ初 題にもむすふ糸柳とて 三味角製」、「ひなふりのひなのあら野のことの葉の ミちかへりにけり春の若道 力足文」、「鶯のひなぶり歌そおもしろき よミ古巢よりなれてはいてゝも 文蔵亭守舎」の狂歌が記される。

☆〈小笠原礼式〉 (14.0×18.9 フランス国立図書館蔵/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※正月の屠蘇を飲もうとする 袴姿の若侍が、小笠原流の礼式に則り、朱塗りの盃を持ちあげている。その前には食べ物を入れた黒い重箱がある。床の間には三方に乗せた海老や松の正月飾りが置かれている。小笠原礼式に則った屠蘇酒の飲み方を描く。「おひさきハ下戸か上戸か女の手にもちそへて呑む児のとそ酒 浅草庵」などの狂歌が記される。



272 小笠原礼式 (すみだ北斎美術館)

☆〈揚弓〉 (フランス国立図書館蔵)

※矢場の台に置かれた矢立には短い矢が入れられ、小さな弓が立て掛けてある。その前の女は口元に手を当てて、立っている女と何かを話している。

揚弓は、楊製の小弓 (長さ 2 尺 8 寸 : 約 85cm) で 7 間半 (約 13.5m) 先の的を射る遊びで、神社の境内や盛り場などに設けられた。矢取り女を置いて、ひそかに色を売らせた店もあったという。

☆〈笛〉 (14.1×18.9 フランス国立図書館蔵/北斎館蔵)

※女の持つ灯りの下で若侍が腰を下ろして笛を吹いている。「浄瑠璃十二段草子」

(「浄瑠璃姫物語」とも) で、浄瑠璃姫たちが管弦の催しをしているのを聞いた牛若丸が笛を合わせたところ、不審に思った侍女の十六夜が門まで出て来た場面を描く。「笛井のあなたこなたへ梅か香のかほるも風のふくにまかせて 青雲亭業丈」、「春の夜の火ともす花のあかるさは やみをけしたる庭の梅か香末広庵」野狂歌が記される。



273 笛 (北斎館)

☆〈書〉 (14.0×18.9 フランス国立図書館蔵/北斎館/名古屋市博物館/すみだ北斎美術館蔵)

※文机の前で男の子が何かを書こうとしている。側で垂髪の母親が子どもの右手を取って字の形を教えようとしている。机の側には字の練習をした紙がある。

274 書 (北斎画)



※他に菱川宗理の作品がある。寛政 10 年 (1798)、門人宗二は北斎から宗理号を譲られ菱川宗理を名乗っている。

☆〈将棋〉 (菱川宗理画。14.1×18.7 フランス国立図書館蔵)。

☆〈舞人〉 (菱川宗理画。14.1×18.9 フランス国立図書館蔵)

☆〈拳〉 (菱川宗理画。13.9×18.9 フランス国立図書館蔵)

☆〈枕拍子〉 (菱川宗理画。13.7×18.6 フランス国立図書館蔵)

●由来記『三国伝来記』 (この頃か。折小本。北斎画。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※長野・善光寺の由来を記した本で、本中の、難波(現大阪市)の堀江で、のちに善光寺の本尊となる阿弥陀如来が本田善光(寺の建立者)を呼びとめる場面の図が有名(「すみだ北斎美術館ニュース 北斎かわらばん」による。平成 25 年〈2013〉6 月発行)。如来の右手指先から善光に向けて光が放たれている。

275 三国伝来記 (島根県立美術館)



●肉筆画「花魁図」 (この頃か。「亀毛蛇足」印の初出は享和 3 年といわれる。絹本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。29.2×44.8 個人蔵)



※横兵庫髷の花魁が、火鉢の縁に右ひじを突き左足を折って横たわり、前方を見ている図。醒々斎京伝(山東京伝)の題賛「吸付煙草の雲となり居続日和の雨となる 夜着のうち蒲団の上 一生の歡会是一般」が記される。

276 花魁図 (tamegoro.exblog.jp より転載)

●肉筆画「若衆図」 (この頃か。画帖『蜀山人圍繞名蹟集』より。絹本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。本紙 33.9×20.3 千葉市美術館蔵)

※左を向いて歩く前髪の若侍の図。背景はなし。画帖は、大田蜀山人が長崎奉行所詰めの時に、豪商中村氏に贈った書画・書簡をまとめたもの。絵には蜀山人の狂歌「をみなえしなまめきたてる前よりも うしろめたしや藤はかま腰 四方山人」を添える。四方山人は大田蜀山人のこと。

277 若衆図 (千葉市美術館)



●肉筆画「上山氏肖像画」 (着色。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。北斎

館蔵)



※2020年7月27日朝日新聞朝刊に掲載。群馬県の所有者から北斎館に寄贈。北斎の肉筆肖像画は数点しか伝わっていないとする。算盤の裏側を前に向けて左手で立て、右手を左腕に添えて胡坐で坐る男。前に「金銀出入帳」と書かれた縦長の帳面と、墨壺の様な筆入れが置かれているところから両替商とみられる。図上方に「上山氏」（「かみやま」と読むか）であることが記されているというが、人物については不明。

278 上山氏肖像画（北斎館）

●摺物『隅田川兩岸九つ切シリーズ』（仮題。色摺揃物）

※永田生慈によれば七枚以上のシリーズとする（『秘蔵浮世絵大観8』p311）。『絵本隅田川兩岸一覽』の土台になった揃物と思われる。

☆〈横網〉（画狂人北斎画。14.0×18.9 フランス国立図書館蔵）

※隅田川の横網町を行く船に乗る二人の女と船頭の図。「朝日影光を添て川面にひくや霞の横網のはる 三番叟初丸」の狂歌が記される。横網町は本所地



区南西部の町（現東京都墨田区横網町1丁目と2丁目）。隅田川の対岸は柳橋や蔵前。

279 横網（フランス国立図書館）

☆〈柳橋〉（画狂人北斎画。14.1×18.8 フランス国立図書館/ベルギー王立美術館蔵）

※柳橋の栈橋に立つ二人の女の図。遊客を迎えに出てきた柳橋の芸者といわれる。向こう側に山谷掘をめざす客を乗せた猪牙船が滑りだそうとしている。狂歌が添えられる。「水のおもにうかめる春の柳橋ふねかくとあやまたれぬる 蝶々亭春友」の狂歌が記される。



280 柳橋（フランス国立図書館）

☆〈駒形〉（「川辺の人物たち」とも。14.2×18.8 フランス国立図書館/北斎館蔵）

※「亥」（享和3年）の字の凧を持つ女と、被り物をした女が通りすぎる。その後ろに置いた鉄箱に腰掛けた侍。川に向かって右手を差し出す小奴の肩には正月祝いの飾り物がある。駒形の河岸から宮戸川（隅田川下流）を眺めた図。川の流れは空摺注の手法である。「若草の中に雉子のさをどるも よいとやまうす春の駒形 千金亭如藍」の狂歌が記される。

注) 空摺：浮世絵版画などで、凸版に絵の具を塗らず、刷り圧だけで、紙面に凹凸模様を造り出す技法（三省堂『大辞林』による）。



281 駒形（フランス国立図書館）

●摺物『踊盡』(正月。全何図か不明。九ツ切判色摺揃物。画狂人北斎画。フランス国立図書館蔵)

※よく知られた踊りの演目に見立てて女の所作を描く。狂歌が添えられる。

☆〈手習子〉(「手拍子」とも。13.6×18.4)

※三味線を弾く女と「享和三年正月吉日」と書かれた紙と、蛇の目傘を持ち、左手には「清書双帯」と書いた帳面を持って踊りの仕草をする女の図。二人の背後には梅を描いた衝立がある。「手習子」は、春の日に傘を差して蝶を追いかける無邪気な娘が登場する長唄の演目。「春風の手習子かもしどけなくふりをつけたる庭の梅かえ 和蘭物成」、「朝日影あかるもはやき手習の 一段見事むめか書初め 椎柴道」の狂歌が記される。



282 手習子 (フランス国立図書館)

☆〈見立草摺曳〉(13.9×18.8)

※右手に刀を持ち、左手で着物を抱える女と、座って鶴丸(日本航空のマークに似る)の大紋を染め抜いた布を広げた女が顔を見合わせている。歌舞伎の舞踊「草摺曳」を模した

ものという。親の仇敵工藤祐経ありと聞いた曾我五郎が、鎧を小脇に駆けこむのを、小林朝比奈が草摺を捕まえ、引き止めて意見忠告する筋(平凡社『世界百科大事典』第2版より)。「朝比奈ひちをものはるの草摺に ちからためしの松やひくらん勝々亭山人」の狂歌が記される。

「草摺」は、鎧の前に下ろし大腿部を守る胴の附属部。



283 見立草摺曳 (フランス国立図書館)

☆〈踊二美人〉(14.2×18.8)

※緑の折れ頭巾をつけた二人の女、一人の扇子に「寿」の字が描かれ、一人は福寿草の盆栽を持つ。「今朝ハはや霞か関もすみた川 庭の梅若門の松若 寿菊人」、「七くさのはやしかた迄揃ふてハ 梅かえに来てをどる鶯 鈍々亭和樽」の狂歌が記される。

284 踊二美人 (フランス国立図書館)



☆〈花売りと娘〉(13.9×18.5)

※梅の小枝などの花売りの男と、梅の小枝を持って立

っている女が眼を合せている図。「春雨のふりつけて咲梅かえに ふしおもしろきうぐいすの声 蠣壳仲丸」、「口紅粉をさしつゝ風の手をとりも かたいなかなる梅のふりよさ 宵闇くらき」の狂歌が記される。

☆〈見立娘道成寺〉(14.0×15.6 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※被り物を被って口元に袖を当てて立つ女と、座っている小奴。小川の脇には梅の木が花を咲かせている。その枝に掛けられた大凧には鐘の絵が描かれている。小川の中に立つ木札には「定一この鐘を鳴らすべからず 月日」と書かれている。「たをや女の野かけかてらの年礼に すゝむたはこも舞のひとさし 山里亭東土」の狂歌が記される。

☆〈見立羽根の禿〉（13.7×18.6）

※桶の柄に手をかけてしゃがむ女と、新年の松飾りの門に羽子板を持って立つ女と、天秤棒に渡した桶を置いてしゃがむ白酒売りに扮した女の図。正月の吉原の店先で禿が羽根つきをして遊ぶ長唄「羽根の禿」の見立という。

「かむろ子のしなもよき手につくはねの はつミてあかる春の色客 花木亭根丸」、「山川をこゝにうつして霞ひく 妹かひたいの雪のしろ酒 難波亭●風」の狂歌が記される。

☆〈見立二人椀久〉（14.0×18.8）

※枕屏風の前で長煙管を持って座る女と、棒を持つ女が粋な格好で立っているもう一人の遊女と顔を見合わせている図。人形浄瑠璃や舞踊の演目「椀久末松山」を見立てているという。大坂の豪商椀屋久右衛門が大坂新町の太夫松山に入れ込み、家業を傾け発狂して水死した事件による。「ひきそむる霞のまゆの松山に 見とれてをとる春の椀久 猪牙早行」、「おもかけをうつして二人わん久に 若水をくむ門の松山 倚松亭岡成」の狂歌が記される。

【寛政6年以降久々の役者絵】

●絵巻「錦車楼」（「初代中山富三郎と初代岩井半四郎」「歌舞伎役者二人図」とも。縦判色摺。画狂人北斎画。19.0×12.6 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/ベレス・コレクション蔵）

※紫帽子（髷の前で額を覆う紫の布）をつけた初代中山富三郎（安永5年～弘化4年〈1776～1847〉）と初代岩井半四郎（宝暦10年～文化7年〈1760～1819〉）、五代目岩井半四郎を描く。図上部の額に初代中山富三郎の俳名「錦車楼」とある。もう一人は、扇の紋が見えるところから五代目岩井半四郎とされる。

図左に、五足斎丈布の賛「汲そむる 岩井のみつの 金化粧 あらふ笑顔や 千両の春」が記される。左の役者が手にする本の題僉には、正二五七八十一大」と享和3年の大の月が記される。

※寛政6年（1794）以降、北斎は役者絵から離れているが、この作品はその後に描かれた三点の一点。他に文化4年（1807）「初代沢村源之助 梅のよし兵衛」と「初代瀬川路之助 女房こむめ」の二枚組、文政7年（1824）「三代目市川門之助と七代目市川團十郎」がある。

●扇面画「桜花花魁図」（着色。画狂人北斎筆。印辰印政）

※扇面の右側に、前帯で赤い襦袢を覗かせた花魁が黒塗りの下駄を履いて、柵に囲まれた桜の老木の前に立っている。

●摺物「夢見る女」（紙本色摺。九ツ切。画狂人北斎画。13.2×18.0 北斎館蔵）

※振袖姿の女性が紙や硯・筆などが置かれた文机にうつ伏して眠って、夢を見ている様子

が描かれる。中国の故事「邯鄲の夢注」の見立てか。文鎮が猪を象っているのが亥年の作品と思われる。着物や花の部分に光を当てると反射する雲母摺がほどこされている。

注) 邯鄲の夢：「盧生の夢」「邯鄲の枕」とも。
中国戦国時代、趙の国の盧生という若者が、呂翁という仙人から夢が叶うという枕を与えられ、眠ったところ立身出世し栄華を極めた夢を見た。しかしそれは、目覚めれば寝る前に煮た粥がまだ炊き上がらないうちのことだったという故事。唐の沈既濟の『沈中記』による。



285 夢見る女（北斎館）

●摺物「文を考える花魁」（色摺。画狂人北斎画。13.7×18.4 北斎館蔵）

※藤の花が描かれた掛け軸と琴が置かれた床の間のある座敷で、花魁が机の前で手紙の文を考えている。側で禿が墨を摺っている。左側の女は、書いた文を火鉢に入れて燃やそうとしている。

●摺物「手土産 亥」（亥年の享和3年辺りか。色摺。画狂老人北斎和泉橋辺写。13.8×27.1 北斎館蔵）

※筍の皮に包まれた手土産に葱が添えられる。包皮に「亥」の字が記されているので、猪肉が包まれ、更に亥年の作品であることを示したものか。

●絵暦「女の年礼」（九ツ切判。色摺。画狂人北斎画。13.9×17.8 東京国立博物館蔵）

※新春の年礼風景。赤い小階段の上に飾られた注連縄の垂れたウラジロの太さで月の大小を表している。奥には猪の置物があるので亥年の作と分かる。

●摺物「女の年始」（横中判色摺。画狂人北斎画。東京国立博物館蔵）

※御高祖頭巾の女と花魁の二人が年始に行く様子。後ろに荷物を首に巻いた供の男がいる。訪問先の入り口の奥に猪の置物が見えるので、亥年の作と分る。

●絵暦「綱引き」（1月。色摺。画狂人北斎画。9.8×19.1 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※神社の境内で男たちが大綱を抱えるようにして綱引きをしている。見物人の傘に「亥春」と大の月を示す数字が書かれている。賛に「歳旦 このうへの宝あるまし玉の春」、「歳暮 種蒔て花の春見んとしの豆 円亭喜鵲」、「日の筋に負しとひくや朝霞 仏外」などと記されている。寛政11年（1799）にも摺物「社前の綱引き」図がある。

●摺物「衝立に屠蘇図」（色紙判狂歌。色摺。画狂人北斎画。19.5×18.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵）※「亥春」と書かれた衝立の前に屠蘇を入れた酒器と膳に乗せられた盃が描かれる。

●摺物「白鬚」（狂歌摺物。色摺。無款 13.8×18.2）

【以下、享和年間】

画狂人北斎、北斎、可候、東陽画狂人北斎、不染居北斎、歩月老人北斎、宗理 印 亀毛
蛇足、辰政、画狂人

●狂歌絵本『砧の聲』（「砧の峰」とも。享和2年～3年〈1802～03〉。初編・二編。半

紙本墨摺。画狂人北斎画。21.5×15.5 島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館蔵)
 ※野外に莫莖を敷き、姉さん被りの母親と子供が向かい合って槌を振り上げて砧を打っている図。

●肉筆画「魚貝図」(享和元年～2年〈1801～02〉)。絹本着色一幅。
 画狂人北斎席画。[印]亀毛蛇足。66.2×32.7 すみだ北斎美術館蔵)
 ※画面手前から、宿借、蜆、鮑、烏賊、種類不詳の魚、海老、玉珧を描く。

286 魚貝図 (すみだ北斎美術館)



●肉筆画「かれいに海老図」(享和3年～文化1年〈1803～04〉)北斎画。[印]辰 [印]政 元麻布美術工芸館寄託)

●肉筆画「来燕帰雁図」(享和年間〈1801～04〉)。絹本着色一幅。画狂人北斎画。[印]亀毛蛇足。82.7×26.0 吉野石膏コレクション蔵：すみだ北斎美術館寄託)

※天空から垂直に降りるように首を下に向けて飛ぶ二羽の雁。その下を交差するように飛ぶ三羽の燕。加藤千陰(1735～1808。国学者。歌人)の賛「はる秋の契り たかへずとりくに 来るも帰るも こゝろ有けり千陰」

287 来燕帰雁 (すみだ北斎美術館寄託)

●肉筆画「化粧美人図」(「けわいびじんず」とも。享和年間〈1801～04〉)。紙本淡彩一幅。無款。132.9×49.4 MOA美術館蔵)

※遊女の持つ鏡は斜め後方の帰る客に向けている。鏡には遊女の横顔と鏡に映っていない客の視線が交差していることだろう。この構図はベラスケスの「ラス・メニーナス」を彷彿させ、いわゆる視点の移動を示した注目すべき図となっている。

288 化粧美人図 (MOA美術館)

●肉筆画「柳下傘持美人図」(享和年間〈1801～04〉)。絹本着色一幅。画狂人北斎画。[印]辰政。84.3×25.4 北斎館蔵)

※享和末期～文化初期の「柳下美人図」とは別物だが画趣は同じで、柳下に裸足で高下駄を履き、閉じた蛇目傘を左手に持ち、首をかしげて土手の間の道を歩く遊女の図。八本の簪、髷の後に赤い花簪があしらわれる。柳の木の下には赤い躑躅の花が咲いている。

289 柳下傘持美人図 (北斎館)



【東海道シリーズ始まる】

●錦絵『吉野屋版 東海道五十三次』(「東海道五十三次」物の一。享和年間〈1801～04〉)。横小判。全 56 図。「金谷」のみ欠落。「京」

が2図ある。宿駅名は横書き。各図に画狂人北斎画。吉野屋徳次郎版。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※確認されている揃物中、最も早い時期の出版か（『名品揃物浮世絵9 北斎II』ぎょうせい）。

☆〈日本橋〉（8.6×13.2）

※擬宝珠のある日本橋上の賑わい。魚介を入れた箆を持ちあげている魚屋。荷物を担いだ行商人や旅人たち。右端に大名行列の長槍の先だけが見える。遠くに江戸城の櫓。その先に富士山が描かれる。

290 日本橋（部分：島根県立美術館）



☆〈品川〉（8.7×13.4）

※「祇園御祭禮」の幟が立つ宿場の屋根。海の向こうには富士山。

☆〈川崎〉（8.5×13.2）

※多摩川の渡し船が行く手前の岸では、首に風呂敷の荷物を括って立つ男と、その脇で草鞋の紐を結び直している男。

☆〈神奈川〉（9.1×13.2）

※遠くに箱根山を望み、手前には森の中の家がぼつんと描かれる風景画。

☆〈程ヶ谷〉（9.1×13.2）

※杉並木の間から富士山が見える道を、馬子が牽く馬に乗って行く旅人。その後ろには、下に置いた荷物を担ごうとする男。

☆〈戸塚〉（9.0×13.1）

※煙管をくわえて笠を被って歩く侍と、天秤の荷物を担いでついていく男。

☆〈藤沢〉（8.7×13.0）

※江の島へ渡る人々。島の向こうには富士山。図の手前には松林。

☆〈平塚〉（9.0×13.2）

※宿の入口の前で馬から荷物を下ろし、しゃがんで馬の脚の世話をする男。

☆〈大磯〉（9.0×13.4）

※風の吹く中、僧侶と思われる男が笠に手を当てて海上に飛ぶ鳥を眺めている。

☆〈小田原〉（9.2×13.3）

※「うみらう 元祖とら屋」と書かれた衝立を背に、客にお茶を差し出す店の小僧。

☆〈箱根〉（8.9×13.2）

※紐を引いて回す轆轤の端につけた木を、もう一人の男が削って細工をしている。箱根は寄木細工で有名。

☆〈三島〉（9.1×13.3）

※三島神社の石の鳥居をくぐって参詣する男。その前で境内の中を眺める旅人。鳥居の両脇には赤い塀が続く。

☆〈沼津〉（9.2×13.3）

※入り江の岸の茶屋で休む人々。入り江には二艘の渡し船が浮かぶ。

☆〈原〉 (9.1×13.3)

※富士山の裾野が、すやり霞に隠れて半分だけ見える道を、駕籠に乗って行く旅人と徒歩の男。駕籠は一旦ここで休み、駕籠かきの前の男は頭に手をやっている。

☆〈吉原〉 (8.5×13.2)

※侍二人を先頭に、朝鮮通信使の一行が富士のすそ野を見ながら、図の左から右に移動している。

☆〈蒲原〉 (8.6×13.4)

※海の上を二艘の渡し船が行く。手前の岸边には松の緑と赤い紅葉。

☆〈由井〉 (8.9×13.4)

※海浜には塩を含んだ砂を集める男が二人。手前には、塩焼小屋二棟と塩水を入れる桶が四つ置かれている。沖には帆掛け船が五隻浮かんでいる。

由井 (島根県立美術館)

☆〈奥津〉 (8.7×13.4)



※一般に「興津」と表記する。遠くのそそり立つ岩のある海辺に小さく二人の男が描かれる。図の中央には赤いすやり霞。右側に版元の「吉野屋徳次郎」名が記されている。

291 奥津 (島根県立美術館)

☆〈江尻〉 (8.2×13.4)

※海辺の山中に寺社があり、その先に山が見える。海には帆掛け船が二隻浮かぶ。図右に「吉野屋

徳次郎」の版元名が記される。

☆〈府中〉 (8.6×13.3)

※集落の屋根が鳥瞰的に描かれる。遠くの灘子の中に見えるのは駿府城か。図右に「吉野屋徳次郎」の版元名が記される。

☆〈鞠子〉 (8.8×13.3)

※名物のとろろ汁食べる旅人と、お盆を差し出す女給。痩せた行商の男が上半身裸で旅人の食べる様子を見ている。

☆〈岡部〉 (8.6×13.2)

※険しい山間の道を行く旅人たち。鳥瞰的画法で、版元名が記される。

☆〈藤枝〉 (9.0×13.4)

※「根元 名代」と書かれた襖の脇から店主が外を見ている。その前で旅人が店先に並べられた商品 (餅のようなものか) を見ている。藤枝に向かう瀬戸の立場では「染飯」と呼ばれる、くちなしで染めて黄色にしたおこわを、平たくして焼いたものが名物とあるが、それだろうか。

☆〈島田〉 (8.6×13.4)

※柴木の束を縛っている子どもの側に行く笠を被った道中差しの男と、上半身裸の供人。その脇には天秤棒を担ぐ男たち。図に版元名が記されている。

☆〈金谷〉 (欠落)

☆〈日坂〉 (8.1×13.5)

※松並木の道に置かれた岩を持ち上げようと両手を上に伸ばして意気込む男が二人。それを見ている旅の女がいる。

☆〈懸川〉 (8.4×13.0)

※空に上がっている凧が四つ。これから上げようとする男たちもいる。

☆〈袋井〉 (8.2×13.3)

※天狗の面がある箱笈を担ぐ修験者の男と、御幣が付いた神社形の箱笈のようなものを担いでいる修験者の男が行く。側の松の木には馬が繋がれている。

☆〈見附〉 (8.8×13.4)

※松の木の側に紅葉もある山道を旅人が行く。その向こうには富士山。

☆〈濱松〉 (8.7×13.0)

※入り江に浮かぶ渡し船には大勢の客が乗っている。荷物を背負った馬も二頭いる。舳先の船頭は腰をかがめて竿を海に差し入れ、船尾の船頭は力を込めて竿さしている。

☆〈舞坂〉 (8.7×13.2)

※大きな碇の先に乗って海を指さす子ども。碇の根元に足をかけて海を見る子ども。海には一隻の渡し船が浮かぶ。

☆〈荒井〉 (7.8×13.3)

※荒井宿の門から出てきた旅人たち。天秤の荷物を確認するかのような男。

☆〈白須賀〉 (8.0×13.4)

※山道を登る旅人が、遠くの帆掛け船を手をかざして見ている。後ろには笠を被った供人がある。さらに天秤の荷物を担ぐ男。

☆〈双川〉 (8.1×13.5)

※旅道具を置いて、大きな岩に手を回している男と、両手を挙げてはやしている男と、しゃがんで見ている男。

☆〈吉田〉 (8.2×13.4)

※紅葉の木の側で食事をしている二人の旅人。

☆〈御油〉 (8.7×13.1)

※松並木の街道を馬に乗って行く旅人や、徒歩で行く旅人を小さく描く。版元名がある図。

☆〈赤坂〉 (9.0×13.1)

※手洗いの鉢を前にして歯を磨く遊女と、髪を梳いている遊女。これからの勤めの準備をしている。図に版元名が記される。

☆〈藤川〉 (8.5×13.2)

※山の上の、小さな松の木に挟まれるような鳥居のある祠を鳥瞰的に描く。図に版元名が記される。

☆〈岡崎〉 (8.5×13.3)

※雪を笠に被った旅人たちが橋を渡る。岡崎の入口になる矢作橋であろう。

☆〈池鯉鮒〉 (9.2×13.6)

※松の木のある庭先で、手行燈を掲げて立っている女。

☆〈鳴海〉 (8.8×13.3)

※口にくわえた紐で布を絞っている女。鳴海は絞りの名産地。

☆〈宮〉 (8.6×12.6)

※帆かけ船が三隻浮かぶ海。手前の岸と向こうの島には松林が見える。

☆〈桑名〉 (8.8×13.4)

※桑名城が描かれる。図に版元名が記される。

☆〈四日市〉 (8.5×13.3)

※茶屋で休んでいる男二人の前で蛤を焼いている男。団扇であおった煙が顔にかかっている。図に版元名が記される。

☆〈石薬師〉 (9.0×13.3)

※寺の屋根が足元に見える坂の上で、柄杓の水を差し出す子どもを合羽を着た旅人と供の男が振りかえる。

☆〈庄野〉 (9.2×13.5)

※川岸を行く長持を担ぐ男と長檜を持つ男たち。

☆〈亀山〉 (8.6×13.2)

※鈴鹿川の橋を渡る旅人たちと、川岸で釣りをする男。土手には駕籠を置いて休む男。

☆〈関〉 (8.6×13.2)

※杉林に囲まれた山道を馬子の牽く馬に乗って登って行く旅人。

☆〈坂の下〉 (8.5×13.3)

※細い山道に添うように流れる川の風景。

☆〈土山〉 (8.6×13.3)

※土坡に挟まれた細い道を行く旅人。その先には海がある。図に版元名が記される。

☆〈水口〉 (9.1×13.5)

※「名物ど志やう汁」と書いた縦看板の店先に、荷物を振り分けに背負った馬と柴木を背負った馬がいる。図に版元名が記される。

☆〈石部〉 (8.7×13.2)

※荷物を置いて、街道の大杉の幹に両手を回して太さを計っている二人の旅人を描く。

☆〈草津〉 (8.9×13.5)

※宿で三人が酒を飲んだり食事をしている。男二人は上半身裸。

☆〈大津〉 (8.8×13.4)

※大きな松の老木の下には赤い小さな祠。その傍の海辺には小さな船が三艘停まっている。

☆〈京〉 (8.8×13.3)

※公家が右近の橋の脇に立っている。版元の「吉野屋徳次郎」の名が右脇に囲みで記される。

☆〈京〉（9.1×13.5）

※一面の紅葉の赤が、雲のように御所の屋根を覆っている。

※北斎は「東海道五十三次」を、この吉野屋徳次郎版のほか次のシリーズを描いている。

『春興五十三駄之内』（享和4年〈1804〉画狂人北斎。版元不明）、『横小判 東海道五十三次』（文化元年～5年〈1804～08〉。北斎画。54 図。版元不明）、『彩色摺五拾三次』（文化元年～5年〈1804～08〉。縦小判。無款。56 図。版元不明）、『東海道五十三次 絵本駅路鈴』（文化3年～7年〈1806～10〉縦中判。無款。56 図。伊勢屋利兵衛版）、『五十三次江都の往かい』（文化元年～10年〈1804～13〉中期横小判。北斎画。56 図。伊勢屋利兵衛版）、『東海道五十三次 絵尽』（文化7年〈1810〉。無款。57 図。鶴屋金助版）。他に、弟子の柳川重信が（鳴海）など8 図を書き加えて無題で文政年間（1818～30）に改編再刊された『春興五十三駄之内』がある。

●錦絵『横小判 仮名手本忠臣蔵』（享和元年～3年〈1801～03〉。文化初期説あり。横小判着色 12 図揃。画狂人北斎筆〈題箋による〉。題は「忠臣蔵」。絵の中では「仮名手本忠臣蔵」とあるが、他の『仮名手本忠臣蔵』と混同を避けるため『横小判 仮名手本忠臣蔵』とした。各 12.5×16.7 ギメ美術館蔵）

※横小判着色の「忠臣蔵」は、ギメ美術館に 12 図の全図が所蔵されていて、画帖仕立に装丁されているという。

落款は、初段（画狂人北斎画）、二段（画狂人北斎画）、三段（北斎画）、四段（無款）、五段（北斎画）、六段（無款）、七段（画狂人北斎画）、八段（画狂人北斎画）、九段（画狂人北斎画）、十段（画狂人北斎。「画」はない）、十一段（画狂人北斎画）、大尾（揃の最後。画狂人北斎。「画」の字はない）。以上は、根岸美佐『北斎研究』56 号〈2016/3/31 : p 10～13〉による）。

※忠臣蔵物は、寛政 10 年（1798）〈可候画。享和末～文化初年説あり〉『新板浮絵忠臣蔵』、文化元年～5年（1804～08）『仮名手本忠臣蔵』（北斎画。平仮名表記あり）、文化元年～10年（1804～13）『仮名手本忠臣蔵』（横小判。北斎画。平仮名表記あり）、文化3年（1806）『仮名手本忠臣蔵』（横大判。無款）など数種がある。

☆〈三段目〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）裏門の段の図。鷲坂伴内が勘平を捕えに来たところ、首を掴まれ投げ飛ばされた。勘平が伴内を切ろうとするが、お軽がとめようとする場面。

☆〈四段目〉屋敷を遠景に、三人の武士を描く。左右の二人は中央の武士に向かって刀を抜く様子。

☆〈十段目〉天河屋義平が義士たちに協力していると疑われ、獲り手に囲まれるが、一步も引かずに義士への忠誠心を示す有名な場面の後日を描く。義平は仇討ちの援助を悟られまいと奉公人を解雇し、妻のお園も実家に帰すが、離縁状を戻そうと儀平を訪ねるお園と、それを拒否する儀平の様子が描かれる。

☆〈十一段目〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）吉良邸内で、二刀流の清水一角と戦う

二人の義士。清水のうち下ろす刀を、のけぞりながら横にした刀で受ける義士。清水の背後で切掛かるもう一人の義士。庭先でも義士と吉良家家臣が戦っている。

●肉筆画「日月龍図」（享和年間〈1801～04〉。紙本墨絵着色三幅対。画狂人北斎。印辰政。各 103.1×17.5 光ミュージアム蔵）

※右図は、三日月が画面中央に描かれる。中央の図には、奥からこちら側に弧を描くように向かってくる龍の顔が大きく描かれる。左の図には、画面下に大きく朱色の日が描かれる。

292 日月龍図（光ミュージアム）

【北斎作品の重要文化財指定の第2号】

●肉筆画「二美人図」（享和年間〈1801～04〉。『肉筆浮世絵大観4』では文化年間）。大大判絹本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。110.6×36.7 MOA 美術館蔵。重要文化財）



※三つ葉葵の紋のついた表装から、将軍家またはその周辺からの依頼による作品という指摘があるという（『肉筆浮世絵 美人画の世界』田辺昌子監修・宝島社）が、疑わしい。

293 二美人図（MOA 美術館）

※立ち姿は吉原の遊女、横座りは廓の女芸者といわれる（『肉筆浮世絵大観4』）。また立ち姿の女は遊女で夜を象徴し、横座りの女は若女房で昼を象徴して、それぞれを対比させた試みだともいう（2005年『北斎展図録 p 324』）。文化年間にも「二美人図」がある。

※2001年6月22日、重要文化財に指定。第1号は、文化年間の「潮干狩図」（大坂市立美術館蔵）。

※文化庁の「国指定文化財等データベース」には次の記載がある。

「（略）浮世絵美人画中でも吉原の遊女は最も多く描かれた題材である。本図は無背景にひとりの高位の遊女が物憂げな表情で立ち、前方で向かって右向きにかがんだ女性がこれを振りかえるのみの簡潔な図様である。立ち姿の女性は、やや俯き加減で視線を下に落とし、下方におろした左腕で小袖の端を持っている。肩から足許にかけて身体は大きな弧を描き、向かって斜め左を向いている。頭髪には簪を多く挿し、白い花びら模様のあるうす青色の着物に細い帯を前で結ぶ。寛いだ姿で羽織った小袖は鼠色地に扇散らしの文様で、金泥（筆者注：金粉をにかわで溶いた顔料）の輪郭線で括られた桧扇からは実際に赤と緑の飾り糸が垂れ下がっている。裾には葵の模様もみえる。

かがんでいる女性は膝を横座りに折り、腰をやや前方にかがめて肩を後方にねじる。右肘を曲げて膝の上に置き、左肘は、手首を折り曲げて、手の甲をやや開いた口元にあてがい、首をねじって背後に立つ女性のほうを見やる。菖蒲草の棲模様の赤地の小袖を着し、茶色のうすものを上に重ね、背で結んだ青地の帯を垂らしている。



すらりとした長身の前者と、体を折り畳んでねじり、指先にも緊張感を漂わせる後者の対比が、人物としても充実した表現を実現している。(略)

本図の丹念で上品な出来映えは、特別の注文に応じた渾身の作と思わせるものがある。伝来は不明であるが、表装裂の一字に三つ葉葵紋があることは、示唆的といえよう。葛飾北斎の代表作として、また、浮世絵師たちが競って健筆を揮った華やかな肉筆美人画にあって、勝川春章、喜多川歌麿に伍して独自の地位を占める美人画として、高く評価される」(ルビは筆者)

●肉筆画「二美人図」(享和3年~4年<1803~04>)。重要美術品。絹本着色一幅。画狂人北斎画。印 亀毛蛇足。76.5×41.2 北斎館蔵)

※重要文化財の「二美人図」(享和元年~4年 MAO 美術館蔵)とは別作だが、ほとんど同構図。前帯で首をかしげて立つ女。燈籠鬢の島田髷で赤い元結いの髪に六本の簪をして、右手を上げ、黒地に松と鶴の模様の着物に赤い前帯をだらりと下げた姿。その横で、黒地に花模様の着物を着て、片膝を立てて座る垂髪の遊女も六本の簪を挿している。二人の遊女が店に出る前の様子を描いているとも。

294 二美人図(北斎館)



●錦絵『風流無くてななくせ』(享和年間<1801~04>)。大判 雲母摺。可候画。蔦屋重三郎版)

※大判錦絵雲母摺の美人大首絵はこのシリーズ2枚のみが確認されている。いずれも背景は白キラ(雲母)が使われている。「ななくせ」とあるので七図が予定されていたものか。

※リチャード・レイン『伝記画集 北斎』では、初代蔦屋重三郎の死により、二図のみで打ち切られたと推測している。

※この後は摺物や版本の挿絵以外、美人画をほとんど発表していないという(『浮世絵八華5 北斎』所収、永田生慈「北斎の生涯」)。

☆〈ほおずき〉(36.3×24.7 メトロポリタン美術館/ホノルル美術館/神戸市文書館/山口県立萩美術館・浦上記念館蔵)



※髪を洗い終わった後、ほおずきを口先で遊ぶ女と、手鏡を見ながら歯についた口紅を拭おうとする島田髷の女を描いた図。

295 ほおずき(メトロポリタン美術館)

☆〈遠眼鏡〉(38.6×25.8 私立津山郷土博物館/神戸市立美術館/クラブ・ホン・コレクション/ホノルル美術館/山口県立萩美術館・浦上記念館/サンタフェリー・タークスコレクション蔵)

※仏参の途中、揚帽子の母親と、遠眼鏡を覗いて何かを見る娘の図。この絵について、薄藍の唐傘をさした奥女中と島田髷の腰元が片目を細くして遠眼鏡で見る図という解釈もある(『浮世絵聚花ホノルル美術館』)

296 遠眼鏡(神戸市立美術館)



●肉筆画「**恵比寿大黒図**」（享和年間〈1801～04〉。紙本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。75.6×28.1 個人蔵）

※大黒と恵比寿が並んで歩いている。大黒は小槌をぶら下げ、その右で恵比寿が釣り竿を肩にしている。

●錦絵「**道行八景**」（享和年間〈1801～04〉。中判。二丁掛。揃物。可候画。版元不明。心中事件の男女だけを集めたシリーズ）

※数少ない一枚風俗画。歌舞伎や浄瑠璃で知られた男女を描いたもの。「八景」とあるが六図だけ確認されている。

☆〈**伊達与作せきの小方 夕照**〉（23.5×17.4 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※歌舞伎「**恋女房染分手綱**」の原作、近松門左衛門の『**丹波与作待夜小室節**』の、由留木家の家臣で落ちぶれて東海道の馬方となった与作と、恋仲の関の小方が心中を覚悟して千貫松まで道行きの途中、休み茶屋で二人が煙管を使っている場面。脇の松の背景に富士山が描かれる。



297 左図：伊達与作せきの小方 夕照

右図：あづまと五郎の残雪（すみだ北斎美術館）

☆〈**あづまと五郎の残雪**〉（23.5×17.4 W・アマシュトゥツ・コレクション/ボストン美術館：スポルディング・コレクション/鎌倉・二階堂浮世絵文庫蔵。以上『美術品所蔵レファレンス事典』より。すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション〈二丁掛のまま〉蔵）

※食事後、遊女部屋の前で腰掛けていた男にもたれかかる女の図。上記〈伊達与作せきの小方 夕照〉とともに横中判二丁掛（一枚に二図）で摺られ、後に縦二図に切断された。



298 おはつ徳兵衛 秋月（すみだ北斎美術館）

☆〈**お梅糸之助 晩鐘**〉（23.8×18.2 ベルリン東洋美術館/ボストン美術館蔵）

※高野山の山道で、お梅の後帯を糸之助がしゃがんで整えている図。

299 お梅糸之助 晩鐘（パブリックドメイン美術館）

☆〈**お花半七 落雁**〉（23.5×17.3）

※歌舞伎や人形浄瑠璃（『**長町女腹切**』など）の題材。京都で起きたお花と半七の心中事件を扱う。



☆〈お染久松 春花〉 (23.2×17.5 ウースター美術館：バンクハフト・コレクション蔵)



※菅専助の浄瑠璃「染模様妹背門松」や鶴屋南北の歌舞伎「お染久松色読販」等の取材。大阪で起きたお染と久松の心中事件を扱う。

300 お染久松 春花 (パブリックドメイン美術館)

●肉筆画「養老の孝子図」A (享和年間〈1801~04〉)。絹本着色一幅。東陽画狂人北斎。「画」字はない。印亀毛蛇足。96.0×32.1 日本浮世絵博物館蔵)

※能の「養老」から。光頭の樵が左手で酒になつた瀧の水を瓢箪に汲みとっている図。浅草庵市人の賛「孝行の心を天も水にせず 酒とくまする養老の瀧」がある。

●肉筆画「養老の孝子図」B (享和年間〈1801~04〉)。絹本着色対。東陽画狂人北斎。「画」字はない。印亀毛蛇足。浅草庵市人の賛。101.3×29.4 個人蔵)

※同年作で同画趣のもの。頭巾を被った樵が右手で酒になった瀧の水を汲みとっている図。浅草庵市人の賛は図Aと同一である。「養老の孝子図」A Bは対であったか。

※上記二図の「東陽(江戸)」の落款から、地方からの依頼と思われる。浅草庵市人の賛から浅草側の三陽三河擣衣連に関わる人物からの注文と考えられている。



301 養老の孝子図：右A図 左B図 (2005 北斎展図録より転載)

●肉筆画「六玉川」(享和年間〈1801~04〉)。紙本着色揃物。各一幅。文化初年頃の『秀逸 六玉川』『六玉川』と同画題だが、本図は肉筆画であり絵の寸法も大きく違う)

※元来六曲一隻の屏風の「六玉川図」であったが、現在では掛幅として確認されている。

☆〈井出の玉川〉(「山吹の玉川」とも。紙本一幅。北斎画。印画狂人。101.0×41.4 千葉市美術館蔵)

※京都府綴喜郡井出町の玉川。藤原俊成の和歌「駒とめてなほ水飼はん山吹のはなの露添ふ井出の玉川」(新古今和歌集)からの着想。両岸に山吹が咲く川を、公家の少年が背負われて渡る図。古歌では「山吹」の花が象徴となる。

302 井出の玉川 (千葉市美術館)

☆〈萩の玉川〉(「野路の玉川」「近江の玉川」「秋の土橋」とも。



紙本一幅。不染居北斎画。印画狂人。122.8×42.7 板橋区立美術館蔵

※滋賀県草津市野路町にある玉川。源俊頼の和歌「あすもこむ野路の玉川萩こえて 色なる波に月宿りけり」（千載和歌集）からの着想。

小さな流れに架かる土橋と萩を配した図。古歌では「萩」が象徴となる。この図のみ不染居北斎の落款。 303 萩の玉川（板橋区立美術館）

☆〈千鳥の玉川〉（「野田の玉川」とも。紙本一幅。画狂人北斎画。

印画狂人。123.0×42.0 すみだ北斎美術館/塩とたばこの博物館蔵



※宮城県塩竈市大日向から多賀城市内を通り砂押川に注ぐ小川。能因の和歌「夕されば潮風越してみちのくの 野田の玉川千鳥鳴くなり」（新古今和歌集）からの着想。飛来する二羽の千鳥と激しい流れの川の図。古歌では「千鳥」が象徴となる。

304 千鳥の玉川（すみだ北斎美術館）

☆〈調布の玉川〉（「武蔵手作」とも。紙本一幅。

北斎画。印画狂人。126.5×44.0 北斎館蔵）

※東京都と神奈川県の間を流れる多摩川。藤原定家の和歌「調布やさらす垣根の朝露を つらぬきとめぬ玉川の里」（拾遺愚草）からの着想。川辺の垣根のそばで、布を干す男と側で打ち終わった布を駕籠に入れて持っている母親。大きな臼で棒の杵で砧後の布を取り出す二人の子供。布を打つ古歌では「晒布」が象徴となる。

☆〈三島の玉川〉（「濤衣の玉川」「砧の玉川」「摂津の玉川」とも。紙本一幅。北斎画。

印画狂人。88.2×41.0 北斎館蔵）

※他の5図に比べ、上下が切り詰められている。大阪府高槻市南部を流れる川で、源俊頼の和歌「松風の音だに秋はさびしきに 衣うつなり玉川の里」（千載和歌集）や、相模の和歌「見渡せば波のしがらみかけてけり 卯の花咲ける玉川の里」（後拾遺和歌集）からの着想。茅屋の脇で砧を打つ夫婦と子どもの図。背後に卯の花（ウツギの花）が描かれ「打つ木」と掛けている。掛軸装の同図もある。古歌では「卯の花」が象徴となる。

☆〈高野の玉川〉（「紀伊の国 毒の玉川」とも）

※この図は現存せず。この川は、和歌山県高野山の奥院の大師廟近くを流れる川。古歌では「氷」「旅人」が象徴となる。

●肉筆画「鶏竹図」（「竹鶏図」とも。北斎を名のる40代の作。印号の「亀毛蛇足」の使用は享和3年頃からとされているので、享和3年～文化4年（1803～1807）の間か。着色一幅。太田錦城の賛。歩月老人北斎。印亀毛蛇足。110.0×51.0 個人蔵）

※平成26年（2004）11月、東京の美術商がデンマークの競売で落札し、新発見となった。イギリスの建築家ジョサイア・コンドル（1852～1920 明治期に来日し建築を指導）の旧蔵品といわれる（「朝日新聞デジタル」2016/12/30より）。中国南蘋派の描写で、竹を背景に、石灯籠の上にとまる鶏の図。儒学者太田錦城（1765～1825）の賛がある。



305 鶏竹図 (太田記念美術館)

※内藤正人・慶応大教授 (江戸絵画) は「落款、印、画風、どれも北斎作と疑う余地はない」と話す。印の状態などから、「北斎」を名乗って数年ごろの40代の作品とみる。

「鶏と竹を描いた北斎の肉筆画は初めて見た。竹の葉の色の変化などは浮世絵にはないもので、中国系の(花鳥画を得意とする)南蘋(なんびん)派の描写を消化した写生画といえる。新鮮な作風で、まさに鶏の飛躍のごとく上向きに脂の乗っている時期。できは非常によく、貴重な発見だ」と評価する(「朝日新聞」より)。

※「歩月老人」の号は他では未見。

●肉筆画「郭子儀」(享和年間〈1801~04〉絹本着色一幅。画狂人北斎図 印 亀毛蛇足。74.9×27.7 すみだ北斎美術館蔵)



306 郭子儀 (すみだ北斎美術館)

※郭子儀は、唐の武将。後に汾陽王となった。家人三千人ともいわれ、皆栄達し、郭子儀も長寿であったため、めでたい画材として取り上げられる。図は、立っている郭子儀の後ろに多くの子供たちが描かれる。真筆を疑問視する向きもある。弘化4年(1847)に「郭子儀子孫繁栄図」も描いている。



●肉筆画「擬宝珠に白鷺図」(享和年間〈1801~4〉。紙本着色一幅。画狂人北斎画。印 亀毛蛇足。85.5×25.4 フリーア美術館蔵)

※擬宝珠の先端に白鷺がとまっている墨絵風の図。

●錦絵「不式之峰」(享和年間〈1801~04〉。大判色摺。無款。24.7×37.1 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)



※富士の見える峠で馬の背に横座りして乗り、煙管を使いながら富士山を見て休んでいる馬子。天秤の荷物を担ぐ男が馬子の方を向いている。その側で笠を被って杖を立てている男。図左には、赤子を背負って鋤を手にして煙管を使っている農婦。

307 不式之峰 (すみだ北斎美術館)

●錦絵「丸枠画題名所」(仮題。享和年間〈1801~04〉。図上の丸枠の中に画題が記されているのが特徴)

☆〈飛鳥山〉(無款。12.7×18.7 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※飛鳥山の桜見物の人々や、休み茶屋の前や大きな案内石の前に行く人々が小さく鳥瞰で描かれる。

☆〈王子のせいらん〉（画狂人北斎画。12.8×18.6 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※王子稲荷に参詣する人々が門をくぐっている。門の先には社に続く登り道と、空には雁の群れが描かれる。

☆〈隅田川の秋の月〉（画狂人北斎画、12.8×18.7 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※隅田川の岸辺の樹木鬱蒼とした中の家々。岸辺には数艘の舟が浮かんでいる。

●扇面画「都鳥図」（享和年間〈1801～04〉扇面画。色摺一面。画狂人北斎。

花押 7.7×51.3 摘水軒記念文化振興財団蔵：すみだ北斎美術館寄託）

●摺物「一筆斎文調」（享和元年～2年か〈1801～02〉）

※6月12日、文調七回忌が柳橋の万八楼注で行われ、出席した歌川豊広・堤孫二（堤等琳）・春秀蝶・寿香亭目吉・歌川豊国・画狂人北斎・喜多川歌麿・長谷川雪旦・勝川春英らが摺物に絵や文を添える（早稲田大学演劇博物館蔵『芝居画図録1』による）。

注）万八楼：万屋八郎兵衛が柳橋の隅田側沿いに建てた高級料亭。神田川が隅田川に合流する角地にあった。

●摺物「伊沢の富士」（享和年間〈1801～04〉。色摺。画狂人北斎画。16.2

×46.9 ハーバード大学アーサー・サッラー・美術館蔵）

※春霞の向こうに残雪の富士山が描かれる。澄んだ青色の雲と海面が春の暖かさを醸し出している。『富嶽三十六景』でも「甲州伊沢 暁」（天保2年：1831）で富士を描いている。

●摺物「のろま狂言」（享和2年～4年〈1802～04〉。色摺。揃物。画狂人北斎画）

※「のろま狂言」は、人形浄瑠璃の間狂言として行われ、野呂松勘兵衛やのろま次兵衛が名手として知られた。江戸後期には衰退した。現在は佐渡島に郷土芸能として残る。

『滑稽諧謔能間狂言全集』（大正7年3月。大日本教育書院。伊東喜一郎編輯。国立国会図書館デジタルコレクションより）に以下の作品の基となった狂言が収録されている。図のサイズは一定でない。

☆〈犬山伏〉（14.0×15.2 すみだ北斎美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション）

※口論する山伏と僧侶が、茶屋の仲裁で、人食い犬を祈り鎮めた方を勝ちとする話。図は、山伏と僧侶の人形をそれぞれ持つ二人の女を描く。

☆〈たら福大じん〉（18.5×15.6 太田記念美術館：長瀬コレクション）

※妓楼でいくら金を使っても太夫に嫌われてばかりの大尽（遊郭で遊ぶ金持ち）を、茶屋の男が面白みに欠けるからだと言ったので、判じ物の面白い言葉のやり取りの末、漸く

太夫の心をつかむことができたという話。たら福大尺の人形を持つ女と、横兵庫齋の花魁の人形を持つ女の図。

☆〈小かち〉 (21.7×16.6。フランス国立図書館/太田記念美術館：長瀬コレクション)

※狂言の「小鍛冶」の人形を操る二人の女の図。寝てばかりで仕事をしない京都三条の刀工の小鍛冶宗近が、童子姿の氏神の稲荷大明神の狐に助けられ、勅使より依頼された剣を鍛え上げるという話。左の女が狐の化身の人形を、右の女性が滑稽な表情をした宗近の人形を操っている。「先春の夢にも一寸寝てみたし いつれ狐の鍛冶か合樋 向山彦」、「さくものと鶯もけさ梅が門 ひらけは御慶三条の小鍛冶 花田袖廣」の狂歌が記される。



308 小かち (フランス国立図書館)

☆〈かゝミとき〉 (13.5×18.4 日本浮世絵博物館蔵)

※二人の女人形使いが額の広い侍と頭巾を被った男を、手を差し出して操っている。

☆〈たぬきつか〉 (18.5×15.6 日本浮世絵博物館/サタフェリー・ダークスコレクション蔵)

※二人の女が、角頭巾の人形と立烏帽子を被り素襖姿の人形を操っている。

●摺物「駒遊びの子と母」 (享和年間〈1801~04〉色摺)

※春駒 (玩具の馬) にまたがる子と、立ってそれを見ている母親の図。

●摺物「鯉の滝登りを眺める貴人」 (享和年間〈1801~04〉)。全紙判色摺。応需画狂人北斎画。42.8×57.0 すみだ北斎美術館蔵)

※鍵型に曲がる廊下に立って、立烏帽子の貴人が手をかざして滝の鯉を眺めている。庭先の老松の近くで、裾の長い下襲を着た貴人も滝を見ている。

●摺物「西王母」 (享和年間〈1801~04〉)。色摺。画狂人北斎画。16.6×7.3 フランス国立図書館蔵)

※西王母の前で拱手のように両手を顔の前で結んで礼をする女の図。背後には桃の実のなった木が描かれる。309 西王母 (フランス国立図書館)

●摺物「観桜」 (享和年間〈1801~04〉)。横大々判色摺。宗理画。38.6×52.5 名古屋テレビ放送蔵)

※上半分に、毛氈を敷いて桜を楽しむ狂歌師二人、その前に立つ華やかな髪飾りと衣装の娘と、笠に短冊や正月の飾り物をつけたものを肩にした年増、供の小奴を描く。下半分に、逆さ文字で「千穂萬大々叶」と書かれた長唄の番組を記載する。



※2007年12月『北斎展』図録（東京新聞刊）では、「宗理画」（「宗理」号は寛政6年～13年〈1794～1801〉に使用）とある本図を享和年間の作としている（p231）。

●摺物「見立二十四孝」（享和年間〈1801～04〉）。色摺。画狂人北斎画。伊勢屋利兵衛版。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵

☆〈楊香〉（20.5×14.2）楊香は晋の魯国の人。14歳の時、栗を取ろうとしていた父を襲ってきた虎に向かって自分が身代りになって父親を助けようとした話からの取材。虎の屏風絵の前で弓矢を持っておどけているのを、屏風の陰から母親が見ている図。

☆〈田毎月丸〉（22.8×18.0）仏像の掘られた石碑の前に立つ二人の女。

●摺物「菖蒲池児戯」（享和年間〈1801～04〉）。色摺。画狂人北斎画。26.0×39.0 太田記念美術館蔵

※くの字に渡した板橋のある菖蒲の咲く池に入って菖蒲を刈る子どもと、池の亀を捕まえて持ち上げる子ども。橋の手前ではその様子を見ている子どもの腰紐を引く女と、扇子をかざすダラリ帯の女。

●摺物「江の島詣」（享和年間〈1801～04〉）。横長判（半切）色摺。画狂人北斎画。19.3×54.0 千葉市美術館蔵

※元は全紙判下半分に狂歌が書かれていたものと思われる。潮が引いた江の島への中州の道に行く二人の女。その一人と拳遊びをしている二人の子ども。側では荷物運びの男が、荷物を下ろしている。図の右には江の島に続く中洲に行く参詣の人々が小さく描かれる。

●摺物「忠臣水滸伝 八番ノ内 速勘平」（享和年間〈1801～04〉）。色摺。画狂人北斎画。19.3×8.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵

※読本『忠臣水滸伝』（前編：寛政11年〈1799〉、後編：享和元年〈1801〉）。山東京伝作の前編に登場する八人に見立てた美人絵の揃物の一。蓑を着て右手に松明を持ち、左手で卒塔婆を担いだ「速勘平」の姿を、本図では糸を多く垂らしたものを羽織り、右手に手燭を持ち、左手に聯注を持つ美人の姿で表されている。「野あそひに持し火繩は消なから四五間さきにもゆる陽炎 陽家浜道」、「土筆かりさくらかりよとかりくらす さつおにあらぬ春のかり人 松風台」の狂歌が記される。

注）聯：書や絵を書き、または彫刻して、柱や壁などの左右に相對して掛けて飾りとする細長い板（「デジタル大辞泉」による）。

●摺物「羽子板の娘」（享和年間〈1801～04〉）。色摺。画狂人北斎画。13.6×27.8 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵

※横長判の図の右三分の一に絵が描かれ、図左三分の二に狂歌が連記される。図は、羽子板に興じる二人の娘。梅が咲き、後ろでは鶯が飛んでいる。四方歌壇のなど14名の狂歌が記される。



310 羽子板の娘 (すみだ北斎美術館)

●摺物「合筆所作事尽」(享和年間〈1801~04〉)。「見立所作事尽」とも。横長判(半切)色摺。画狂人北斎画 花押。21.4×57.3 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※六人の合筆。図右から、勝川春英、泉守一、初代歌川豊国、雪峰、画狂人北斎、喜多川歌麿。北斎は、牡丹の花笠を被り立て膝に座り、手に持つ牡丹の枝を前に投げ出している姿を描いているところから、石橋物注の舞踊の後シテの姿と見られる(『新北斎展図録』p316)。

横長判の下半分には、舞踊発表の目録が逆さに書かれていたと思われる。

注) 石橋物：歌舞伎舞踊等で獅子を題材とするもの。能の『石橋』の系統に属する(『ブリタニカ国際題百科事典』による)。

- 摺物「大原女と官女」(享和1~文化2〈1801~05〉狂歌摺物。色摺。画狂人北斎画)
- 摺物「子の日の小松と摘み草」(享和1~文化2〈1801~05〉狂歌摺物。色摺。画狂人北斎画)
- 摺物「羽織をたたむ禿」(享和1~文化2〈1801~05〉狂歌摺物。色摺。画狂人北斎画)

享和4/文化1 (2/11~)	(1804)	甲子	45 歳	北斎辰政、時太郎可候、北斎主人、北斎
老人、北斎、画狂老人北斎、画狂人北斎、ほくさゐのふで、	印	辰政：こと (34 歳)、		
富之助：18 歳)、阿美与 (16 歳)、阿鉄 (14 歳)、阿栄 (7 歳)				

◇相撲興行 (3 月、神田明神、10 月、本所回向院)。以下、相撲興行掲載を略す。

◇2 月 12 日 (西洋暦)、イマヌエル・カント没(81)。

◇5 月 18 日、ナポレオン、皇帝に就く。

◇5 月、歌川豊国・喜多川歌麿、筆禍に遭う。大坂で出版された『絵本太閤記』(一編十二冊。法橋〈岡田〉玉山筆)に取材した「太閤五妻洛東遊観之図」の歌川豊国「明智本能寺を囲む処」、喜多川歌麿「太閤、五妻と花見遊覧」、その他勝川春英、喜多川月麿の錦絵などが、寛政2年(1790)の出版禁止令により、太閤時代の武者一枚絵を新たに出版したことや、武将の名前・紋所・戦地名を記入れたことなどで絶版となる。板木・錦絵は没収。歌麿は三日入牢、手鎖五十日。他の画工は手鎖五十日。版元の絵草紙屋辰右衛門、山口屋忠兵衛は所払い・五貫文注以上の罰金となる。

注) 五貫文：商人が使用した銀貨で換算すると、江戸中期から末期は、1両=5貫文=5000文。1文は、現在の価格(2017年現在)に照し合せると約25円が相当と思われるので、約12万5千円以上の罰金だろうか(あくまでも筆者による換算である)。

◇この年の、十返舎一九の黄表紙『化物太平記』(二冊。山口屋忠兵衛版)も同様に、織田信長、明智光秀、豊臣秀吉を茶化し、一九は手鎖50日の刑となる。

※この件により規制が強まり、天正年間(1573~1593)以降の武将(およそ織田信長や豊臣秀吉の時代)の名前・紋所等を用いることを禁じ、一枚絵に和歌・地名以外の詞書を禁じ、大顔之絵及び版本の色刷りを禁止とした。

◇9月7日、ロシア使節レザノフ、漂流民を護送して長崎来航、通商を要求。

◇佐藤鞠塙、寺島村(現東京都墨田区東向島3丁目)に百花園を開く。

○曲亭馬琴、読本『月氷奇縁』。馬琴の読本第一作となる。

○北尾政美(鉄形蕙斎)肉筆図巻「職人尽絵詞」。北斎に影響したか。

★北斎の黄表紙挿絵はこの年までで終了と考えられる。これまで45作以上の挿絵を描いたとされる(萩書店『江戸の絵本 画像とテキストの綾なせる世界』所収、マティ・フローラー「葛飾北斎と初期門人たち一享和・文化・文政期に焦点を絞って」p265)

【絵入読本此人よりひらけたり】

★この頃、浅草に住む。

「(略)専ら画狂人北斎と書名して雷鳴す。画風錦絵草双紙等の尋常にあらず、繡像注読本の差画(挿絵)を多くかきて世に行はれ、絵入読本此人よりひらけたり(此頃絵入読本世に流行す。画法草双紙に似寄らぬを以て貴しとす。(略)浅草に住す)」(『増補浮世絵類考』岩波文庫版『浮世絵類考』p144より)

注) 繡像：読本に登場する人物の似顔絵の意味で用いている。

【読本と肉筆画に意欲、曲亭馬琴との読本コンビの始まり】

●読本『小説比翼文』(享和4年(1804)正月。中本二冊墨摺。曲亭馬琴作。北斎辰政画。鶴屋喜右衛門版。国立国会図書館蔵)

※鳥取藩士平井権八と吉原三浦屋の妓女小紫(濃紫)を題材にしたもの。

311『小説比翼文』見返し画：平井権八と濃紫(国立国会図書館)

この年、曲亭馬琴とのコンビが始まり、文化2年(1805)より本格的に読本挿絵



を手がける。但し、黄表紙では、寛政 6 年〈1794〉（正月の『福寿海无量品玉』三巻（唐山人跋。無款。耕書堂版）の挿絵は無款ながら、画風から春朗の挿絵と認められているので、この作品が馬琴と北斎（春朗）との初のコンビとなる。

●黄表紙『両面出世姿鑑 後編 娘敵討陸友綱 合巻』（1 月。中本一冊。『両面出世



姿鑑 前編 恩愛猿仇討』の後編として刊行。前編との合作解題版。もとは二巻二冊。虚呂利作。時太郎可候画。岩戸屋源八版。17.4×12.6 国立国会図書館/東京都立中央図書館蔵)

※『両面出世姿鑑 前編 恩愛猿仇討』には歌川豊国の挿絵で北斎は描かず。

312『娘敵討陸友綱』最終丁（国立国会図書館）

●狂歌絵本『画本狂歌 山満多山』（正月。美濃判注1色摺

大本三冊。全 32 図。大原亭主人撰。便々館湖鯉鮒閣。袋に「北斎主人画」とある。〈『ピーター・モース・コレクション北斎図録』では無款とするが、『浮世絵大成 8 北斎』では北斎老人画、『2005 北斎展図録』では北斎画としている。蔦屋重三郎版。大英博物館蔵下巻の最終丁に「享和四 甲子 初春 東都書房 蔦屋重三郎梓」の書込みがある。各約 26.3×17.3 国立国会図書館/すみだ北斎美術館/大英博物館/ベレス・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館/フリーア美術館：フルバー・コレクション/オランダ国立民族学博物館蔵。名古屋の菱屋善兵衛の後摺版あり)

注 1) 美濃判：9 寸 (273mm) × 1 尺 3 寸 (393mm)。ほぼ現在の B4 判に近い大きさ。大本とも呼ばれる。

※朱楽管江七回忌追善として刊行されたか（『秘蔵浮世絵大観ベレス・コレクション』で鈴木重三の説を紹介している。p 277）。

跋文に「あし曳の山の手なる景地をさくり画は北斎老人が例のふんてをふるはしたはれ歌はをのれ炭方便々館（略）」とあり、山手辺の景観と風俗を描く。大半は 2 ページ見開きの図だが、上巻の〈玉川上水〉、中巻の〈駒塚橋〉〈聖堂〉、下巻の〈母子の遊び〉は 1 ページの図となっている。画題は山の手と袋の山姥の「山」を掛けている。

※国立国会図書館版の上巻は、大英博物館版と絵の配置が若干違っている。

【上巻】13 丁



☆〈袋〉（すみだ北斎美術館蔵）

313 山満多山「袋」

※いわゆる袋状のものではなく、紙製のブックカバー状のもの。山姥が持つ板に金太郎が筆を持って「狂歌絵本 山満多山 北斎主人」の文字を描いている図。

☆〈市谷八幡〉（題は図中の狂歌から。以下、各図同じ）

※階段を上って来て鳥居の下に顔を出す参詣人。鳥居の前には母親が赤子を抱き、娘があやしている。その側には凧を背負い、正月飾りを持った子どもがいる。



314 市谷八幡（大英博物館）

※市谷八幡は、市谷亀岡八幡宮（現東京都新宿区市谷八幡町15）で、文明11年（1479）、太田道灌が、東の鎌倉・鶴岡八幡宮に対して、「亀岡」と称して、鎌倉の鶴岡八幡宮の分霊を祀って西方の守護神としたもの。

☆〈妙法寺道〉

※妙法寺への参詣人の饅頭笠には、それぞれ「妙」の字が書かれている。煙管をくわえて歩く男や、駕籠に乗っている女、その側に立って男たちを見ている女の側には「南妙法蓮華経」と書かれた幟旗が立てられている。「道」は、目的地までの道の意味であろう。妙法寺は（現東京都杉並区堀ノ内3-48-8）、日蓮宗の寺で「堀之内のおそっさま」と呼ばれ厄除け寺として、全国からの参詣人で賑わった。



315 妙法寺道（大英博物館）

☆〈王子道〉

※「右に にしがはら」「左に おうじみち」と書かれた道標のある分かれ道で、子どもの両を引きあげてぶらんこをする母と娘。その側を通る旅人と供の男。





317 王子道 (国立国会図書館)

注：左ページの二人の女が子どもの手を引き揚げている絵は、国立国会図書館版では〈護国寺〉の左ページ



に挿入されている。

☆〈王子海老屋〉

※下働きの男が大樽に溜めた水を盥に受けて洗っている。

仲居たちも箆や薄手の鍋を持って待っている。海老屋は、寛政 11 年(1799)、扇屋とともに江戸郊外の王子に開業した侍向けの高級料理屋。扇屋は町人向けの料理屋で、玉子焼きで有名。

318 王子海老屋 (大英博物館)

☆〈飛鳥山〉

※桜咲く飛鳥山の茶屋で二人の婦人が休んでいる。その前で酒の角樽を担いで陽気に歩く二人の侍。飛鳥山の桜は八代将軍吉宗が植えて以来、桜の名所となった。

319 飛鳥山 (大英博物館)



☆〈白山神社〉

※「旗桜」と書かれた立て札と。木枠に囲われた桜の老木を眺める二人の婦人と男。その周りで箆で落葉を履く神社の下働きの男。白山神社 (現東京都文京区白山5-31-26) は、五代将軍吉宗と生母桂昌院の親交を受けて、小石川の鎮守となる。数個の旗弁がある旗桜は境内の八幡神社の御神木、江戸三大桜の一つに数えられた。紫陽花神社としても有名。

320 白山神社 (大英博物館)

☆〈護国寺〉

※農作業が終わったのか、頭に菓缶と茶碗、弁当の包みを入れた盥を乗せ、子どもの手



を引いて細い板橋をわたる農婦と、鍬を背負って煙管を加えながら歩く農夫注。背後に小さく護国寺の屋根が見える。

321 護国寺（大英博物館）

護国寺（現東京都文京区大塚5-40-1）は、真言宗豊山派の大本山。天和元年(1681)、五代将軍綱吉が、生母桂昌院の願いにより、彼女の祈願寺として建立した。江戸三十三か所の観音霊場 13 番札所。境内には富士塚がある。

注：国立国会図書館版では、見開き左ページの農婦の絵は、〈王子道〉の左ページに挿入されている。

☆〈高田〉

※高田馬場に近い高台から富士山を眺めている武家の女性三人。木の幹の二股に遠眼鏡をかけている図。高田は、現東京都新宿区高田馬場1 丁目から 4 丁目を指すが、当時は北の豊島区高田や、西の中野区上高田も含めた一帯を「高田」と呼んだ。本図がどこかは詳らかでない。



322 高田（日本浮世絵博物館）

☆〈どんど橋〉

※激しく流れ落ちる滝下で、笊を手にして魚を獲る男たちと、蛇の目傘を日傘にしてそれを見ている婦人と供人。どんど橋は、現在のJR飯田橋駅近くの六叉路付近に流れていた神田川と外堀の合流する所に、飯田橋と隣り合わせに掛かっていた船河原橋のこと。この橋の下に堰があり、常に水が流れ落ちる音がしたので、その音から通称「どんど橋」とよばれたという。ここで魚を獲ったり釣りをする人も多かったという。



323 どんど橋（大英博物館）

☆〈江戸川〉

※高札(判読不能)の立っている川端で、扇子を使いながら螢を狩っている武家の婦人と、螢を入れる袋を持つ婦人。傍らでは、地上に



落ちた蛭を見ている犬と、しゃがみ込んでいる供。

324 江戸川 (大英博物館)

江戸川は、利根川水流の分流で、茨城県、千葉県、埼玉県、東京都を流れる一級河川。当時は現在の江戸川本流(放水路)ではなく「旧江戸川」と呼ばれる川であった。

☆〈玉川上水〉

※1 ページの図。橋桁にしがみついて舟を停める男と、竿で踏ん張る男。玉川上水は、江戸市中へ飲料水を供給していた江戸六上水の一つ。上水とは、上水道として利用される人工の溝渠(土を掘った溝)をいう。羽村から多摩川の水を取り、武蔵野台地を通り、四谷大木戸(現東京都四谷四丁目交差点付近)の水番所まで、標高差 93m、約 43 kmを流れた。そこから地下を通して江戸市中に分配された。慶安6年(1653)に作られた。



325 玉川上水 (大英博物館)

【中巻】10 丁

☆〈駒塚橋〉

※1 ページの図。板橋の上に、蛇の目傘を畳んで持ち、立っている二人の婦人。傍で草鞋の紐を直している男。背後に関口芭蕉庵らしき建物が見える。駒塚橋は、東京都文京区関口1丁目付近の神田川に掛かる橋。橋の北側に老松があり、ここに旅人が馬を繫いだので駒繫橋といわれ、それが訛ったものという説や、源頼朝がここで駒を引き返した所からという説など諸説ある。橋を渡った山の麓に、神田上水堰の鎮守である水神社がある。神社の傍らの胸突坂と呼ばれる急な坂の登り口には、江戸に出てきた松尾芭蕉が3年間住んだことを記念して、芭蕉を慕う人々によって建てられた関口芭蕉庵がある。



326 駒塚橋 (大英博物館)

☆〈大木戸〉

※四谷大木戸の石垣の前で、突然の夕立に慌てる人々。傘を差した番傘には「岩」の文字が大きく描かれている。四谷大木戸は、現在の東京都新宿区四谷交差点付近に、甲州街道

から江戸市中に入る人々の取り締まりのために設けられた。石畳の道に石垣の壁が設けられた。寛政4年(1792)に木戸が廃止になり、人々が楽に行き交うことができるようになった。近くには玉川上水



の四谷水番所みずばんしよが設けられた。

327 大木戸（大英博物館）

☆〈愛宕山〉

※愛宕山の休み処で、くつろぎながら団扇あたまを使って市中や芝浦しばうらの海などを眺める婦人たちと子ども。遠くに五隻の帆掛け船の帆が見える。愛宕山（現東京都港区愛宕1丁目）は、江戸市中の最高峰で、市中や芝浦の海が一望でき、観光の名所となった。

328 愛宕山（大英博物館）



山上には愛宕神社があり、急な石段は、三代将軍家光の所望により、讃岐丸亀藩きぬきまるがめはんの曲垣平九郎まがきへいくろうが馬で駆け上がって山上の梅を取ってきた逸話で有名。北斎は、「新板浮絵芝愛宕山遠見之図」（文化7年頃：1810 伊勢屋利兵版横大判シリーズの一）でも愛宕山からの景観を描いている。

☆〈祇園会〉

※宿の門前から祇園会に出かける男や、赤緋あかしまの提灯を手にして子どもに向き合っている女、その傍に立っている女の姿。図左の幟のぼりに「享和三 癸」とあるが、刊行はこの年正月。祇園会は、京都八坂神社の大祭だが、江戸でも行われた。江戸大伝馬町二丁目の乾（北西）に祇園会御旅所おたびしよがあったという。



329 祇園会（大英博物館）

歌川広重うたがわひろしげには、日本橋一丁目の呉服商・白木屋前しろぎで祇園の神輿みこしを担ぐ『江戸名所道化尽』十七いちちようめ〈老丁目祇園会〉の絵がある。

☆〈内藤新宿〉

※引手茶屋ひきてちやの座敷に七夕飾りを置く男と、それを見ている二人の遊女。一人は団扇を手にして立ち、一人は長煙管を立てて片膝を立てて座り、振り向いて見ている。足元には盆に乗せた茶碗と箱枕こしんが置いてある。

330 内藤新宿（大英博物館）

内藤新宿ないとうしんじゆくは、甲州街道こうしゅうかいどうの日本橋からの最初の宿場。甲州街道と青梅街道おうめかいどうの分岐点



(新宿追分) 辺り一帯 (現東京都新宿区新宿1丁目～3丁目辺)。信濃国高遠藩内藤家の中屋敷があったので、この名がついた。遊郭も盛んで、享保3年(1718)に一旦廃止になったが、文化5年(1808)には再開、旅籠屋50軒、引手茶屋80軒、遊女150人程(再開時に新宿に割り当てられた遊女数の上限数)はいたと思われる。

☆ 〈目白山〉

※目白台の茶屋から外の景色を眺める婦人二人と子ども。夕方の月が出ている。目白台の崖の上には目白不動があり、下には大洗堰が流れ、高田の森を望む名所で、境内には茶屋や料理屋もあった。目白不動は元々、文京区関口にあったが、戦災で焼失、目白不動を示す石碑と本尊は、現在の金乗院(現東京都豊島区高田2-12-39)に移された。331 目白山 (大英博物館)



☆ 〈穴八幡〉



※参詣に行く二人。一人は放つ雀を入れた奉納の箱を抱えている。二人の前には大きな藁座を天秤にかけ、雀の箱を乗せて持ち上げようと腰をかがめている男がいる。

穴八幡宮(現東京都西早稲田 2-1-11)は、虫封じ、商売繁盛、出世・開運に利益があるとされる。旧称は高田八幡宮。

332 穴八幡 (大英博物館)

☆ 〈関口〉

※稲を干した田舎道を、鋤を担いで行く農夫が、鼻をつまんで婦人たちのほうを振り返る。婦人たちは口元に手を当てる仕草。干された麦藁の臭いだろうか。



関口は、現東京都文京区関口1丁目～3丁目付近。目白台から続く高台。松尾芭蕉が二度目の江戸入りの後、この地に3年間住んだので、芭蕉を慕う人々によって、神田川に掛かる駒塚橋の北側に関口芭蕉庵が建てられた。神田川の南側一帯は早稲田田圃が一面に広がっていた(平成26年:史蹟関口芭蕉庵保存会『関口芭蕉庵案内記』p13

掲載写真による)。 333 関口 (大英博物館)

☆ 〈山王〉



田が広がっていた。334 山王 (大英博物館)

※山王の高台で僧侶が雁の群れ飛ぶ空に向けて手を差しだし、まるでその指先から雁が飛び出しているかのように描く。傍で二人の巫女と坊主が踊るような仕草をしている。着物の裾が風で揺れている。山王は、現東京都大田区山王1丁目～4丁目付近の高台。平間街道（現池上通り）沿いの宿場で新井宿があった。山側は將軍家の御狩場で、山下には

☆ 〈十二社〉

※神社の鳥居を下に見る高台に、参詣がてら立ち寄った趣の男と奥方。松の木の根元には、木につかまりながら崖下に足を投げ出す供の小奴。

十二社は、現東京都新宿区西新宿付近で、角筈と呼ばれていた。紀州出身の鈴木九郎が、この地に故郷の熊野三山から十二所権現を勧請した熊野神社（現東京都新宿区西新宿2-11-2。当時は熊野十二所権現社と呼ばれていたという）がある。近くに十二社池があり名所として賑わい、茶屋や料亭も立ち並んでいた。



335 十二社 (大英博物館)

☆ 〈聖堂〉

※1 ページの図。湯島聖堂の見える部屋から外を見ている婦人と坊主頭の小奴。窓の向こうには木々のなかに聖堂の屋根が見える。聖堂は、湯島聖堂（現東京都文京区湯島1-4-25）のこと。元禄3年（1690）五代將軍綱吉によって建てられた孔子廟。後に幕府の学問所、昌平坂学問所（昌平齋）となった。針葉樹林や広葉樹林などの丘の上に建てられた。寛政11年（1799）に大改築された。



336 聖堂 (大英博物館)

【下巻】 10 丁



☆ 〈母子の遊び〉

※1 ページの図。屋根を下に見る高台で、独楽遊びをする子どもを見ている母親の手に、別の子どもがぶら下がっている。

337 母子の遊び (大英博物館)

☆ 〈雑司ヶ谷〉 ※寺の入り口の石造りの金剛力士像を見る男と、松の木の側に立つ参詣の二人。日蓮の御会式に訪れたのだろうか。

雑司ヶ谷は、現在の東京都豊島区雑司ヶ谷1丁目～3丁目付近。元来は北豊島郡雑司ヶ谷村。北斎の信仰する日蓮宗の寺が点在する地域。参道からの桜並木で有名な法明寺（東京都豊島区南池袋3-18-18）、太田蜀山人の狂歌碑がある本納寺（東京都豊島区雑司ヶ谷3-19-14）、雨乞いと皮膚病の祈願寺の清立院（東京都豊島区南池袋4-25-6）などがある。



また、子授けや子育ての神で、大銀杏で名高い鬼子母神堂（東京都豊島区雑司ヶ谷3-15-20）もある。

338 雑司ヶ谷（大英博物館）

☆〈西向観音〉

※紅葉咲く丘の上に立つ僧侶と二人の婦人。丘の下方には社殿の屋根が見える。西向観音

（現東京都新宿区新宿6-21-11）は、社殿が西に向いているのでこの名がある。三代将軍家光が鷹狩の際、黄金の棗を下賜したという伝説から棗の天神とも呼ばれる。太田道灌の山吹の伝説で、太田道灌に山吹の花を差し出した紅皿という女性の墓といわれ板碑がある。寺の前の石段は山吹坂と呼ばれる。小高く西向きなので、富士山がよく見えたという。



339 西向観音（大英博物館）

☆〈赤城大明神〉

※「赤城大明神」の額が掛かる赤い鳥居の上方から境内に立つ人を描く。袴を着た子どもの手を引く母親は、子どもの成長の祝いだろうか。手水場の前では、揚帽子（角隠し）を被った女性の人形を担いでいる人形遣いが、こま犬の張りぼてを頭上に掲げている子どもと一緒にいる。

赤城大明神（現東京都新宿区赤城元町1-10）は、群馬県の赤城神社の分霊を祀ったのが始まり。数度の遷宮を経て弘治元年（1683）現在の所に遷ったといわれる。幕府により牛込の総鎮守に位置づけられ、日枝神社と神田明神と共に江戸三社と称された。



340 赤城大明神（大英博物館）

☆〈諏訪明神社〉

※船に乗った三人の婦人が、船跡で割れた川面の薄氷に興味を示している。諏訪明神社は、信濃国諏訪の諏訪大社の分霊社だが、江戸には現在の東京都台東区駒形1-4-15の神社と、

東京都荒川区西日暮里3-4-8 の神社などがある。北斎がどちらの神社を念頭に置いていたのか不明。このシリーズは江戸郊外を描いているので、あるいは荒川区の諏訪明神とも考えられるが、川のある所とすれば駒形だろうか。川面の氷の図は、諏訪湖の氷渡りのイメージであろう。

341 諏訪明神社 (大英博物館)



☆ 〈牛込毘沙門天〉

※境内の露店で飴細工を作りながら売る男を、御高祖頭巾を被った年増と娘が見ながら歩く。後ろに縁日で買った植物を持っている男がいる。牛込毘沙門天 (東京都新宿区神楽坂5-36) は、日蓮宗の善国寺のこと。毘沙門天は、仏教で四天王の一人で、仏法と帰依する人々を守る仏神。境内で露店が出たのは、この寺が始まりという。近くに赤城大明神がある。

342 牛込毘沙門天 (大英博物館)



☆ 〈植木屋〉

※男が如雨露で植木に水をやっている。それを盆栽の置いてある部屋から、反物を手にしながら見ている奥方がいる。

343 植木屋 (大英博物館)



☆ 〈魚板橋〉



※雪道を頭巾を被って傘を半分閉じて持ちながら歩く女と、笠を被った女が歩く。向かいから傘を広げ、顔を隠して来る二本差しの男。魚板橋がどこか不明。

344 魚板橋 (大英博物館)

☆ 〈朱楽菅江の碑文〉

※朱楽菅江の辞世の狂歌の碑文の拓本を取った後、墨を塗る刷毛を持って碑文に向かっている僧侶。その脇でしゃがんで墨箱を持っている女。図の右には写し取った拓本の紙を持って立っている女。

345 朱楽菅江の碑文 (大英博物館)

朱楽菅江の辞世の狂歌碑は、三囲神社 (東京



都墨田区向島2-5-17) と関口芭蕉庵(東京都文京区関口2-11-3) とにある。関口芭蕉庵については〈駒塚橋〉〈関口〉の項を参照。三囲神社と関口芭蕉庵のどちらを念頭に置いた絵なのか不明だが、関口芭蕉庵の碑は、朱楽菅江の没した翌年の寛政11年(1799)に建てられていることや、このシリーズでは関口の地の景観を多くとり上げていることから、関口芭蕉庵を念頭に置いたものか。辞世狂歌は「執着の心や娑婆に残るらむ よしのの桜さらしなの月」

☆〈獅子舞〉

※杉の葉で作った衝立を背にして、太鼓と笛による囃子方と獅子舞を踊る男。正月用の鮭を風呂敷の重箱の上に乗せて歩きながら、獅子舞に振り返る婦人。縁台の杵と提灯を持って歩く職人。荷物を肩に乗せた行商人など、正月のめでたさを描いてこのシリーズを締めくくる。



346 獅子舞 (大英博物館)

●版木「山満多山 墨版木」(桜材 5 枚。各 24.2×37.8 オランダ国立民族学博物館蔵)

※この年正月に売り出された「山満多山」の版木で、薦屋重三郎から菱屋金兵衛に売り出されたものがシーボルトの手に入ったもの。このうち一枚の裏面に「東都勝景一覽」の一図が彫られているという(1988年『シーボルトと日本展』図録 p176)。

●摺物『春興五十三駄之内』(色摺揃物。1 月。「東海道五十三次」物の一。「狂歌入り東海道」とも。正月。この年 2 月 11 日に文化元年に改元される前の刊行であるので、享和 4 年の刊行とする。九ツ切。画狂人北斎画。版元不明。ボストン美術館/すみだ北斎美術館・ヒーターモース・コレクション/東京国立博物館/島根県立美術館:永田コレクション/プーシキン美術館/太田記念美術館:長瀬コレクション/ホノルル美術館蔵)

※北斎摺物中最大枚数のシリーズ。浅草庵市人が率いる浅草側の三河擣衣連の依頼による正月の摺物。初摺は極めて少ないとされる。

横小判 51 図と横長判 8 図の全 59 図。絵の脇に宿場名と次の宿場までの距離、及び「画狂人北斎画」が記されている。「藤沢」と「石薬寺」図中に「享和甲子春」とある。

〈鞆子〉〈藤枝〉の図の枠外に画題の「春興五十三駄之内」の書き込みがある。

〈日本橋〉〈原〉〈鞆子〉〈藤枝〉〈秣(秋)葉山之春里(里は「戸の下に里」の字)〉〈鳳来寺春景〉〈岡崎〉〈宮〉は横長判(横二倍の大きさ)。「京」図が描かれたかは不明。

※当初、狂歌入りであったが、後に狂歌が削られて、弟子の柳川重信が〈鳴海〉など 8 図を書き加えて無題で文政年間(1818~30)に改編再刊された(掲載図で狂歌のないもの)。

柳川重信により加えられた図は、〈日本橋〉〈六江(ママ)渡〉〈原〉〈鞆子〉〈藤枝〉〈鳴海〉〈宮〉〈京〉。いずれも「柳川画」の落款あり。一方で削られた画は、〈日本橋〉〈品川宿〉〈原〉〈鞆子〉〈藤枝〉〈秣(秋)葉山之春里(戸の下に里)〉

〈鳳来寺春景〉 〈岡寄〉 〈宮〉 の9図。「柳川画」も比較のために掲載する。

更に北斎没後（刊行年不明）には同画集が「北斎翁之志遠里」名として再再刊された。
（以上、永田生慈監修・解説『葛飾北斎 東海道五十三次』岩崎美術社。1994年。P158）

※人物中心のシリーズだが〈鳳来寺春景〉のみ人物が描かれない。すみだ北斎美術館蔵版は、折帖装一帖に貼り込まれている。東海道五十三次の風物を題材にし、大半に女性風俗が描かれ、北斎の美人画集の趣となっている。以下、主に後摺図を掲載する。

〈日本橋〉（横長判〈横二倍〉）



上図：347 日本橋（狂歌入り：和泉市久保惣記念美術館蔵）

下図：348 日本橋（ボストン美術館）

※黒く長い御高祖頭巾を被った家の女房と、荷箱の柄を担ぐ者、供の者等が日本橋を渡る。

349 日本橋（柳川重信の後摺図 フランス国立図書館）

☆ 〈品川〉

※手拭を被った三人の女が浅草海苔を漉いて作っている。



350 品川（ボストン美術館）

351 六郷渡し (柳川重信の後摺図：フランス国立図書館)

☆〈品川宿〉

※藁で作った市女笠や煙管など、藁細工が描かれる。人物は描かれない。

☆〈川寄〉 (太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)



※川で布を晒している女。晒した布を棒を使って干している男。

352 川寄 (ボストン美術館)



☆〈神奈川〉

※二人の芸妓風の女が宿の中から体をひねって窓の外の世界を見ている。

☆〈程ヶ谷〉

※小川の側で、馬から鞍を下ろし、盥で馬の足を洗っている農夫。その後ろには鍬が置かれている。

☆〈戸塚〉

※宿の女が通りがかりの二人の旅人を玄関先で呼び込んでいる (島根県立美術館：永田コレクション蔵)。

☆〈藤沢〉

※道標に「享和四甲子年 正月吉日 藤沢宿 これより忍のしま」と書かれている。道標の側の鳥居をくぐる、菅笠を手に持つ女旅人と天秤棒の荷物を担ぐ供の男。その前で姉さん被りの女が、腰をかがめて煙管の灰を捨てようとしている。

☆〈平塚〉 (島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※鎌を持って砥石で研ぎながら木の下で休んでいる農夫の隣で、首に風呂敷の荷物を巻いた旅人が煙管を銜えながら、同じように休んでいる。木の陰に草を入れた箆が置かれ、中には刈り取った草が入っている。

☆〈大磯〉

※大きな「虎が石注」を抱えようとする男。それを見る御高祖頭巾の女が二人。一人は頭巾を脱ぎ首に巻いている。

注) 虎が石：虎御石、虎子石とも。曾我十郎祐成を敵の矢から防いだ石で、祐成の妾であった虎御前に因んで名づけられた石 (図は狂歌入り版)。



353 大磯 (和泉市久保惣記念美術館)

☆〈小田原〉（すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※「本家 うみらう」と書かれた黒く大きな背負い箱を下ろして、^{ひざまず} 跪きながら扇子を仰いでいるういろう売り。その側で、口元に手を当てて立っている女。左の背景には小田原城が描かれる。

☆〈箱根〉

※箱根路を駕籠で行く人、歩いている男女など。馬の背の荷物の上に乗っている男もいる。

☆〈三島〉

※二頭の牛にそれぞれ乗っている二人の子どもが松のある街道を行く。

☆〈沼津〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）。

※松並木の道で熊手を

引いて落ち葉を集めている二人の子ども。背には落ち葉を入れる籠を背負っている。松の木の間から富士山が見える。図は、狂歌入り判。

354 沼津（和泉市久保惣記念美術館）



☆〈吉原〉（ボストン美術館蔵）



※名物の白酒を^{ろくろ} 轆轤で絞り出している家族を描く。

355 吉原（島根県立美術館）

☆〈原〉（12.0×33.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※横長判二枚続き。右半分の図には、梅の咲く山道を黒い御高祖頭巾を被った女や、煙管をくわえながら歩く、菅笠を被った女。側に振り分け荷物の男。左半分の図には大きな富士山を背景に、坂道を下る笠を被った男たち。



356 原（ボストン美術館）

357 原 (柳川重信の後摺図：フランス国立図書館)

☆〈蒲原〉 (すみだ北斎美術館蔵)

※地引網を引く人々。遠くにも同じように地引網を引く人々。海上には漁をする小舟が数艘浮かぶ。

☆〈由井〉

※塩田で塩を含んだ砂を鋤で掻き集めている男二人。右手前には塩屋が描かれ、ここで塩水をかけたものを焼く。



☆〈奥津〉 ※名産のサザエと鮑と甘鯛 (興津鯛) を重ね合わせて描く。人物は描かれな

い。



358 奥津 (太田記念美術館)

☆〈江尻〉

※合羽を着て笠を被った旅人二人。一人は背中に荷物を背負っているため、合羽が箱型にせり出している (島根県立美術館：永田コレクション蔵)。

☆〈府中〉 (島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※竹細工を作っている男に、女が盆に載せた茶碗を差し出そうとしている。女は左手に薬缶を持っている。庭には梅の木がある。

☆〈岡部〉

※宿の入口で草鞋を脱ぐ旅人に、口に手を当てながら茶を差し出す宿の女。

☆〈鞠子〉 (12.0×33.8 太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※横長判二枚続き。名物のとろろ汁を食べる三人の男と、給仕をする二人の女。女の一人が、盆を持ったまま、もういいという仕草の男の袖を引いている。



359 鞠子 (ボストン美術館)

360 鞠子 (柳川重信の後刷図: フランス国立美術館)

☆〈藤枝〉 (11.5×34.3 太田記念美術館: 長瀬コレクション)

/島根県立美術館: 永田コレクション/ホノルル美術館蔵)

※横長判二枚続き。「富士枝本町 瀬戸染飯」と書かれた看板のある店先で、名物の染飯注を売る二人の女。その横には売り台に手を掛けてよじ登ろうとする子ども。



注) 染飯: もち米を蒸し、梶子で黄色に染めたものをすり潰し、小判形にしたものを干した食べ物。道中食であった。図左に五人の狂歌が記されている。



361 藤枝 (狂歌入り ポストン美術館)

362 藤枝 (柳川重信の後摺図: フランス国立美術館)

☆〈島田〉

※大井川の川渡しの人足が侍を肩車して川を渡っている。向こう岸近くには輦台に乗せた駕籠のそばを長槍を持った供人が付き従う。



363 島田 (ポストン美術館)



☆〈金谷〉 (11.3×16.2 太田記念美術館: 長瀬コレクション/島根県立美術館: 永田コレクション蔵)

※名物の飴の餅注を作る二人の女と、入口で餌袋に口を入れて餌を食べている馬。「小夜の中山 飴の餅」と書かれた看板がある。

注) 飴の餅: 水飴を使った餅で、関ヶ原の戦いの際、山内一豊が当地の名物の飴の餅を献上したことで有名になった。竹の皮に五個並べ、5文(約100円)で売ったという。

☆〈日坂〉 (12.0×16.7 太田記念美術館: 長瀬コレクション/島根県立美術館: 永田コレクション蔵)

※鳥居の細工物を肩にかけて、ぶら下げたいくつかの鉦を鳴らす男と、座って小太鼓を叩く年配の男。

☆〈掛川〉 (11.7×16.6 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※葛布や花蓑傘を商う店で商品を扱う女と品定めをする女

☆〈袋井〉

※大黒天の格好をした男が連れてきた馬には「吉」の腹掛けが付けられ、背には打出の小槌が置かれた大きな袋が乗せてある。馬の尻には「萬」の字が染められた布が置かれている。入口で盆に乗せた茶をさし出す女。正月祝いの風景。

☆〈秋葉山之春里注〉 (11.9×34.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※横長版二枚続き。梅の咲く山道できのこ狩りをする女二人と子ども。一人は手をかざして遠くの神社を眺めている。

364 秋葉山之春里 (ボストン美術館)



注：「厘」は戸の下に里が用いられている。

☆〈鳳来寺春景〉 (11.9×34.1 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※二枚続き。画面中央に鳳来寺山注の間に建つ寺を小さく描く。図の右下には「新城」と地名が記され、城を描く。人物は描かれない。

注) 鳳来寺山：愛知県新城市鳳来寺にある 695m の岩山で、古くから霊場としてあった。

☆〈見附〉 (11.8×16.4 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※旅人が茶屋で蕎麦を食べている。店先の看板に「(挽) 抜きそば 十六文」とある。蕎麦はこの辺りの名物として知られていた。挽抜きそばは、精製した上等の白いそば粉を使ったそばであるという。十六文は約 400 円 (一文=25 円で換算)。

☆〈浜松〉 (11.8×16.7 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※高くそびえる松の木の下に小さな茶店があり、そこに向かう徒歩と馬上の旅人。松の左には波の寄せる海が描かれる。

☆〈舞坂〉 (11.7×16.8 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※客と荷物を乗せた大型帆船が二隻船出をしている。

☆〈荒井〉 (12.8×17.6 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※笠を被った三人の旅人が山道を行く。後ろには手拭いを被った旅人が重い荷物を背負っている姿が一部見えている。

☆〈白須賀〉 (11.9×16.6 太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※この宿駅近くの茶店で売った名物の柏餅の粉を練っている男と、傍でそれを見ながら柏餅つくりを手伝っている女房。看板には「かしハ餅 根元名代」とある。

☆〈二川〉 (11.9×16.6 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※梅の木と松の側にある茶店で休む女旅人。縁台に腰かけ足と杖を投げ出している。



365 二川 (ボストン美術館)

☆〈吉田〉 (12.1×16.7 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモースコレクション蔵)

366 吉田 (ボストン美術館)

※「吉田本宿 合ほくち注 甲子屋」と書かれた袋には海老の絵も描かれている。この袋に、おかめの面、藁細工の平たい箆などを重ねて描く。縁起物の図で、人物は描かれない。

注) ほくち：火打石の火を受ける火種。火口は吉田の名産。「忍びや」の火口が有名で火口のトレードマークになったという。この頃(享和

2年)、吉田には6軒のほくち屋があったという(山本祐子・名古屋市博物館調査研究員の「中日新聞」2016年9月2日の記事による)。



☆〈御油〉 (12.0×17.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※梅の見える窓辺で、鏡を見ながら長い髪を梳いている遊女。

☆〈赤坂〉

※柱に糸を括り付け、それを紐に編みながら、側でハイハイする赤子を見ている母親。

367 赤坂 (ボストン美術館)

☆〈藤川〉 (12.3×17.2 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※遠くの赤坂大明神を見て行く馬上の旅人二人と荷物持ち。

☆〈岡崎宿 其二〉 (12.7×18.2 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※図の右に岡崎城を描き、遠景の山々を描いた風景画。「其二」が〈岡崎〉の前に配置さ



れている。

☆〈岡崎〉（12.0×34.2 太田記念美術館：長瀬コレクション/ホノルル美術館蔵）

※横長判二枚続き。矢剥の橋注を行く大名行列の人々の背や笠には雪が被っている。

注) 矢剥の橋：東海道中で最も長い橋。208間（378m）ある。



368 岡崎（太田記念美術館）

☆〈岡崎池鯉鮒之間〉

※「八橋 四丁半」の道標のある道を行く旅人。八橋は、杜若の名勝地。平安の歌人ありわらのなりひらが、「からころも きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる たびをしぞおもふ」と、句頭に「かきつばた」の5文字をいれた折句で「旅の心」を詠んだことで有名。

☆〈池鯉鮒〉

※図の左に池鯉鮒明神の五重塔と寺社の屋根が描かれ、図の右端に八橋神社を描く。手前には民家の屋根を鳥瞰的に描く。

☆〈鳴海〉（11.8×16.5 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館蔵）

※布を絞るために、口に糸をくわえている角隠しを被っている女の前には白い布が広がっている。その左に、畳んだ絞りの布を持って立っている女。鳴海は鳴海絞りで有名な地。



369 鳴海（ボストン美術館）



370 鳴海（柳川重信の後摺図：フランス国立図書館）

☆〈桑名〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※蛤を団扇であおり、煙にむせながら焼いている女と、蛤の入った籠を手にする女。側で見ている子どもがいる。

☆〈宮〉(12.1×34.4 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※横長判二枚続き。梅の咲く道を御高祖頭巾を被った女や、笠を手にして歩く女など三人が行く。その後ろには荷物を担ぐ供人。図左には城が描かれる。



371 宮 (ボストン美術館)

372 宮 (柳川重信の後摺図：フランス国立図書館)

☆〈四日市〉馬の背の両側につけた格子の箱にそれぞれ乗っている女は、ともに煙管をくわえている。馬の鼻先には、しゃがんで草鞋の紐を直している馬子。



☆〈石薬師〉(13.4×18.2 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※石薬師寺注に参詣する旅人。「奉献」と書かれた手洗水の脇に「享和甲子春」と書かれている。

注) 石薬師寺：三重県鈴鹿市石薬師町1番地にある。参勤交代でこの宿を通る大名は、必ずこの寺に参詣して旅の無事を祈ったことで有名。

☆〈庄野〉

※宿の部屋の行燈の側で二人の女が、荷物を膝に乗せて座っている。後ろにも柳梱と風呂敷に包んだ荷物がある。

☆〈亀山〉

※「春」と書かれた提灯が下がる茶屋の店先で、一人の女は座って休み、一人の女は笠に手をやり立っている。足元には棒を渡した風呂敷包が置かれている。遠くには亀山城が見える。

☆〈関〉(11.8×16.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※旅人がほうと息を吐き、遠くを眺めている。側で子どもがしゃがんで向こうの「夷岩注」「大黒岩注」と書かれた岩山にいる猿を指さしている。

注) 夷岩・大黒岩：関宿の地蔵町からの山道には鈴鹿川が左右に流れ、右の山の中腹に蛭子に似た夷岩に続いて大黒岩が現れる。大黒岩は「形やゝ夷にハおとれり」と、太田

南畝は紀行日記『改元紀行』（下巻。享和元年三月八日条。「国立国会図書館デジタルコレクション」より）で述べている。

☆〈坂ノ下〉（13.1×17.8）

※主人と供人が、松の木の下で荷物を下ろし休んでいる。供人はかなたの奇岩（夷岩）を指さしている。

☆〈土山〉

※櫛がいくつか重なって描かれる。人物は描かれな
い。土山は「お六櫛」という櫛の生産が有名。元禄
年間に土山の藪原宿に住んでいたお六という娘が、
みねばりの木注で作った櫛が由来といわれ、土山宿
の名産となった。

注) みねばりの木：峰榛の木。成長が非常に遅い貴重
な木で、非常に硬く、斧が折れるほどであるので

「斧折櫛」といわれる。鳥居峠近くの藪原に多く産した。 373 土山（ポストン美術館）



☆〈水口〉（13.2×18.1）

※母親が酒の入った手桶に手を掛けています。側で赤子が片足をあげてはしゃいでいる。その
後ろでは赤子を支えるようにしている女がいる。「桜川」と書かれた酒樽が部屋の脇に
置かれている。滋賀県甲賀市水口は酒造りで有名。

☆〈石部〉（11.8×16.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※「和中散注」と書かれた標章が図の中央に大きく描かれ、図の右には柵に囲まれた梅の
木が描かれる。人物は描かれない。

注) 和中散：腹痛などに効く道中薬。徳川家康の腹痛に効いたという。この地の和中散
本舗で製造された。

☆〈草津〉

※画題の脇に「女川の里」とある。草津の東方に
ある地名で、菜飯と田楽が有名。図は、女が菜飯
用の菜を俵板の上で刻んでいるところを描く。

374 草津（ポストン美術館：狂歌入り）



☆〈大津〉



375 大津（ポストン美術館）

※画題の脇に「走井」とある。走井は大津
から京都に向かう途中の逢坂大谷町茶屋の
軒場があり、後ろの山中から走り下って湧き
出る水であると『東海道名所図会』（秋里籬

島著 寛政9年)に説明されている(「国立国会図書館デジタルコレクション」より)。湧き出る走井で食べ物や食器などを洗っている男女を描く。宿駅名の下に「京へ三里」とあるが「京」は未発見である。

376 京(柳川重信の後摺図:フランス国立図書館)

※大津の後に狂歌だけの3ページと見返しが続く。

●絵暦「見立芝居絵看板」(1月。八ツ切判摺物。北斎画。19.6×13.7 島根県立美術館:永田コレクション/フランス国立図書館蔵)



※芝居の看板は主に鳥居派の絵師が描いたが、北斎も看板絵を描いたことが知られている。芝居小屋の正面に架けられた大名題看板絵の構図となっている。看板の上には役者の役を描く。左手で刀を持つ大黒天(三升紋の市川団十郎)が中央に座り、弁財天(丸に束ね熨斗紋の瀬川菊之丞)差して、隈どりをした毘沙門天が左側に描かれ、右下には「北斎画」とある。絵の下には「語り」と「大名題」(狂言の題)を書く。大名題には「歳徳寅卯間 きのえね四」注とある。芝居小屋(暖簾の座紋から市村座と分る)の文字看板には「松本八 十一 三 六 山下万 十二 十」と大の月が記されている。



注)「歳徳」は歳徳神のいる所を指す。恵方。「寅卯間」は寅と卯の方向の間をいう。東北東。「きのえね」(甲子)は享和4年を指す。即ちこの年の恵方は東北東を指す。

377 見立芝居絵看板(フランス国立図書館)

●絵暦「台所の母子」(1月。無款)画中の竈に大小月が示される(『年譜』による)。

●絵暦「金毘羅詣の二美人」(1月。無款)美人の帯に大小月が示される(『年譜』による)。

●絵暦「美人爪切り図」(「爪切る美人図」とも。大小。色摺。洋風版画。額枠に描く。横書きひらがなの落款で「ほくさみのふで」。13.1×8.7 すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館:永田コレクション/大英博物館蔵)

※和鋏で左手の爪を切る女性の上半身を大首絵のように、額装のデザインにして描く。図左上に大小月が示され、享和4年(文化元年)用の暦となる。



378 美人爪切り図(島根県立美術館)

●摺物「鳥かごと梅鉢の図」(春。横中判色摺。画狂老人北斎画。19.6×27.4 千葉市美術館蔵)

※図左に「甲子春」とある。山水風の絵付けのある三脚の鉢に梅が咲いている。その脇に紐のついた四角い鳥かごが置かれ、中に白い十姉妹らしい鳥がいる。「きのふまでたてあはせたる障子さへ 明けハ匂ふ春の梅かゝ 渚玉頼」、「霞みたる春のゆうべに月のかさ めすよりひらく梅の花笠 布泉法師」、「見るほとなものに笑ふかくせなれや としも善木の梅のはつ花 三東亭浦舟」他3名の狂歌が記される。

【以下享和末～文化前期】

画狂人北斎、北斎辰政、画狂老北斎、北斎、画狂老人北斎老夫、葛飾北斎、かつしか北

斎、画狂老人北斎、北斎、亀毛蛇足、辰、政、花押

●狂歌絵本『木賊刈』(享和元年～文化2(1801～05)。横長判色摺 摺物。画狂人北斎画。東京国立博物館蔵)

※三河岡崎の狂歌連・三陽擣衣連の依頼。同連の10人と浅草庵市人の狂歌連作を載せる。能「木賊刈」からの着想。同画題は『詩歌写真鏡』(天保4～5年：1833～34)の「木賊刈」にも反映している。

●狂歌絵本『絵本隅田川兩岸一覽』(享和3年～文化3年(1803～06))。『隅田川兩岸一覽』とも。大本三冊。26.6×18.2 美濃判色摺。鶴屋喜右衛門版。前川善兵衛の後修版に記された狂歌師壺十郎成安の序には、巻末に北斎辰政画とあるが、初版にはなし。各平均見開き 18.5×27.2 国立国会図書館/太田記念美術館/ボストン美術館/フーリア美術館：プルーエター・コレクション/オランダ国立民族学博物館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション(後摺：前川善兵衛版)/日本浮世絵博物館/東洋文庫蔵)

※ボストン美術館には版木の墨板と色板240枚が所蔵されているという(国立民族博物館『錦絵はいかにつくられたか』p75)。

※刊行年については、享和元年(1801)説、享和3年(1803)説、文化2年～3年(1804～05)説、文化3年(1806)説、文化元年頃(1803)に作画し、文化5年頃(1808)に刊行したとする諸説がある。また、作画の人物の様式は享和から文化初頭を示すが、刊行は文化13年(1816)であることが明らかになったという(大久保純一『葛飾北斎 浮世絵風景画の大成者』p018 2023 山川出版)。

※天明2年(1781)の鶴岡蘆水の絵「隅田川兩岸一覽」(二帖)から発想と題名を得たものとされる(『原色浮世絵大事典 第8巻 作品三 写楽一北斎』p75)。

※ほとんどが各ページにわたる続絵の構成であるので、一枚一枚の解説は困難であり、ここでの説明はあくまで便宜的である。隅田川西岸から東岸を眺めた景観を描く(本稿は「すみだ北斎美術館」の当該作品パネルの解説を参照した)。

【上巻】

【以下6図の続き絵】

☆〈高輪の暁鳥 不峯の積雪〉2枚続き。

※右頁の狂歌「佐保姫のめした霞の袖のうら 一ばんからす墨をつけたり 壺墨楼奈良輔」

図は、東海道を目指して出発すると、高輪辺りで夜明けになり、暁鳥が鳴くといわれ、高輪の先の品川宿の夜明けの空に鳥が群れ飛んでいる。手前の高輪の茶店では、馬上の旅人たちを女が呼び込んでいる。

※左頁の狂歌「不二山のおろしだいこにさゞ 波の さしみ作れる海の大鉢 歌船亭千綱」

図は、舳先に注連縄の松飾を付けた五大力船に、扇をかざして万歳の祝いをする小舟が近づいている。沖には積雪の富士山が小さく描かれ、手前には積み上げられた石垣がある。

379 高輪の暁鳥 不峯の積雪 (ポストン美術館)



☆〈旭 元船乗初 房総春暁〉2枚続き。

※右頁の狂歌「見渡せば霞の網のひきはへて 千万艘のけさの乗初 遊友館春道」

※左頁の狂歌「遠つ帆は蝶ともみえてうつ 浪のはなの中ゆく千ふね百船 壺玄楼万盃」

図は、渡し船に乗る頭巾の侍や、御高祖頭巾の女や女房、荷物を担いだ行商人たち。船の前と後ろで竿刺す船頭。沖には帆掛舟が多く停泊している。



380 旭 元船乗初 房総春暁 (ポストン美術館)

☆〈佃住吉恵方 筑地の風〉

※右頁の狂歌「船つくだてうと恵方に真住よし 巳午注1の間よろづ藤棚 甲羅千人」

左頁の狂歌「春風に人来る帆とも見ゆるなり 筑地の沖にあぐる袖風 巖亀子」

図は、手前の橋の上には、折烏帽子を被った二本差しの三河万歳の男がおり、その隣に女が立っている。二人の後ろには荷物を担いだ才蔵の男が控えている。橋の中央では「綿ぼうし」と書かれた背負い箱を背負う男が二人に向き合っている。橋の左では二人の子どもが風を揚げ、その一つは市川團十郎の三升紋注2が描かれ、もう一つの風は前頁の左上に掛かって描かれる鳶風となっている。

381 住吉恵方 筑地の風 (ポストン美術館)



注1) 巳午：12月の巳の日や午の日に、その年に亡くなった人のための正月を迎えさせて祝う儀式。「みうま」とも。

注 2) 三升紋：市川団十郎は代々「三升」を名乗り、その紋は、「暫」の図柄に似て、
 枡が三層に重ねられた形。

【以上 10 図の続き絵】

☆〈三俣の白魚 永代春風〉2枚続き。

※右頁の狂歌「水の面に糸の白魚あつまれば 浪にかゝりをみつまたの川 金門守」

※左頁の狂歌「にぎハへる永代橋にやり梅の かほりもたへずわたる春風 鶴毛衣」

図は、手前に、二月の初午祭りに叩く太鼓を、天秤棒の両端にぶら下げて売る男。その後ろには子供の手を引く母親。図の左には母娘と思われる二人の女と供の男。左手奥には永代橋が描かれ、隅田川から別れる三俣には、白魚漁の四つ手網船と、「正一（位）」の字の幟が立つ住吉神社（現東京都中央区佃1-1-14）の社殿の一部が見える。

382 三俣の白魚 永代春風（ボストン美術館）



☆〈市中の花 新寺の新樹〉2枚続き。

※右頁の狂歌「家づとの桜の枝は手折しと あとづけがほに蝶のおひ来る 桐政女」

※左頁の狂歌「日の影のもらぬ木立はふくろうの 目も見ゆるかとおもふまくらさ 京唐橋村雄」

383 市中の花 新寺の新樹（ボストン美術館）

図は、手前の岸辺に桜の花をあしらった揚帽子（角隠し）を被って花見に来た二人の婦人と、供の男が食べ物を入れた箱を持って立っている。その後ろには、願人坊主注が四月八日の灌仏会のための甘茶の道具をぶら下げ



ている。対岸には、右から仙台堀の上之橋、小名木川に掛かる万年橋と、下総国の嶺雲院が深川に移転して新寺として霊雲院（現東京都江東区清澄1-7 にあった）と改称した所の新樹が茂っている。その左には隅田川に架かる新大橋に多くの人往来している。

注) 願人坊主：家々を回って、軽口や阿呆陀羅經（時事風刺の滑稽な俗謡）等を唱え、米や銭をもらう乞食坊主。

☆〈大橋の綱引 元柳橋の子規〉2枚続き。

※右頁の狂歌「波風のなかずのかたはかすミにも 手伝ハせたるはるの綱引 竹女」

384 大橋の綱引 元柳橋の子規（ボストン美術館）

※左頁の狂歌「やよ親の音をまなべかし二声と なかずのかたへ行ほとゝぎす 壺鶯楼可知輔」



図は、手前の元柳橋辺に設けられた縁台で、新大橋手前での投網漁を眺める母子。子どもの着物の背中には市川団十郎の三升紋が染め抜かれている。柳橋の中央の欄干に腰を下ろして休んでいる行商人。大きな傘を日除けにしている婦人たち。欄干に手を掛けて対岸を眺める男、橋の左詰めには、物乞いをする羅漢風の光頭の男が座っている。橋の脇には釣竿を肩にした男もいる。花見土産の桜の枝が「家づと」（家への土産）となる。

☆〈御船蔵 広小路の群衆〉2枚続き。

※左頁に二首の狂歌「水うちて涼しき門へ笛売の 秋を告たる日ぐらしのこゑ 京 俵藤子」「両国の橋のたもとの夕風は そでから袖へぬけるすゞしさ 貢計舎升盛」

図は、手前の岸側の両国広小路の水茶屋などでにぎわう風景を描く。対岸には幕府の御船蔵が並び、その前の川ではシジミをとる人たちが小さく描かれる。図の左には「和漢諸軍談 はなし 立川」と書いた幟を立てた小屋で軍談を話す男などの様子が、次の「其二」につながって描かれる。左端には、天秤棒に御幣を詰めて運ぶ職人の姿も見える。



385 御船蔵 広小路の群衆 (ボストン美術館)

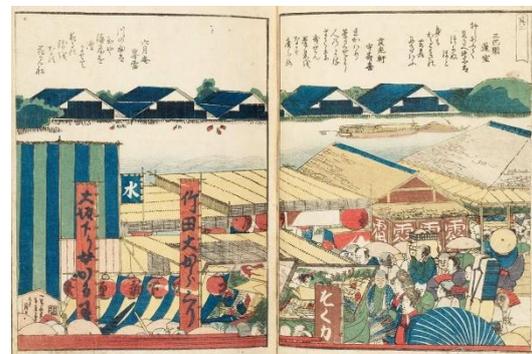
☆「其二」2枚続き。

※右頁の狂歌「おしおふて足さへ地にはつかぬほど 身もかるわざの芝居にぎはふ 三巴園逢室」、「立かハリ茶見せに人のよるまでも 幾せん群集をなす広小路 貢光軒宇寿喜」

※左頁の狂歌「川の面は玉や鑪屋注を漕まぜて 夜の錦をなす花見船 六日庵峯雪」

注) 玉や鑪屋：玉屋も鑪屋も江戸花火の二大火師。

図は、「大坂下りの女かるわざ」や「竹田大からくり」とかいた幟の立つ芝居小屋が描かれる。



386 其二 (ボストン美術館)

【中巻】

【以下 10 図の続き絵】。

☆「両国納涼 一の橋弁天」2枚続き。

387 両国納涼 一の橋弁天 (ボストン美術館)

※右頁の狂歌「不二の雪筑波のしげミ両がけに 夜ふくすゞし両国の橋 半月楼鹿毛麻呂」、「たのしさの此うへはなしかたびらの 呂をおし通す夕涼舟 松齋千代住」



※左頁の狂歌「江のしまをこゝにうつせし貝屏風 宮の扉をつたふでゝむし 嘘言皮成」

図は、人々で埋め尽くされた両国橋。川には納涼の屋形船・屋根船や猪牙船が多く航行している。橋の中央には高札と橋検番の屋根が見える。橋の右側の対岸には材木が立ち並ぶ豎川（立川）辺が見え、その手前には一の橋、更に右には杉山和一検校が江の島弁財天を勧請した江島杉山神社（現東京都墨田区千歳1-8-2）が描かれる。手前の両国広小路には「江戸じまん」の幟が立ち、その右には大山参りで奉納する「奉納大山石大権現」注と書いた板で作った大きな木太刀を持つ人もいる。木太刀は奉納後、他の人が奉納した物をお守りとして持ち帰る習慣があったという。

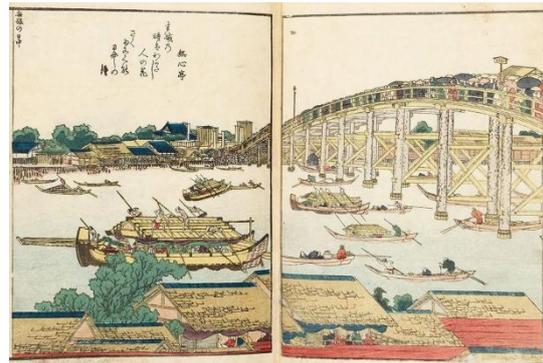
注) 大山石大権現：大山右尊大権現のこと。大山山岳信仰と修験道が融合した神。

☆「無縁の日中」2枚続き。

388 無縁の日中（ボストン美術館）

※左頁の狂歌「生滅の時はわかたし人の花 きて両ごくの日中の鐘 無心亭」

図は、「両国納涼 一の橋弁天」からの続き絵。標題は歌意を踏まえる。



389「両国納涼 一の橋弁天」と「無縁の日中」の連続図（すみだ北斎美術館）

☆「新柳橋の白雨 御竹蔵の虹」2枚続き。

※右頁の狂歌「袖笠をかぶる間もなく柳ばし みどりの髪もぬるゝ夕だち 梅子」

左頁の狂歌「竹蔵の堀にも虹の影見えて はや両ごくの橋かとぞおもふ 壺山楼高喜」

390 新柳橋の白雨 御竹蔵の虹（ボストン美術館）

図は、手前の神田川に掛かる新柳橋の上で、突然の雨に慌てて番傘を開いている男。着物や布を被って走る男たち。蛇の目傘をすばめて飛ばされないようにして急ぐ女たち。



左端の男の広げた番傘には「新鳥越」（浅草新鳥越町にあった料理屋・八百善のこと）と書かれている。向こう岸には幕府御蔵米を貯蔵した御竹蔵（現両国国技館や江戸東京博物館辺り）の側の御蔵橋（隅田川と御竹蔵をつなぐ入り堀に掛かった橋。現在は無い）が描かれる。

☆「首尾松の鉤船 椎木の夕蟬」2枚続き。

※右頁の狂歌「美しさ松は千とせを延あがり 延あがり見る舟のたおやめ 千歌園序文」

左頁の狂歌「時まだき見あぐる椎の青空に ところ定めず蟬のしぐるゝ 全詠」

手前の松の下で、船に乗って釣りを楽しむ二人の婦人や笠を被った男たち。船首には供と思われる男も釣り糸を垂れている。図の対岸の、椎の木屋敷（本所の平戸藩松浦家上屋敷。現東京都墨田区横網1-12-9 旧両国公会堂、現刀剣博物館辺）に植えられた椎は「落葉無き椎の木」といわれ、本所七不思議の一つであった。

首尾松は、現東京都台東区蔵前1丁目（蔵前橋西詰）の説明板には「この碑から約百メートル川下に当たる。浅草御蔵の四番堀と五番堀のあいだの隅田川岸に、枝が川面にさしかかるように枝垂れていた『首尾の松』があった」とあり、その由来について諸説の一つとして「1、寛永年間（1624～43）に隅田川が氾濫したとき、三代将軍家光の面前で謹慎中の阿倍豊後守忠秋が、列中に伍している中から進み出て、人馬もろとも勇躍して川中に飛び入り見事対岸に渡りつき、家光がこれを賞して勘気を解いたので、傍らにあった松を「首尾の松」と称したという。2、吉原に遊びに行く通人たちは、隅田川をさかのぼり山谷堀から入り込んだものだが、上がり下りの舟が、途中この松陰によって「首尾」を求め語ったところからの説。」と丁寧に説明している。その他、吉原通いの船の道しるべでもあったという。



391 首尾松の鉤船 椎木の夕蟬（ボストン美術館）

☆「榎寺の高灯籠 御馬屋川岸乗合」2枚続き。

※右頁の狂歌「しげりあふ色も萌黄のかや寺に 大燭と見ゆる灯籠の影 嘘言皮成」

※左頁の狂歌「ろのおとに雁こきまぜてわたし船 あとのが先へあがるのり合 蜀錦園蔓人」

392 榎寺の高灯籠 御馬屋川岸乗合（ボストン美術館）

図は、榎寺注1の榎の大木が寺の屋根越しに描かれ、盂蘭盆会に屋根から突き出すように立てられた高灯籠が図からはみ出して描かれる。寺の前の厩河岸の渡し船には、鳥刺注2の長い竿を立てた男や僧侶や御幣を持ち霊を迎える白衣の男（老婆？などが乗っている。



船尾では船頭が竿を振り上げるようにしている。図の左上の空には雁が群れ飛んでいる。

注 1) 榿寺：現東京都台東区蔵前3-22-9。榿の大木が、守護神の秋葉大権現により寺の火事を防いだといわれる。

注 2) 鳥刺：鷹匠に仕え、鳥もちを付けた長い竿で鷹の餌になる鳥を捕まえた。

【以下 5 図の続き絵】

☆「駒形の夕日榮 多田薬師の行雁」2枚続き。

※右図の狂歌「むらしぐれはれ行あとの夕ばへに いさむ月毛の駒がたの舟 歌子」

※左図の狂歌「ものゝふの多田の本尊の名にめでて つらをみたさずわたるかりがね 貢船窓春風」



393 駒形の夕日榮 多田薬師の行雁 (ボストン美術館)

図は、方形の馬頭観音を祀る白い駒形堂の側の渡し場で、米俵を担ぎあげる人足がいる。駒形堂では二人の参詣人が線香に火をつけて拝んでいる。対岸の空には秋を思わせる雁が前図からの続きで群れをなして飛んでいる。図の手前左には、男女の二人連れが描かれる。

☆「大川橋の月 小梅の泊船」2枚続き。

※右図の狂歌「香に匂ふ小梅の里の名にめでゝ はしのたもとにとまる苦舟 延齡堂愛人」
「三谷ぼりさしてこぐらし月の船 大川ばしの秋のよなく 霞楽亭花鳥」

図は、隅田川に最後に掛けられた大川橋（現吾妻橋のこと）の橋詰のにぎわいを描く。御休処で旅人が床几に腰を下ろして休み、接客と思われる女が立っている。橋の番屋の前で、長い竿の先で盥を回している芸人の足元には、三人の子供が付きまどっている。対岸には横十軒川の一つの源森川にかかる源森橋が小さく見え、水戸藩の下屋敷の小梅別邸の塀が描かれる。その岸边には帆を下ろした苦船が繫留されている。



394 大川橋の月 小梅の泊船 (ボストン美術館)



☆「其二」1枚。

狂歌「大江戸の自由は月の桂木も 材木がしへよする秋の夜
壺十郎成安」

図は、手前の岸边に木挽き途中の材木が斜めに掛けられ、その脇には石材が無造作に置かれている。近くで塵を掃いている男もいる。

395 其二 (ボストン美術館)

【下巻】

【以下 15 図の続き絵】

☆〈浅草寺入相〉1 枚。

狂歌「よしはらの里のわかれのはじめぞと つく浅くさの入あひの鐘 蜀雞園広道」

図は、浅草寺本堂の大屋根の先端を描く。三角の構図の先端の鬼瓦の上に、入相の赤い空に逆光で黒く見える鳩（永井荷風は鴉としている）が無数に羽ばたき、妻飾りは真赤な天邪鬼が描かれる。入相の鐘の音で吉原へ出かける人々が想像される。

396 浅草寺入相（ボストン美術館）



☆「向島の時雨 花川戸の冬籠」2 枚続き。

※右頁の狂歌「村時雨霰を木々につたはせて 秋葉の猿は蓑ほしげなり 松斎千代住」

「鶯も花かと雪の冬ごもり 江戸ぶし注1うたふ助六が宿注2 壺鶯楼可知輔」

注1) 江戸ぶし：歌舞伎「助六由縁江戸桜」で唄われる河東節。江戸浄瑠璃の一つ。

注2) 助六が宿：花川戸のこと。

※左頁の狂歌「真乳山紅葉の日和見定めて 居続はせぬ朝がへりぶね 貢筆庵都世喜」

「紅葉はのあかりをたてゝ夕ぐれは 客をまつちの山の茶屋 貢章庵穴丸」

図の左には、対岸に小さく三囲神社の鳥居が見え、近くに火除けの神を祀る秋葉権現、その前には待乳の渡しの船着き場にある船が描かれる。秋葉権現の門前には鯉料理の武蔵屋などがあつた。土手沿いには料理屋平吉（葛西太郎とも呼ばれた）の大きな料亭が描かれる。

397 向島の時雨 花川戸の冬籠（ボストン美術館）



☆「待乳山の紅葉」2 枚続き。

※「向島の時雨 花川戸の冬籠」との 4 枚の続き絵。狂歌は記されない。

398 待乳山の紅葉（ボストン美術館）

待乳山聖天は浅草寺分院で、隅田川西岸の小高い丘に建ち、紅葉の名所でもあり、対岸の風景を楽しむ場所として賑わつた。前ページの狂歌に詠まれたように、麓の聖天町には茶屋があつた。図は、小高い丘に建てられた待乳山の赤い鳥居と社殿に



向かう二人の男が描かれる。大木が杵をはみ出して描かれる。

☆「白髭の翟松 今戸の夕烟」2枚

※右頁の狂歌「十かへりとうち詠めても十八の君とは見えぬしら髭の松 瑞籬久世」

※左頁の狂歌「たえまなき瓦煙に淋しさもしらぬ今戸の秋の夕ぐれ 壺琴楼道成」

図は、対岸の白髭神社のこんもりした有名な松の樹が夕焼け空の下に描かれる。手前の今戸辺では名産の瓦を作る二人の職人がいる。川には一羽の白鷺がたゆたう。



399 白髭の翟松 今戸の夕烟 (ボストン美術館)

☆「橋場の田家 隅田の都鳥」2枚

※右頁の狂歌「すめばまた都鳥とて草の戸も春秋を見る月花の門 青々園」

※左頁の狂歌「夜なくになれてやとにもすみだ河 隈なき月のみやこ鳥まで 緑亀鳥」

図は、『伊勢物語』第九段の「名にしおはばいざ言問はむ都鳥 わが思ふ人はありやしやと」に因んで、前図に都鳥と白髭の渡し（橋場の渡し）の舟を描いている。橋場辺は田園風景が広がり文人等に好まれたという。束ねた藁を下から受け取って積み上げる男や、屋根に雪を被った家の前を歩く二人の女と供の男、舟の櫓を担いでいる男、鍬や箒を担ぐ男たちが描かれる。



400 橋場の田家 隅田の都鳥 (ボストン美術館)

☆「真崎の神燈 木母寺の鉦太鼓」2枚

※右頁の狂歌「小夜しぐれふりさけ見れば神垣をほのかにもれるみつのともし火 和歌浦汐」

左頁の狂歌「音も氷るばかりにけふはすみだ川 雪にうづみし木母寺注1のかね 遊友館春道」

注1) 木母寺：梅若伝説に因む寺。京で人買いにさらわれた梅若丸が江戸にまで連れてこられてこの地で夭折し、村人によって弔われた。探し求めて来た母親はわが子の死を知り、剃髪して菩提を弔ったという。謡曲「隅田川」でも扱われる。

401 真崎の神燈 木母寺の鉦太鼓 (ボストン美術館)

図は、雪降る中で、橋場村の鎮守である



真崎稲荷^{まきいなり}注²の門をくぐり参詣しようとする男たちや、社殿の屋根をしのぐ大榎^{おおえのき}が描かれる。この木の中に大きな空洞があり、そこに湧き出る水を飲むと靈験に預かるといわれ、その木の前には高下駄を掃き、笠をかざし、神火を持って参詣する男がいる。

注 2) 真崎稲荷：石浜神社内（現東京都荒川区南千住28-58）に祀られている。真崎は橋場の渡しより北の隅田川西岸一帯。

☆「三谷の田家」2枚

※左頁の狂歌「はや春へひとまたぎなる
大鳥居^{おおとりい} しりくめ縄^{しりくめなわ}注の見ゆる神垣^{かみがき} 京
一瀬亭平丸」

注) しりくめ縄：注連縄^{しめなわ}のこと。尻久米縄^{しりくめなわ}。
「春をちる三谷^{さんや}の賤^{しず}が梅^{うめ}ごよみ 雪^{ゆき}に対し
て置^{おく}としのくれ 壺琴楼道成^{うけいろうだうせい}」

402 三谷の田家（ボストン美術館）



図は、真崎稲荷の木製の大鳥居に正月用の注連飾^{しめなわ}を飾っている禰宜^{ねぎ}（神官）が描かれる。隣の朝日明神^{あさひあけみょうじん}と思われる境内の梅が咲いている。冬から春の風景。

☆「吉原の終年」の2枚

※右頁の狂歌「たをやめもめでたく越^こる年の夜^よに かしくといけし梅^{うめ}の一^{ひと}とえだ 京 寿
ののふ子」

左頁の狂歌「太^お（マ）神楽^{かぐら}笛^{ふえ}や太鼓^{たいこ}の音をそえて 豆^{まめ}まく声^{こゑ}のよしはらの里^{さと} 壺山楼高喜^{うけいろうたかき}」

図は、吉原の大晦日の行事で、狐の面をつけて踊る狐踊^{きつねおどり}りの門づけの男^{かど}が御幣^{みへい}と扇^{あふぎ}を持って、笛や太鼓に合わせて踊っている。側には「御祭礼^{みまつりらい}・氏子中^{うぢこじゆう}」などと書いた紙を貼った箱状のものに柄をつけた「万度^{まんた}」注を持つ男もいる。図の左には妓楼^{きりゅう}の入口の前からそれを見ている男や花魁^{かゝい}たちがいる。狂歌にある豆まきも吉原の大晦日の行事。

注) 万度：中臣^{なかつみ}の祓^{はら}えの詞^{ことば}を神前^{かみまへ}で何度も読み、穢^{けが}れをはらい清^{きよ}める万度祓^{まんたばらい}をした祓串^{はらえぐし}をいう。神職^{かみ}が家々に配^{まわ}り歩^あいた

（「デジタル大辞典」参考）。



403 吉原の終年（ボストン美術館）

【永井荷風の絵解き】

※永井荷風「浮世絵の山水画と江戸名所」（『江戸芸術論』所収）では同作を以下のように紹介している（「三田文学」大正2年7月1日 第4巻第7号より。岩波書店『荷風全集第十巻』所収の同文とは若干の異同あり）。

「(略)『隅田川兩岸一覽』は三巻より成る。その画面は絵巻物を繰りひろぐるが如く上巻より下巻まで連続して春夏秋冬の四時に渉る隅田川兩岸の風景を一覽せしむ。開巻第一に

現れ来る光景は高輪の夜明なり。淋し氣に馬上の身を旅合羽にくるませたる旅人の後よりは、同じやうなる笠冠りし数人の旅人相前後しつつ茶汲女のイみたる水茶屋の前を歩み行けり。水茶屋の葭簀は幾軒となく見渡すかぎり半円形をなしたる海岸に連り、その沖合遙なる波の上には正月の松飾りしたる親船、巍然として晴れたる空の富士と共にその檣を聳かしたり。第二図は頭巾冠りし袴の侍、町人、棟梁、子供つれし女房、振袖の娘、物担ふ下男など渡舟に乗合たるを、船頭二人大きな煙草入をぶらさげ舳と艫に立ち棹さしみる佃の渡しなり。第三図は童兒二人紙鳶を上げつつ走り行く狭き橋の上より、船の檣茅葺屋根の間に見ゆる佃島の眺望にして、彼方に横はる永代橋には人通賑かに、三股の岸近くには（第四図）白魚船四ツ手網をひろげたり。桜の花さく河岸の眺め（第五図）は直ちに新緑滴る元柳橋の夏景色（第六図）と変じ、ここに包を背負ひし男一人橋の欄干に腰かけ扇を使ふ時、青地の日傘携えし女芸者二人話しながら歩み行けり。その傍に尻端折の男一人片手を上げて網船賑ふ河面の方を指さしたるは、静かに曇りし初夏の空に時鳥の一声鳴過たるにはあらざるか。時節はいよいよ夏の盛となれり。

中巻第一図と第二図とは本所御船蔵を望む両国広小路の雑踏なり。日傘菅笠相重りて葭簀を張りし見世物小屋の間に動きどよめきたり。さて両国橋納涼の群衆と屋形船屋根の往来（中巻第三図）を見て過れば、第四図は新柳橋に夕立降りそそぎて、艶しき女三人袖吹き払ふ雨風に傘をつぼめ跣足の裾を乱して小走りに急げば、それと行違ひに薄べりと浴衣を冠りし真裸体の男二人雨をついて走る。首尾の松の釣船涼しく椎木屋敷の夕蟬（中巻第五図）に秋は早くも立初め、権寺の高燈籠を望む御馬屋河岸の渡船（中巻第六図）には托鉢の僧二人を真中にして桃太郎のやうなる着物着たる猿廻し、御幣を肩にしたる老婆、風呂敷包背負ひたる女房、物売りの男なぞ乗合ひたり。駒形堂の白壁に日脚は傾き、多田薬師の行雁（中巻第七図）に夕暮迫れば、第八図は大川橋の橋袂にて、竹藪茂る小梅の里を望む橋上には行人絡繹たり。岸の上なる水茶屋には赤き塗盆手にして佇立む茶汲みの娘もろとも、床几に憩ふ人々面白げに大道芸人が子供集めて長き竹竿の先に盥廻しめるさまを打眺めたり。中巻ここに尽く。

下巻は浅草観音堂の屋根に群鴉落葉の如く飛ぶ様を描き、何となく晩秋暮鐘の寂しきを思はせたるは画工が用意の周到なる処ならずや。第二図三圍の堤を見れば時雨を催す空合に行く人の影稀に待乳山（下巻第三図）には寺男一人落葉を掃く処、鳥居際なる一樹の紅葉に風雅の客二人、小紋の羽織にふところ手して逍遙するを見るのみ。冬枯の河原はますます淋しく、白鷺一羽水上に舞ふ処流れを隔てて白髭の老松を眺むるは今戸の岸にやあらん（下巻第四図）。ここに船頭二人瓦を船に運べるあり。やがて橋場の渡に至るに、渡小屋の前（下巻第五図）には寮にでも行くらしき町風の女づれ、農具を肩に煙管銜へたる農夫と茅葺屋根の軒下に行きちがひたり。遙かなる木母寺の鉦鼓に日は暮れ、真崎稲荷の赤き祠に降る雪の美し（下巻第六図）と見るも間もなく、神明の社に来れば（下巻第七図）烏帽子の神主三人早くも紅梅の咲匂へる鳥居に梯子をかけ注連飾にいそがは

し。かくて年は暮れたり。画工は正月の松飾整ひたる吉原の廓に看客を導き、一夜明くれば初春迎ふる色里の賑を見せて、ここにこの絵本を完了す」

●狂歌絵本『逸題狂歌本』(享和元～文化2(1801～05)横中本一冊。墨摺。画狂老(「人」なし)北斎画。印北斎。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※「逸題」とは、特に表題を付さないものや表題不明をいう。巻頭1オ(筆者注：1ページの表：袋綴じ左側の頁)「松曳にあしを野へにやふみ出さん けふは子日と人の申せは 節松嫁々注」の1首があり、続く1ウ・2オの見開きに、北斎による小松を担ぐ仕丁が描かれる。春興の狂歌集で、伯楽側、本町連、三河擣衣連などの狂歌が寄せられている(『新北斎展図録』p 325)。

注) 節松嫁々：朱楽菅江の妻(1745～1810)。菅江没後、同門を率いた。

●肉筆画「漁師図」(享和2年～文化2年(1802～05)。紙本着色一幅。掛幅。北斎画。印亀毛蛇足。73.8×28.4 北斎館蔵)

※磯辺の岩に腰を下ろし、釣竿を立てて潮時を待つ漁師。竿の先には白い折り鶴を括りつけている。漁師の横には赤い布で包んだものがある。

404 漁師図(北斎館)



●肉筆画「美人愛猫図」(享和3年～文化元年(1803～04)。絹本着色一幅。画狂老人北斎。印亀毛蛇足。72.5×28.5 シゴ：ウエストン・コレクション蔵)

※立って猫を懐に抱いている女。女の首は前に傾き、襟元から首にかけて着物がはだけている。全体に灰色系統の色合い。襦袢や口紅、猫の首輪は赤色となっている。

405 美人愛猫図(ウエストン・コレクション)

●肉筆画「野馬」(享和3年～文化2年(1803～05)頃か。紙本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。33.2×50.7 北斎館蔵)

※柳の木の際にいる二頭の馬と一頭の子馬を描く。輪郭のない付立と呼ばれる画法で墨画風に描く。酒井抱一の賛「はる駒や柳にならふ朝こゝろ」がある。

●肉筆画「振袖新造図」(享和3年～文化2年(1803～05)。

紙本着色一幅。画狂人北斎画。花押。98.5×27.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※吉原で俗に振新と呼ばれる13歳～15歳頃の見習い遊女で、振袖を着て花魁道中の供などをして、客がつくようになると留袖新造となった。

図は、前帯で吉原独特の三ツ歯の下駄を履き、前帯の中に手を入れ、小首を傾げて正面に向く姿。吉原には、年季が開けた30歳前後の番新(番頭新造)もいた。

四良真顔の賛は「汝瀬川か番新ならば 三百両の見うけやあらむもし市川か新造ならば 苦界の幕もしはらくなるべし わか松に額の寿の字を ねひきとは客とねのひに よみは

しめけむ」とある。

406 振袖新造図 (島根県立美術館)

●肉筆画「見立三番叟図」(享和3年～文化4年〈1803～07〉。紙本着色三幅対。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。各97.8×27.8 太田記念美術館蔵)



407 見立三番叟図 (太田記念美術館)

※狂言「三番叟」に登場する千歳・翁・三番叟注の三人を美人に見立てる。図右は千歳の被る侍烏帽子を手にする千歳役の町娘、図中央は「翁」の字を書いた扇を手にする花魁。持った扇の柄から、吉原遊郭扇屋の高級花魁・花扇と分かる。図左は三番叟が舞う時に手にする鈴を持つ商家の若女房という見立てである。



注) 「三番叟」: 天下太平・五穀豊穰を願う狂言の演目「翁」(式三番)の後半で、本来は「父尉」「翁」の舞に続き三番目に舞うので「三番叟」と呼ばれたが、「父尉」が省略されて二番となっても、呼称はそのまま「三番叟」としている。「千歳」は「翁」の舞に含まれるので、実際は二番である。尉面をつけて鈴を振りながら舞う。



●肉筆画「美人立姿」(享和3年～文化4年〈1803～07〉。紙本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。118×30.5 エドモンド・ゴンクール旧蔵/個人蔵)

※水墨画の趣に、簪に僅かな朱が加わる。片足を裾から出して立つ美人。着物には鶴と松の模様が描かれる。

図上部には、沢庵の作とされる語と和歌「仏ハ法をうり 祖師はほとけを売り 末世の僧ハ祖師をうる 汝は五尺のからだを売て衆生の煩惱を休んず 色即是空 空即是色 柳はみどり花はくれなゐのいろく」と、目白白山の歌「池水によなく月はかよへとも 心もとめず影ものこさず」が記される。

408 美人立姿 (https://m.blog.naver.com/より転載: 個人蔵)

●肉筆画「ほとぎす聴く遊君図」(享和2年～文化2年〈1802～05〉。紙本着色一幅。北斎画。印辰印政。88.7×27.6 すみだ北斎美術館蔵)

※太田蜀山人の賛「君ハゆきわが身ハのこる三蒲団 四ツ手をおふ

てなく郭公^{ほととぎす}

「蜀山人」号は享和元年に大坂で初めて使用され、翌年4月に江戸に戻っているところから制作年を推定。

※花魁特有の横兵庫という髷に結った遊女が三つ布団^{みみつぶとん}注1に肘をつき、もたれて中空のほととぎすを眺め、その声を聞いている。ほととぎすは、四ツ手駕籠^{よつて駕籠}注2に乗って帰った客を暗示しているか。「郭公」と書いてほととぎすと読ませている。

注1) 三つ布団：三枚重ねの敷布団。最高位の遊女が用いた。

注2) 四ツ手駕籠：4本の竹を四隅の柱とし、割り竹で簡単に編んで垂れをつけた駕籠。江戸時代、庶民用の簡素なもの（「デジタル大辞典」による）

409 ほととぎす聴く遊君図（すみだ北斎美術館）



●肉筆画「見立浅妻舟図」（享和3年～文化2年〈1803～05〉）。紙本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。34.8×56.4（日本浮世絵美術館蔵）

※浅妻舟（朝妻舟とも）は、近江国入江村朝妻（現滋賀県米原市朝妻筑摩）の琵琶湖にそそぐ息長川河口に浮かぶ舟に乗っている遊女を指す。

この主題を描くときは、柳下の舟に金烏帽子と水干姿の白拍子が鼓を手前に置いている構図が普通とされるが、この図は三つ布団（高級遊女の蒲団だが、ここではみすぼらしい薄い布団の三枚重ねにしている）を舟に、枕を鼓に見立て、床柱に柳を活けて、柳下の遊女に見立てている。

大田蜀山人の賛は「あたしあだなミ よせてはかへる まくら昏君が一筆かきながすすゝりの海も飛鳥川アイノテきのふの床に岡本のひく手あまたの客さんが鶯といふ鳥のそれならで 名もむつまじき妹いもと 小鳥にかへし十姉妹 これハ岡本楼のうかれめ朝妻 何かしかかけるもの一幅と



410 見立浅妻舟図（日本浮世絵美術館）

十姉妹といへる鳥に換えしときのはうたとなん 蜀山人書」とあり、新吉原（京町一丁目）の岡本楼の朝妻という遊女に頼まれて記したものとされる。

●肉筆画「月下歩行美人図」（享和3年～文化2年〈1803～05〉）。絹本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。98.4×26.3（出光美術館蔵）

411 月下歩行美人図（出光美術館）



※振袖を着た新造が満月の夜にそぞろ歩いている。麻の葉の模様の襟と黒地に藤の花の着物。山東京伝の賛は「なか秋の月にめてゝハ今川のをしえも破る酒宴遊興」とある。

●肉筆画「富嶽図」（「富士図」とも。享和3年～文化2年〈1803～05〉。紙本墨絵一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。95.0×29.0 日本浮世絵美術館蔵）



※鋭角的な富士の左側を中心に描く。山頂に雪はなく、墨の濃淡の点苔が特徴的な絵で、席画と思われる。落款の書体や印の欠損部分が「朝妻舟」とほぼ等しいので、「朝妻舟」と同時期の作と見られる（日本浮世絵博物館所蔵『北斎』p6 読売新聞社 1993年）。

412 富嶽図（日本浮世絵博物館）

●肉筆画「道成寺図」（享和3年～文化2年〈1803～05〉。紙本着色一幅。北斎画。印辰印政。82.3×26.3 すみだ北斎美術館蔵）

※緋色の長袴と白の上衣を着て、般若の面を着けて舞台上舞う役者。舞台の柱を抱きつき、打杖を振りあげ、柵に片足を掛けた姿の図。

413 道成寺図（すみだ北斎美術館）

●肉筆画「行楽帰り図」（享和3年～文化2年〈1803～05〉。紙本着色一幅。画狂人北斎画。

印亀毛蛇足。92.7×34.1 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※享和元年～文化3年（1801～06）説もある（2019年『永田生慈北斎コレクション100選』展図録p40）。同じ永田生慈コレクションの2019年『新北斎展』図録では享和3年～文化2年（1803～05）としている。

※二人の武士が一杯機嫌で陽気に歩いている。一人は扇子を広げ、頭に手をやりながら唄っている。黒い着物は付立注の技法で墨の濃淡を表している。一人は空になった酒の角樽を肩にして、底を鼓のように打つ仕草をしている。背後に紅葉が描かれているので、紅葉狩りの帰りか。享和4年（1804）の『画本狂歌 山満多山』上巻の〈飛鳥山〉にも同様の図を描いている。

414 行楽帰り図（島根県立美術館）

注）付立：日本画で筆にふくませた墨または絵具と水の加減で、一筆の中に濃淡が生じて種々の効果があがるように、筆をねかせて筆の腹で描



くこと。円山派・四条派などの花鳥画に多く見られる（「精選版 日本国語大辞典」より）。

●肉筆画「**旭日山水図**」（享和 3 年～文化 2 年〈1803～05〉。絹本墨絵着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。25.5×28.2 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※画面中央の断崖の向こうに上半分が霧に隠れた朱色の朝日が昇る。付立の手法で墨の濃淡で描いた断崖の背後の山は、霧に消されるように薄く描かれる。断崖の下には帆船が三隻小さく浮かぶ。

※本図は、フランスのジャポニズムを牽引した美術商・サミュエル・ビングの旧蔵品という（『永田生慈北斎コレクション展図録』（p 195））。



415 旭日山水図（島根県立美術館）

●扇面画「**波に燕図**」（享和 3 年～文化 5 年〈1803～08〉。紙本着色扇面一幅 北斎筆 印辰印政。23.9×51.1 鎌倉国宝館：氏家浮世絵コレクション蔵）

※薄い藍色の波の上を、淡墨で描かれた燕が飛んでいる。

416 波に燕図（部分：氏家コレクション）



●肉筆画「**玉子に蔬菜図**」（享和 3 年～文化 5 年〈1803～



08〉。絹本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。24.0×27.0 すみだ北斎美術館蔵）

※図の右下から左上に向けて棒状の独活が置かれ、下にぜんまいの茎が三本と玉子が三つ、山椒の葉が置かれている。文政元年（1818）にも「蔬菜と撫子図」で独活を描いている。

417 玉子に蔬菜図（すみだ北斎美術館）

●屏風絵「**獅子図屏風**」（享和 3 年～文化 5 年〈1803～08〉。紙本金地墨画。四曲一隻屏風。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。54.0×96.0 東京国立博物館蔵）

※金地の四曲の屏風に墨で二頭の唐獅子を描く。左の獅子は蹲って正面を見据え、右の獅子は天空を見上げるように顔を上げる。折られた際に向き合うように描かれる。

418 獅子図屏風（東京国立博物館）



●肉筆画「**吉田駒曳銭**」（享和 3 年～文化 5 年〈1803～08〉。紙本着色一幅。

画狂人北斎画。10.2×13.7 すみだ北斎美術館蔵）

※五つの吉田銭（馬の絵を描いた穴開きの玩具の銭）が布のようなものの上に置かれている図。

●肉筆画「**葡萄**」（享和3年～文化12年〈1803～15〉頃か。紙本着色一面。北斎。印亀毛蛇足。26.2×38.0 北斎館蔵）

※墨絵風で僅かに葡萄の実と葉に淡色が施されている。



419 葡萄（北斎館）



●肉筆画「**葡萄と小鳥と蜘蛛図**」

（享和3年～文化12年〈1803～15〉。軸装着色。葛飾北斎。印亀毛蛇足。個人蔵）

※葡萄の蔓に向かって雀。葉の下の葡萄の房に向かう蜘蛛の図。

420 葡萄と小鳥と蜘蛛図

●屏風絵「**立美人図**」（享和3年～文化5年〈1803～08〉。紙本淡彩一幅。北斎画。印亀毛蛇足。51.9

×18.1 フリーア美術館蔵）

※ダラリの帯をして左に横向きで立つ美人（フリーア美術館蔵 『2005 北斎展図録』 p 35 より）。

●錦絵「**七福神の獅子舞**」（享和3～文化6年〈1803～09〉頃か。横長判。かつしか北斎画 ポストン美術館蔵 扇の字を書き換えた模作あり）

※七福神が大きな獅子舞を担いでいる。獅子頭の左側に毘沙門天が「赤」と書かれた扇を持ち、右側には大黒天が「安」と書かれた扇を振りかざし、前では弁財天が「和」と書かれた扇を持って音頭をとっている。

●錦絵「**鱗彌引札**」（享和元年～文化2年〈1801～05〉。大判。画狂人北斎画。35.6×24.2 東京国立博物館蔵）

※鱗彌（江戸本町三丁目横丁）で作られた化粧品や菓子などの商品の宣伝ポスターと思われる。「代八銅」「鱗彌製」の書入れがあるので、八文（約200円。一文=25円で換算）の商品と思われる。桜や山吹の咲く庭に面した部屋で、盆に菓子を入れ、右手で持ち上げる女の裾元に座る二人の女たち。その側で跪く男の腹がけには⊖の字が染め抜かれている。歌舞伎の「恋女房染分手綱」の「重の井子別れ」の段で、江戸への輿入れを嫌がっていた姫の気持ちを变えた馬子の三吉に、姫の乳母である重の井が褒美の菓子を与える場面を擬しているという。



421 鱗引札（国立国会図書館）

●錦絵「**花見**」（享和元年～文化5年〈1801～08〉頃か。無款。横大判。24.8×37.0 ベルギー王立美術館蔵）

※物見台で花見をする三人の女と二人の子ども。右に仁王像が描かれる。

●摺物「女管弦 見立佐保姫」（享和元年～文化5年〈1801～08〉。画狂人北斎画。横長。13.9×28.3 フランス国立図書館蔵）

※左から、部屋の中で尺八を吹く女、琴を弾く女、三味線を弾く女の図。尺八を吹く女は眉を剃っているのが女房と思われる。佐保姫は、奈良の東にある佐保山の女神で、春霞を生み出すといわれるので、この絵も春の趣を描いたもの。



422 女管弦 見立佐保姫（フランス国立図書館）

添えられた三種の狂歌は、「若水をくミにかゝれる玉琴に かすみ引たす糸遊のそら高根常雪」、「佐保姫のふく尺八に鶯も てうし合る春のうた口 有賀亭琴成」、「佐保姫のけふ引初るさみせんの 糸も霞にミゆる春の日 ●（手偏に箒）屋簷成」とあるので、狂歌の内容からの作画である。

●錦絵「風流隅田川八景」（享和3年～文化5年〈1803～08〉。小判8枚揃物。北斎画。版元不明。すみだ北斎美術館蔵）

☆〈両国の夕照〉（11.7×17.5）

※両国橋側の料理屋の欄干に手をかけて休んでいる二人の芸者。川には一艘の舟が浮かぶ。図の左には橋が見える。手前の芸者は木の葉模様の帯を後ろでだらりにしている。



423 両国の夕照（すみだ北斎美術館）

☆〈待乳の紅葉〉（11.6×17.6）

※待乳山の茶店で、揚帽子（角隠し）を被った二人の女。床机に横座りの女と腰掛けている女。

☆〈ミめぐりのせいらん〉（「三囲の晴嵐」11.5×18.0）

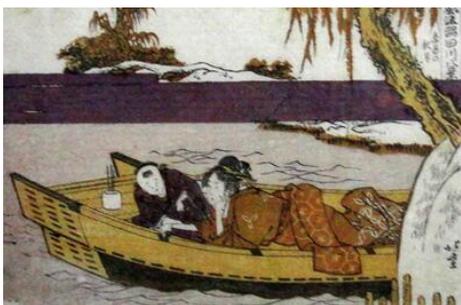
※三囲神社の鳥居脇で、隅田川の堤からの石段の下にある「御休処」で休む二人の女。突然の嵐に傘をすぼめて茶屋にいる女と、床机に腰掛けて空を指差す女。424 ミめぐりのせいらん（すみだ北斎美術館）



☆〈梅若の秋月〉（11.4×17.6）

425 梅若の秋月（すみだ北斎美術館）

※木母寺の梅若伝説を題材にしたもの。伝説では行方知れずの梅若を探し歩いた母親が、この図で



は隅田川に浮かぶ舟の中で、頬をついて横になる女と側に寄り添うようにしている子どもを描く。

☆〈しゅびのまつゆうだちの夕立〉（「首尾しゆびの松の夕立」11.3×17.8）

※首尾の松は、浅草蔵前の隅田川沿いにあった松。吉原通いの舟の目標にもなった松という。二人の女が大きな傘に入って、裸足のまま川岸を急ぐ。

☆〈こまかたこまがたののうりう〉（「駒形こまがたの納涼」11.5×17.8）

※船着場に停めた舟から二人の女が釣りをしている。水面に竿差す女と、竿を上げて釣り針の餌を確かめる女。これから釣り糸を垂らすところか。

☆〈浅草あさくさの晩鐘ばんしやう〉（11.5×17.5）

※今戸焼きの土を叩きこねている女が、何かを指差す子どものほうを向いている。

☆〈真崎まきざんせつ〉（「真崎残雪」11.4×17.7）

※川岸を歩く二人の遊女。一人は扇子を使い、一人は袖を口に当てながら雪道を歩く。

●摺物「藤下ふじかの常磐津とこがね稽古」（享和3年～文化5年〈1803～08〉。横大判色摺。無款。25.2×38.4 ギメ美術館蔵）

●摺物「茸狩きのこがし」（享和3年～文化5年〈1803～08〉。横大判。無款。24.9×38.4 ギメ美術館蔵）

●錦絵「山水さんすい図」（「村落そんらく図」とも。享和3年～文化5年〈1803～08〉。紙本墨画。画狂人北斎画。印 亀毛蛇足。28.0×59.3 フリーア美術館蔵）

※薄墨を軽く引いたような松林の前の民家。手前の土手に掛け渡した橋。背景の薄く描かれた山など、全体に漢画風の趣のある描き方。

●摺物「鏡餅かがみもちをさしだすみづじん婦人」（享和2年～文化1年〈1802～04〉。紙本色摺。画狂人北斎画。13.8×18.6 北斎館蔵）

※花魁おいらんに鏡餅かがみもちを差し出す女性。「千金せんぎんの春はる」と狂歌に詠まれている。

●摺物「見立みだて天拝山てんぱいざん」（享和2年～文化1年〈1802～04〉。紙本色摺。画狂人北斎画。13.9×18.7 北斎館蔵）

※菅原道真が大宰府に流された際、無実を訴え、たびたび山に登り天を拝したという故事に見立てる。図は、縁側で女性が右手を上げて遠くの山を見上げている様子を描く。

天拝山は、現福岡県筑紫野市にある標高257.4mの山。

●摺物「海辺うみべの社前しゃぜん」（「ヒーターモース・コレクション北斎図録」では「行楽こうらく帰り」（18.8×51.3）

としている。享和元年～文化2〈1801～05〉。寛政12年〈1800〉の「海辺の社前」の再摺判。半切判。色摺。北斎画。19.2×52.4 東京国立博物館蔵）



426 海辺の社前（東京国立博物館選）

※寛政 12 年判では「先ノ宗理北斎画」の落款だが、この絵は「北斎画」となっている。二人の女が海辺の社前を歩いている。一人は煙管を銜えている。女たちの後ろには荷物運びの男、前には釣り竿を持った二人の子供が描かれる。深川の洲崎弁天の描写。

●摺物「外を見る遊女」（享和 2 年～文化 6 年〈1802～09〉。紙本色摺。北斎画。14.0×18.8 北斎館蔵）

※遊郭の窓から、遊女が吉原に続く日本堤の土手を歩く人々を見ている。狂歌に「むこふの人を呼子鳥かな」とあるので、客を誘っているとも思われる。

●摺物「潮干狩図」〈巨大な朝日判〉（享和 3 年～文化 2 年〈1803～05〉。享和 4 年（文化元年：1804）説あり。半切判。色摺。画狂人北斎画。19.0×50.8 東京国立博物館/エトアルト・アント・キツォーネ記念ジェノヴァ東洋美術館蔵）

※画面左に狂歌の書き入れ、図中央に巨大な朝日、図右に潮干狩り用の籠を持って朝日を眺める女と、箆を海水の中に入れてながら箆を持つ子供を見ている女が描かれる。「潮干狩り図」は同画題でいくつか描かれているので、区別のために本図は仮に「巨大な朝日判」とする。



427 潮干狩図（巨大な朝日判 北斎大全宗理期より）

●摺物「目黒不動尊詣」（享和 3 年～文化 5 年〈1803～08〉。画狂人北斎画。半切判。色摺。20.2×53.1 すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション蔵）

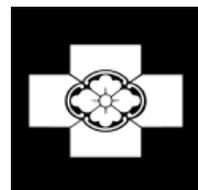
※義太夫の案内に作られたと見られる。「目黒不動」と染め抜いた幟の前には石段があり、その下には親と娘がいる。母親は傘を持ち娘は長振袖。その後ろに中津木瓜注 1 の紋を染め抜いた風呂敷包を背負った小僧がいる。石垣の前では二人の子どもが独鈷の滝壺注 2 に入り亀を手をしている。天蓋のついた幟には「目黒不動」と染め抜かれている。



428 目黒不動尊詣（すみだ北斎美術館）

注 1) 中津木瓜：胡瓜や南瓜の切り口をデザイン化したといわれる。図の四方を十字形の太棒で囲んだ紋。この紋から『ピーターモース・コレクション北斎図録』では、おそらく義太夫の案内のために制作されたものとみなされるという。

中津木瓜（ウイキペディアより）



注 2) 独鈷の滝壺：目黒不動を創建した慈覚大師が、堂塔の建設地を占って独鈷を投げたところ、たちまち泉が湧き出したといわれる。滝の水は怪我除けのご利益があるという。

●摺物『五大力士』（享和 3 年～文化 5 年〈1803～08〉。横九つ切判。揃物。狂歌が添えられる。全 5 図。画狂人北斎画。揃物 5 枚はフランス国立図書館所蔵）

※「五大力」とは、女が書いた手紙の封じ目に書き、男への貞操を誓ったり、三味線や煙草入れなどの裏面に書いて厄除けにした。五大力菩薩信仰によるもの。

☆〈難波梅〉（「詠歌美人」とも。14.2×19.0 ベルギー王立美術館蔵）

※難波梅と札に書かれた梅の木の下で歌を詠む遊女二人。「けに花の大將なれやおしなへて まねかぬ客もしたふ梅か香 千猿亭業枝」の狂歌が記される。

429 難波梅（フランス国立図書館）

☆〈爪弾き〉（「琴」とも。14.3×18.9）

※眉を剃った年増の女が立って琴を持ち、その琴を立膝で腕を伸ばして爪弾く娘の図。「吉例はおもき石よりかわらけを かるくうけたるとそのさか盛 三番窓初丸」の狂歌が記される。



430 爪弾き（フランス国立図書館）



「吉例はおもき石よりかわらけを かるくうけたるとそのさか盛 三番窓初丸」の狂歌が記される。

☆〈見立源為朝〉（14.2×18.9 ホノルル美術館蔵）

※弓を引く子と、それを支える年増。日の丸の扇子を持って腰掛けにかけてそれを見ている母親の背後には矢を入れた箆がある。大島に流された源為朝の弓は島人が何人でも引けなかったという伝説の見立て図。「春風にくしらうなりの弓勢も 五人張ほとつよき大風 蝶々亭春友」の狂歌が記される。



431 見立源為朝（フランス国立図書館）

☆〈見立箆の梅〉（14.1×18.9）

※羽子板の羽根が梅の木に引掛かったのか、刺股を持って取ろうとする女、羽子板を持ち上げて取ろうとする女、坐って左手で羽根の方向を示す女の図。源氏の梶原源太景季が生田の森の合戦で梅の箆に挿して戦った話（『源平盛衰記』37巻）を典拠とする「箆」を劇化した「箆の梅」の見立てという（『秘蔵浮世絵大観 8』p316）。「春の日を急ひらのむねのさきかけに 名のるハ一の谷のうくひす 千林亭面吉」の狂歌が記される。

432 見立箆の梅（フランス国立図書館）



☆〈見立景清〉（14.1×18.9）

※雪の庭に出て、雪かきのために草箒を持つ女と、首に巻いた頭巾を引っ張る塵取りを

左手に持つ女の図。平景清が八島の戦いで三保谷十郎と兜を引き合った故事の見立て。

433 見立景清（フランス国立図書館）

「春またき雪かとはかり三保の谷の しろう咲きたる花の梅かえ 松風亭守人」、「神のミか梅は頭巾のしころ迄 匂ひをとめる花のかけ清 千金亭如蘭」の狂歌が記される。



●摺物「布袋と唐子」（享和元年～文化 2 年〈1801～05〉。紙本色摺。画狂人北斎画。13.4×28.2 フランス国立図書館蔵）

※布袋の行司で相撲をとろうとする二人の子ども。土俵の外で四人の子が取組を待っている図。5 首の狂歌が記される。

●摺物「婦人と小僧図」（享和元年～文化 2 年〈1801～05〉。狂歌。色摺。画狂人北斎画。20.3×27.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※浅草側の狂歌師・宝市丸の名披露目に配られた摺物。図は、婦人が小僧を連れて歩いている様子を描く。小僧は背中に升を背負い、畳んだ蛇の目傘を肩にしている。青草庵春人、宝市丸、板屋棟成、末廣庵、浅草庵などの狂歌が記される。

●摺物「芸者」（享和元年～文化 2 年〈1801～05〉。十二切判色摺。画狂人北斎画。20.8×11.0 フランス国立図書館蔵）

※「富岡八幡宮」の額の掛かる鳥居の前にいる立兵庫齧の芸者は褌を持ち上げ、口元に手を当てている。隣の女は三味線箱を抱えている。参詣後、茶屋に向かうところか。「子曰する松のはをりをひきつれて 富か岡辺の春の賑ひ 神葵堂」の狂歌が記される。

富岡八幡宮（現東京都江東区南砂7-14-18）は、深川の富岡八幡宮を最初に勧請した所で、寛永年間（1624～43）に、門前仲町の富岡八幡宮（東京都江東区富岡1-20-3）に遷されたので、元八幡とも呼ばれる。砂村の海が前に広がり、風光明媚な場所であった。但し、富岡八幡宮（深川八幡宮）を念頭に置いている可能性もある。



434 芸者（フランス国立図書館）

●摺物「絵馬堂の茶屋」（「絵馬堂」とも。享和元年～文化 2 年〈1801～05〉。但し、寛政 12 年（1800）頃の「絵馬堂」（先ノ宗理北斎画）と別作品。半切判。色摺。画狂人北斎画。東京国立博物館蔵）



435 絵馬堂の茶屋（東京国立博物館）

※全紙判もあり、それによれば松岡吉五郎が

主催した深川芸者等による舞踊の案内である。本図は全紙判の半分が残ったもの。大きな絵馬が掛けられた堂で芸者たちが休んだり立ち話をしたりしている。男の首に巻いた風呂敷包みには正月飾りが挿してある。

●摺物「都伝内改名摺物」

（「都伝内名披露目舞台」とも。享和元年～文化 2 年〈1801～05〉。全紙判色摺。近藤何某ノ函寄而画狂人北斎老夫画。島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館蔵）

※都伝内（歌舞伎座元。都座主宰。都座は中村座の控櫓）が祖父の都伝内小祥忌（一周忌）に臨み、父の名の小伝に改名した挨拶の摺物。老松と竹を描いた鏡板の前に三方に乗せられた御神酒が置かれ、その前に「寿」を記した木札を持つ男、烏帽子を被った白拍子や、膝まづいて鉦を鳴らす男役者たちを描く。

●摺物「初鯉の荷揚げ」（享和元年～文化 2 年〈1801～05〉。『秘蔵浮世絵大観別巻』（講談社）では寛政 12 年～文化 5 年〈1800～05〉としている。大奉書全紙判色摺。画狂人北斎画。東金屋版か。42.6×57.2 ベルリン東洋美術館蔵）

※図の上半分に、船から荷揚げした鯉を箆に入れ、頭上に掲げて運ぶ男たち。その脇で帳簿に仕入れを記録する男や、鯉を入れた箆を抱え上げようとしている男。船の中にも鯉を入れた箆が見える。日本橋の魚河岸の荷揚げの風景。初鯉一本三両注（約 37 万 5 千円）といわれた。

図の下半分には、折り返して読めるように逆様に参加者の名前が記される。参加者名と共に「セワ（世話）犬のし富八」とあるので柳橋の料亭「犬のし富八」（歌川広重「江戸高名会亭尽両国柳橋犬のし」に描かれる）で催されたの長唄の会の案内と推測される。

注) 1 両=5 貫文=5000 文=125000 万円。1 文=25 円とした。



436 初鯉の荷揚げ（ベルリン東洋美術館）

●摺物「妙見宮」（「妙見宮参拝」とも。享和元年～文化 2 年〈1801～05〉。半切判。色摺。画狂人北斎。東京国立博物館蔵）

437 妙見宮（東京国立博物館）



※北斎が信仰した柳島の妙見堂（柳島妙見山法性寺。現東京都墨田区業平5-7-7）の図。全紙判もある。「東都方角」（天明7年～寛政元：1787～89）の「柳寫法性寺妙見堂の図」にも描かれる。柵に囲まれた「影向の松」の側に立つ女二人と男と子ども。竹馬に乗る子どももいる。右の鳥居に「妙見宮」の額が掛かり、手水舎には「大願成就」と紋を染め抜いた暖簾が掛かっている。紋は、常磐津の木瓜紋（瓜を輪切りにした形という）という。

●摺物「桜花に富士図」（享和元年～文化2年〈1801～05〉。半切判。色摺。画狂人北斎画。20.1×55.4 アムステルダム国立美術館蔵）

※図の中央の富士山を包み込むように図の両脇から咲き誇る桜。元は全紙判で下半分に文字が記されていた。



438 桜花に富士図（アムステルダム国立美術館）

●摺物「座敷舞踊」（「座敷狂言」）とも。享和元年～文化2年〈1801～05〉。大奉書。全紙判色摺。画狂人北斎画。38.2×53.0（半切判 19.1×53.0） アムステルダム国立美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵

※深川惣芸者中と川岸山本町芸者中の合同演目案内。上半分に絵、下半分に踊りの演目を逆さに書き、上下二つ折りにする仕様。座敷で立烏帽子を被り、扇子を手に袴を着た客の前で踊りを披露する芸者。三味線を弾く二人の女、唄手の女、鼓を打つ女が座って演奏をしている。障子には、その様子を窺う三人の女の影が映っている。



439 座敷舞踊（すみだ北斎美術館）

●摺物「花魁と猿」（享和元年～文化2年〈1801～05〉。色摺。画狂人北斎画。12.7×8.4 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※杭の先に取りつけた板に鎖に繋がれた猿がいる。その鎖の先をつかんで猿を見あげる横兵庫髷の花魁。頭巾を被った狂歌師らしき男も背を向けて猿を見ている。

440 花魁と猿（すみだ北斎美術館）

永田生慈は「（略）本図は研究者から極めて貴重な一図と見なされるものである。というのは、明治期に入り一般に明石版と呼



ばれる複製の摺物が多数版行されており、本図もまた周囲に二重の円窓を記したコピーが作られているからである。彫や色調などの比較研究の材料として、欠くことのできない一点というべきであろう」と述べている（『ピーター・モース・コレクション北斎図録』より）。

●摺物「菊の花納」（享和元年～文化2年〈1801～05〉。横長判色摺。画狂人北斎席画。日本浮世絵博物館蔵）

※「画狂人北斎」の落款は主に享和から文化期に使われるので、本図は仮にその頃としておく。図は、菊の花と葉をつけた小枝が、画面に横たわるように描かれる。「日の夏に恵むや菊の花納」の句が記される。

●摺物「大黒 弁天 ゑびす」（享和元年～文化2年〈1801～05〉。横長判色摺。画狂人北斎画。20.1×18.6 日本浮世絵博物館蔵）

※「画狂人北斎」の落款は主に享和～文化期使われるので、が、本図を仮にその頃としておく。図は、手拭いをかぶって搔卷風の布を背負い、小槌を手にした男を大黒に見立てる。隣には弁天に見立てた遊女がいる。その二人を恵比寿に見立てた男が、嬉しそうに見ている。男は扇子を頭に当てている。前には笹の上に鯛が置かれ、三人の背後には藤を描いた屏風が置かれている。「大黒と弁てん太夫 行連れて ゑびすの宮に遊ぶ春の日 野道喜三二」の狂歌が記される。

●摺物「遊女と朝日奈三郎」（享和元～文化5〈1801～08〉。狂歌摺物。色摺。画狂人北斎画 18.9×12.5）

●摺物「仏像鍍金」（享和元～文化5〈1801～08〉。紙本。横長判。色摺。北斎席画。14.8×32.5 日本浮世絵博物館蔵）

※横になって手で頭を支える仏陀の涅槃像に金箔を貼り付ける三人の職人。細い線によって描かれている。作業用の箱には入山形に三の文字（伊藤屋与兵衛か）が描かれている。

席画とあるところから鍍金現場に北斎がいたのではないか、また北斎の父とされる仏師の仏清との関係があるとする見方もある（『代表作シリーズ大揃い 北斎 日本浮世絵博物館所蔵』 p103）。

●摺物「天神シリーズ」（享和元年～文化5年〈1801～08〉。仮題。菅原道真伝説に見立てたもの。各図に狂歌が添えられる。九ツ切判。色摺揃物。画狂人北斎画。フランス国立図書館蔵）

☆〈渡唐天神〉（14.0×18.9）

※膝をつく男と、梅の小枝を持ちながら立って男を見る女（実は天神）の図。天神（道真）が配流先の太宰府から中国・南宋に渡り禅僧・撫順師範に学んだという説話から、室町時代以来「渡唐天神」図が多く描かれたという。「咲みつる梅かかん家や春風に 句ひのわたるもろこしか原 桜枝鞠」の狂歌が記される。

☆〈童子天神〉（14.1×18.7）



441 渡唐天神（フランス国立図書館）

※梅の花を取ろうとする子を抱き上げる女。その後ろに坊主頭の供の奴がしゃがんでいる。「筆学ふ子等も一枝折はやと ミな手のあかる梅の木のもと 蜀江亭綾丸」、「はる風のこちのよい子と手をだして 花に指さす庭の梅かえ 酒蔵人」の狂歌が記される。

442 童子天神 (フランス国立図書館)

☆〈ざくろ天神〉 (13.9×18.7)

※火鉢を挟んで話す禿と、煙管と煙草盆を持つ遊女の図。遊女の髪は洗髪後か、鬘に結われていない。ざくろ天神は、菅原道真の怨霊が、食べた柘榴を吐くと炎になったという伝説を踏まえたもの。遊女は長煙管を持ち、口から炎ならぬ煙を長く吐いている。赤々とした日にかげられた薬缶もある。「とりあけて天神わけ注に結てまし 風にみたるゝ青柳の髪 山里亭東士」の狂歌が記される。



443 ざくろ天神

(フランス国立図書館)

注) 天神わけ：髪を左右に束ねた天神鬘のこと。

☆〈●●天神〉 (仮題「千金の春」13.8×18.6)

※前帯で長煙管を持ち立て膝の年増に、手拭いを被った女が盆に乗せた鏡餅を跪いて差し出している。

正梅亭芳輔「長閑なる風の手習する子等の 学ぶ一じ

は千金の春」、蘭奢亭香保留「榮花をば自由自在につくし瀉 さいふのうちの千金の春」の狂歌が記される。



●摺物「二十四孝 文帝事賢母」 (享和 2 年～文化 2 年〈1802～05〉)。狂歌。紙本色摺。画狂人北斎画。13.0×18.4 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/大英博物館蔵)

※『二十四孝』は、中国において後世の範として、孝行が特に優れた人物 24 人を取り上げた書物 (ウイキペディアによる)。女が盆に乗せた椀を差し上げて、客間の男に持ってきたところ。男は座敷で煙管を使いながら三味線を弾く芸妓を前にしている。芸妓は障子越に背中がシルエットで描かれる。床には大盆三つに食べ物の入った椀が置かれている。

狂歌「門松のうちときよめて 神主も冠かたむけ祝ふいせ海老 袖香楼床世」「給仕して御膳あけはや年徳も 八将神の母とこそきけ 千秋庵」が記される。他に「廿四孝 丁蘭母像作」「廿四孝 山谷涓溺器」(島根県立美術館蔵)がある。

●摺物「六歌仙」 (享和 2 年～文化 1 年〈1802～04〉)。横長判紙本色摺。画狂人北斎画。19.9×38.4 北斎館蔵)

※高台の板張りの舞台に六歌仙が集まって、扇や紅葉の飾り物を作っている。右後ろに立つ小野小町は檜扇を翻し、左の喜撰法師は、眼鏡をかけて筆を縦にして両手でつかんでいる。他に、在原業平、大伴黒主、文屋康秀、僧正遍照がいる。

●摺物「大工道具と娘」(「大工道具」とも。享和 2 年～文化 6 年〈1802～09〉)。紙本色摺。北斎画。13.3×18.2 北斎館蔵)

※振袖姿の娘が墨壺を持って腰掛けている。その前に手斧と木槌が置かれている。新年の大工の仕事始めを表した。

●摺物「桜花の掃除」（享和3年～文化2年〈1803～05〉。紙本色摺。無款。38.4×54.0 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※常盤津門弟中と岸沢門弟中の合同稽古案内のもの。桜が咲く中、三人の官女が掃除をする仕丁を眺めている図。図の下半分に逆さに常盤津の案内文が記されている。

●摺物「柳下美人図」（享和年間～文化年間〈1801～18〉。十二切判。色摺。画狂人北斎画。21.3×9.3 フランス国立図書館蔵）

※柳の下で高下駄を履き、蛇の目傘を持ち、右手で肩掛けを握る女と、「の」の字を染め抜いた緑の風呂敷を担ぎ、蛇の目傘を畳んで肩に掛けた坊主頭の小奴の図。「春雨のをとなしやかにミる女ハ しつとりものゝこふりまでよし 紀画閑多」の狂歌が記される。

444 柳下美人図（フランス国立図書館）



●摺物「定家文庫と広蓋」（享和年間～文化年間〈1801～18〉。九つ切判色摺。画狂人北斎画。13.7×19.1 フランス国立図書館蔵）

※懐紙と熨斗に松の枝を配した正月の飾り物を入れた広蓋（衣服などを入れる蓋）を置き、その右に、底に厚紙を敷き織物で包んで紐を付けた、持ち運び用の蓋をした箱のある文庫（定家文庫という）を描く。正月を寿ぐ絵。「結ひにし定家文庫のひもかゝミ 今朝とけとより明けの初春 三條明足」、「広ふたの松に習はて鶯は ねをつゝますにはりあけてなけ 月の屋成文」の狂歌が記される。

●摺物「三都美人 京・江戸・大坂」（享和年間～文化年間〈1801～18〉。九つ切判。色摺。13.5×18.5 画狂人北斎画。フランス国立図書館蔵）

※図右から、三方に紙幣を持つ十二単衣の京都の官女の趣の女、中の図は、紙を鋏で切ろうとする江戸の武家の奥方の趣の女、図の左には、尺八を腰に挟み、梅の小枝を持つ大坂の町娘の趣の三人の女を描く。

445 三都美人 京・江戸・大坂（フランス国立図書館）

「次第く日あしものひて 七五三 なわのよりもあまる大江戸の春 古今亭由良人」、「引初る霞のミスやむらさきの 庭そのとけき春の日扇 千箱指方」、「難波津の梅のかをりも高麗の はしくまでも匂ふ春風 万度亭免丸」の狂歌が記される。



●摺物「六女草紙合」（享和元年～文化2年〈1801～05〉。九つ切判色摺揃物。画狂人北斎。すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/ベレス・コレクション）

※『狭衣物語』『蜻蛉物語』『更級日記』などを含んだ全6図であったか（『秘蔵浮世絵大観ベレス・コレクション』による。p 263）

☆〈土佐日記〉（13.9×18.4）

※屋根船に乗った二人の女性が、懐紙が舞って海へ落ちていくのを手を伸ばしてつかもうとしている図。紀貫之『土佐日記』元日条の、元日に新年の健康を祝って飲む白散注を舟屋形（注：舟に作った屋根付きの部屋）に挟んでいたところ、風で飛ばされて海に落としってしまった話を題材にして、白散ならぬ懐紙に見立てた図。記された歌に「佃島」とあるので、背景の島は佃島である。「初日影納む佃田の屋ね舟に 去年とことしのにき（二季）もかけたり 昔堅人」、「はなかみを出すと湊の春風に 吹ならされて白く散せり 千首楼」の狂歌が記される。

注）白散：新しい年の健康を祈って、屠蘇酒などとともに元日に服用する散薬。白朮・桔梗・細辛などを刻み、等分に調合したもの（「デジタル大辞林」による）。

☆〈狭衣〉※袴を着た男装の女性が正坐している姿と、それを見ている女たちの図。

☆〈源氏物語〉※欄干から外を眺める遊女と禿（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

●摺物「七遊女」（享和年間～文化年間〈1801～18〉。九つ切判色摺揃物。かつしか北斎画。フランス国立図書館蔵）

※全国の有名な廓の遊女を描く。狂歌が添えられる。

☆〈京 嶋原〉（13.5×18.5）

※遊女が朱塗りの盃で酒を飲みながら、やり手婆に朱書きで手紙を代筆させている。「千金の花のすかたの風俗に こかなものなる志ま原の君 神葵堂藤人」の狂歌が記される。

446 京 嶋原（フランス国立図書館）



☆〈江都 吉原〉（13.5×18.5）



※横兵庫鬘の遊女と年若い遊女が絵草紙を読んでいる。

「客人の噂いふまに早春の きたに八向ふよしわらの里 絵意閑多」の狂歌が記される。

447 江都 吉原（フランス国立図書館）

☆〈大坂 新町〉（13.5×18.6）

※遊女が尺八を吹き、禿が側で

胡弓を弾いている。

「古さとのつとになしたや難波津の 名におふ梅の袖のうつりか 涼窓亭裏風」の狂歌が記される。

448 大坂 新町（フランス国立図書館）



☆〈駿河 二丁町〉（13.6×18.3）

※遊女が扇を逆様に持って投扇遊びをしている。富士山を描いた扇を逆さに持って富士山

を暗示する。

「白妙に可笑するかのふしひたひ 霞たな引春の色里 九霞亭明輔」、「傾城のもてる扇を不二のねと おミたてなされ春の若もの 紀津々丸」の狂歌が記される。



449 駿河 二丁町 (フランス国立図書館)

☆〈伏見 色里〉 (13.6×18.4)

※遊女がうつむき加減で膝の上の三味線を爪弾いて

いる。長唄の本のようなものが前

に置いてある。「門松に千代をこめたるくれ竹の ふしみのさとにかさるよそほひ 亀吹亭寿」、「千代をへる竹のふしみの傾城に のひる日あしの春のうらゝか 陽有亭繁喜」の狂歌が記される。

450 伏見 色里 (フランス国立図書館)



☆〈奈良 木辻〉 (13.8×18.1)



※鹿と紅葉が鮮やかに描かれた打掛けに見入る遊女。立田姫と紅葉を暗示しているか。「よそほえる春の木辻の全盛も 梅のか禿のさきたちて見ゆ 廣沢館光丸」、「傾城の雪のはたにハ大和人 こころもとける春の長閑さ 聖賢堂守道」の狂歌が記される。

451 奈良 木辻 (フランス国立図書館)

☆〈長崎 丸山〉 (13.7×18.4)

※出島での遊女とオランダ人の出会いを描く。椅子に腰掛けて蛇皮線を弾く蘭人と、それを聞く遊女。オランダ人相手の遊女は蘭館行き(出島行きとも)と呼ばれたという。「この国のなミやしたはんから人も やはらくはるのゆふし御けん に山水舎里近」の狂歌が記される。

452 長崎 丸山 (フランス国立図書館)



●摺物「薪採り」(享和年間～文化年間〈1801～18〉。横長判色摺。かつしか北斎画)

※五頭の牛のうち、四頭の背中に薪の束が乗せられている。一頭の背に女が乗っている。五人の薪採りの女性が牛を操っている。二人の女性の頭には薪の束が乗せられている。図左の小山の陰にも四人の女性が薪を頭に乗せている様子が小さく描かれている。

●摺物「生け花の材料」(享和年間～文化年間〈1801～18〉。横長判色摺。かつしか北斎)

※三輪の荷車の置き台に花瓶が乗せられ、その脇にも挿花用の花瓶が置かれている。図左には、花鋏と花と小枝が置かれ、水差しが盆に乗せられている。

●摺物「水鳥と鮑」（享和年間～文化年間〈1801～18〉。九つ切判色摺。画狂人北斎画。13.9×19.3 フランス国立図書館蔵）

※仰向けて首を曲げて置かれる水鳥と傍らの鮑。青菜と桜の花びらが添えられる。西洋画風の静物画となっている。「水鳥のひつこむ頃は雪解して 岸のあしをも洗ふしら波 雪の屋鳥兼」の狂歌が記される。寛政 12 年（1800）にも摺物「鴨と鮑図」（無款）を描いている。



453 水鳥と鮑（フランス国立図書館）

●摺物「凧」（享和年間～文化年間〈1801～18〉。九つ切判色摺。画狂老人北斎於而天王橋之辺ニ写。14.0×17.3 フランス国立図書館蔵）

※鳶凧のような羽のある凧と操り具の図。依頼主の峯巒堂柱仲住の狂歌が添えられる。天王橋は浅草橋から浅草への通り（現江戸通り）が鳥越川と交わる所に架けられた小さな橋で、正式には鳥越橋という。この橋の側は天王町と呼ばれる一角があった。依頼主が住んでいた所か。「青柳のいとけなき子も春くれハ 凧になひける風の手遊び 峯巒堂柱仲住」の狂歌が記される。

文化1年（1804）2月11日～	甲子 45歳	葛飾北斎、画狂人北斎、錦袋舎、勝春朗
（版元が以前の号を使用）、勝川春朗、時太郎可候、北斎、画狂老人北斎、印：亀毛		
蛇足、辰、政、花押、：	こと（34歳）、	（富之助：18歳）、阿美与（16歳）、阿鉄（14歳）、阿栄（7歳）

【音羽護国寺で大達磨を描く】

★4月13日、音羽護国寺（現東京都文京区大塚5-40-1 五代将軍徳川綱吉の生母桂昌院の願いにより創建した祈願寺）の3年に一回の本尊開帳の最終日、120畳大の達磨半身像を描く。四斗の酒樽に入れた墨汁を藁箒に先につけ、麦藁を敷いた上に置いた大厚紙に、柄を肩に掛けて描く（中村文蔵〈子寅〉がその様子を記録したものを大田南畝が『一話一言』寅〈卷四十一〉に書写し〈文化一年四月十三日条〉、それを飯島虚心が『葛飾北斎伝』で紹介している。p 68～69）。

※中村文蔵の「北斎大達磨紀事」

「文化甲子三月。護国寺観音大士啓龕。縦人膽拜。士女雲集。率無虚日。四月十三日。画人北斎、就其堂側之地、画半身達磨、接紙為巨幅、下鋪烏麦楷、以襯紙底、紙大百二十筵、画者壞腎褰裳、縦横斡旋、意之所向、筆亦随之、蓋胸中已有成局、不持擬議而為也、画成、観者環立、嘖々賞歎、然唯見一斑、未能尽其情状、登堂俯瞰、所見始全、口大如弓、眼中可坐一人、其所用四斗酒榼一、銅盆二、皆以貯墨、水桶一、以貯水、為筆者凡六、而藁箒居三、大者如壘、小者如瓶、棕箒二、地膚箒一、皆以代筆

（右中村文蔵所記）」（『葛飾北斎伝』の引用文に付された訓点に従った仮の訓読は筆者による）

筆者訳：文化甲子の年の三月、護国寺観音大仕の厨子の開帳があった。うやうやしく拝み、人々が多く集まり、皆心をむなしくして精進する日。四月十三日、画人北斎が、護国寺の境内で、半身の達磨を画いた。紙を継ぎ足し大きくして、麦藁をきちんと下に置き、それに紙を置く。紙は百二十畳、腕をまくり袴をたくしあげ、縦横に動き、心に思うところ、筆もそれに従う、心にすでにイメージがあるのか、なんの疑いも持たずに描いた。絵が出来上がり、観音が出現した。人々がそれぞれ賞歎の声をあげる。だが一部しか見ていないので、全体の姿が分らない。そこで堂に登って上から見ると、ようやくその全体が見えた。口は大きく弓のようであり、目はその中に人が一人座れるようである。使ったのは、四斗の酒樽を一つと、胴盆二つに、墨を溜め、水桶一つに、水を溜め、筆は全部で六本で、藁箒が三本おいてある。それは大きなもので一斛の酒樽ぐらいで、小さなものでも酒を入れる瓶ほどだ。棕櫚の箒が二本、地面を掃く箒が一本である。以上、（中村文蔵の記すところの代筆）。

※『増訂武江年表』（斎藤月岑著・嘉永元年脱稿・同年三年刊の『武江年表』を、朝倉無声が増訂版としたもの。大正元年。国書刊行会）の文化元年条では、

「三月より護国寺観世音開帳あり。四月十三日画人北斎本堂の側に於いて、百二十畳敷の継紙へ半身の達磨を画く」とある。

※ボストン美術館蔵「護国寺達磨略図」（紙本墨画一幅。文化元甲子四月十三日席上 画狂人北斎画）は、俳人涼雲斎抱山により縦長紙（84.6×27.2）に貼り付けられ、「文化改元の初夏 護国精舎の庭上に於て 百七十畳の仏像を筆せり 精神海洋をも渡りぬべし」と記されている。更に色紙の下には、「豎十卷間（約 20m） 幅八間（約 14.5m） 凡百七十六畳 筆三俵の藁を以し 墨を斗る事三斗余 隅に稷櫚を用」と書いた紙が貼られている。伝えられる 120 畳ではなく 170 畳であったのだろうか。堤等琳（三代目）がこの様子を見ていて驚愕したという逸話がある。

454 護国寺達磨略図（ボストン美術館）



【米一粒に雀二羽と大紙に大馬と布袋の大画を描く】

★「其の後本所合羽干場（現東京都墨田区錦糸2 丁目～3 丁目辺）に於きて、前のごとき大紙に、馬を画き、又両国回向院にても、布袋の大画を画く。此の時仮に名を改めて錦袋舎といふ」（『葛飾北斎伝』 p 69。ルビ、句読点は筆者による）。また、その時に、米一粒に雀二羽を描くという（『葛飾北斎伝』 p 71）。

★『鍾馗乗馬の大画』（年代不詳。井上和雄『北斎』 p 20 で小林文七の旧蔵として紹介している。

●黄表紙『御伽山崎合戦』（角書「真柴久吉 武地光秀」中本二冊。合本一冊。勝春朗画。西村屋与八版。18.4×13.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※豊臣秀吉を称揚する内容のため、文化元年に絶版処分に遭い、記録上でのみ知られた黄表紙と言われ、近年発見されたものという。また、序文によると、挿絵は「画狂人北斎のむかし春朗なる頃試毫」したものとしている
(2019年『永田生慈北斎コレクション展図録』p 203)。



455『御伽山崎合戦』(島根県立美術館)
※本能寺の変で、武地光秀が小田春永を討ち、真柴久吉が主君の仇を取るといもの。題箋には、「御伽山崎合戦 三冊 勝春朗」とあるという。また、棚橋正博『黄表紙総覧 後編』(青裳堂書店 1989年)によれば、文化元年の黄表紙『前編仇報孝行軍』(南柚笑楚満人作。歌川豊国画。西村屋与八版)に載る広告には「『真柴久吉/武地光秀/御伽山崎合戦』全二冊 勝川春朗画」とあるとされる(『新北斎展図録』p 314)。

●読本『石言遺響』(角書「小夜の中山」。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。全10編。国会国会図書館蔵)

※馬琴の自序に「文化新元甲子年暑月龍生日注書於飯頼山之東翠竹深処」とある。
注)龍生日:旧暦5月13日で大安の日をいう。飯頼山は、李伯がこの山で杜甫を嘲った伝説がある。中国唐代の長安付近の山といわれる。

●狂歌絵本『晦日葛籠』初編(一冊。画狂人北斎画。方六庵白水撰)狂歌本説、俳諧本説あり(『年譜』による)。

●黄表紙『娘仇討陸友綱』(文化1年刊とされるが2月までは享和4年なので、享和4年条に記載した。p 231参照)

※『恩愛猿仇討』(文化元年。虚呂利作。歌川豊国画)の後編。『猿仇討』と『陸友綱』の合巻『両面出世姿鑑』がある。

●咄本『年男笑種』(角書「落嘶」。時太郎可候画。紀尾佐丸作。版元不明。書名は「落咄福寿草」という説あり)

●咄本「はなし亀」(角書「新板流行」。一冊。時太郎可候画。十口舎富久助作。鶴屋金助版)

●肉筆画「七夕図」(この頃か。紙本着色一幅。北斎画。印亀毛蛇足。95.8×28.0 清明会館蔵)

※若い女房が懐紙に桔梗を乗せ、誰かにさし出すように持ちながら、すらりと立っている図。賛は「穂に出よ こよひ ねかひの いとすゝき 万葉注」とある。七夕の日には、和歌に梶の葉を添える風習があるが、桔梗が描かれているので、画題の「七夕」は適当でないとの説もある(『2005北斎展図録』p 330)。

456七夕図(清明会館)
注)万葉:二世皐月平砂(1736~1813)。俳人。江戸二十歌仙の一人。



●肉筆画「福助図」（この頃か。紙本着色一幅。画狂人北斎画。花押。26.2×42.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※享和3年2月頃より浅草田圃（現東京都台東区千束2丁目あたり）の太郎稻荷への参詣が流行し、ここで「叶福助」の泥人形が造られたことから、一般に招福の縁起物として人気を呼び、知られるようになったと、『北斎クローズアップⅢ』（永田生慈 東京美術P83）で述べていることから、あるいは一応享和3年の作か。

図は、頭が非常に大きく、目も大きく描かれた福助が、「叶」の紋を染めた袴を着て、扇子を持って神妙な顔つきで座布団に座っている。

大田蜀山人の賛「叶に休詳 福不可量 御番衆注の頭も高く太平の時に逢たり叶福助蜀山人」とある。「吉祥叶い、福多く、御番衆のお役目めでたく、太平の時をよぶ叶



福助」といった意味か。

注) 御番衆：幕府・朝廷・大名家などで、殿中や館に交代で宿直・勤番して警備や雑務に当たった者（『大辞泉』による）。

457 福助図（島根県立美術館：永田コレクション）

●肉筆画「柿本人麿図」（紙本着色一幅。画狂人北斎画。印辰印政。37.4×44.4 エト・アルト・キョッソーネ（ジェノヴァ）東洋美術館蔵）

※折烏帽子を被って口ひげを生やした人麿が、右手に赤い柄の筆を持って右膝を立てて構想を練っている様。足元には、赤い硯台に黒い硯が置かれている。便々館湖鯉鮒が人麻呂の歌「ほのとあかしのうらの朝きりにしまかくれ行く船をしそ思ふ便々館湖鯉鮒書」を記している。



458 柿本人麿図（エト・アルト・キョッソーネ東洋美術館）

●扇面画「猿丸太夫」（扇面着色一面。葛飾北斎筆。印辰印政）

※猿丸太夫の「おくやまに もみぢふみわけ なくしかのこゑきくときぞあきはかなしき」（百人一首）の歌を踏まえた図。二本の太い幹の向こう側に腹ばいになって、頬杖をついて何か思案している様子の猿丸太夫。その周りには紅葉が散り敷いている。

●肉筆画「菊之図」（この頃か。2016/9月 MAINICHI オークションに出品されたもの。紙本着色。軸装一幅。北斎図。印辰印政 91.9×25.7 個人蔵）

※刷毛で墨を薄く摺ったように描いた岩に、菊の花を配している。花の花芯には薄い朱色を施す。真贋不明。

※北斎は、他にも「菊之図」を弘化4年（1847）に描いている。同じように応為も弘化5年に「菊之図」を描いている。

●摺物「**休茶屋**」（「**御休所 越前屋**」とも。7月23日頃。横長判色摺。画狂人北斎画。19.3×52.7 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/東京国立博物館蔵）

※大山詣の一行を描く。馬上に島田髷の娘。笠を被った旅人。馬子が茶を飲んでいる。馬の後ろでは荷物を整える男。図の左には「御休所 越前屋」と書いた看板のある茶店で、腰掛けて店の女から茶の給仕を受ける男の背中には大山詣に奉納する大きな木太刀がある。木太刀は奉納後、誰かの物をお守りとして持ち帰る習慣があったので、参詣の帰りだろうか。

※画中の口演書き（公演案内と出演者名の書込み）により、七月二十三日に常磐津美代太夫を催主とした浄瑠璃床開き注を両国尾上町中村屋平吉方で五ツ時より催す案内と分かる。左隅に文化元年甲子とある。上下反転の図で口演は下半分に書かれる（口演の文字を取った後摺もあるという）。本図の**墨摺下絵**がある（19.5×53.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

注）床開き：浄瑠璃で太夫が語ったり、三味線を演奏したりする舞台上の場所を床という。すなわち、浄瑠璃開催をいう。ちなみに、太夫が語るための義太夫本を床本という。

●摺物『**鼠シリーズ**』（仮題。九つ切色摺揃物。画狂人北斎画。フランス国立図書館蔵）

※鼠の語に因んだ風俗を描いたシリーズ。狂歌が添えられる。

☆〈**鼠木戸**〉（14.1×18.8）

※鼠木戸は、屈まなければ入れない芝居小屋の小さな入口をいう。この入り口で芝居の口上や役者名を語って客の興味を引く男が、赤い提灯の下がる入口の床几の上に座っている。男の口に当てている扇子には「**大入**」と書かれている。その前で二人の娘が面白そうに立っている。一人は袖を口に当ててほほ笑んでいる。「門松の太夫棧敷も人の手にわたるをいそぐ鼠木戸 呉機捌」、「皆人もはめをはつしていはふなり 戸さゝぬ春の福鼠木戸 茄子種数」の狂歌が記される。



459 鼠木戸（フランス国立図書館）

☆〈**鼠ごっこ**〉（13.4×18.9）

460 鼠ごっこ（フランス国立図書館）

※梅の木の見える料亭の座敷で芸者と男がくつろいでいる。芸者の一人は三味線を弾き、もう一人の芸者と男が鼠ごっこをしている。鼠ごっこは、手の甲をお互いにつまんで重ねる遊びで、男は相好を崩している。三人の背後に屏風が置かれ、右下に「画狂人北斎」の落款が記されている。「鼠こつこ 鼯こつこと早蕨の 手を出したる四方の山く 勝々亭山人」の狂歌が記される。



☆〈**鼠なき**〉（13.4×18.5 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※鼠なきは、遊女が客を招くときに口をすぼめて鼠の鳴き声をまねることをいう。遊郭の座敷で、花魁の一人が襖に寄りかかって、客からの手紙と思われるものを読んでいる。

もう一人の横兵庫髷の花魁は、簪を畳の上に放り出している。側の禿が、それを見ている。起きぬけの三つ布団があるので、客がまだ上がらない明け方の風景という。「初ふみを開くや庭の梅か枝に 繰返しきく鶯のこゑ 和薬物成」、
「今朝春ハ来へきしらせのたゝみさん かそへる門の松葉かんさし 椎柴道」の狂歌が記される。

461 鼠なき (フランス国立図書館)



☆〈鼠とらず〉 (13.8×18.8)

※遊女が大火鉢の灰を火箸で掻き混ぜている。その遊女の肩を両こぶしで叩いている男。部屋には注連飾りが下がり、火鉢の脇には双六の紙が広げられている。側で子どもが猫を抱いているが、猫は鼠を獲る気もない表情で抱かされている。正月の風景。「金蔵の番につけばや年男 鼠とらずのかたき御備 山里亭東土」の狂歌が記される。



462 鼠とらず (フランス国立図書館)

☆〈しろ鼠〉 (13.3×18.9)

※しろ鼠は、大黒天の使いである福の神をいう。注連飾りの下がる遊郭の部屋で、一人の遊女が硯箱と大福帳を前にして、後ろの遊女に何かを話しかけている。禿も側にいる。福を運ぶ客が置いていった大福帳はしろ鼠の象徴か。「大黒の鼠やはりのきせるまで 今朝年玉につかはしめなり 緑亭玉峨」、
「おいらんの白狐出てよろこはむ 大黒舞をまはすたひにハ 千首桜」の狂歌が記される。



463 しろ鼠 (フランス国立博物館)

●摺物「隅田川」 (この頃か。半切判。色摺。画狂老人北斎写。25.8×70.8 ハーバード大学サッカー美術館蔵)

464 隅田川 (ハーバード大学サッカー美術館)



※超横長判の俯瞰図。図の中央に隅田川を大きく横に描き、東岸から西岸を眺望する。図左には両国橋が描かれ、その先に富士山が見える。橋の対岸の右には浅草寺の五重の塔も見える。中央には今戸の瓦焼きだろろうか、白煙が二筋上がっている。図の右には凧が二つ空に上がっている。図の此岸には田圃が広がっている。川には舟が数艘浮かんでいる。

●摺物「鶏図」（11月。画狂老人北斎画。大大判色摺）

※二匹のひよ子と親鳥の図。

●摺物「梅と鶏図」（11月。画狂老人北斎画）

※五代目岩井半四郎（俳名：杜若）の中村座顔見世での襲名に配られたもの（『年譜』による）。

●摺物「太郎稲荷の図」（画狂人北斎画）図中の幟に年記があるという（『年譜』による）。

●摺物「正月の台所」（無款。色摺。13.6×18.2 すみだ北斎美術館蔵）

※図左の壁に新巻鮭が下げられている。湯を沸かしている茶釜から湯気が立っている。その前で柄杓を持って茶の用意をしている女に子どもが茶碗を差し出している。子どもの左には年増が立っている。図左には狂歌が記されている。

●摺物「三田初春の渡し舟図」（俳諧。画狂人北斎画 21.0×13.9 島根県立美術館：永田コレクション蔵）※画中に「甲子春」とある。

●摺物「蹴鞠の二美人」（画狂人北斎画）「子のとし」とある。実亭真盛ほか1名の狂歌がある（『年譜』による）。

●素描「髪すき」（この頃か。墨絵。井上和雄『北斎』による）

※立ちながら腰を折り、両手で長い髪をすいている図。髪は地面まで届いている。 465 髪すき（井上和雄『北斎』より転載）

●画帖「万歳図」（この頃か。画帖着色。画狂人北斎画。

印辰印政。見開き 26.9×39.8 東京都江戸東京博物館蔵）

※同画題は、寛政10年（1798）1月の摺物（宗理画）にもある。本図は『風流勸化帳』の表題を持つ二冊の画帖の一冊に収められていて、北斎の画は本図のみ。『勸化帳』は、寺院の修復を願って文人や画工の作品を集めたものとされるが、実際は趣味人が冊子を回して書画を乞うたものと推測される。

466 万歳図（東京都江戸東京博物館）

序文に、文化元年3月付の勸化の趣旨が描かれているという。それ以後6年間にわたり二冊で約140名の書画が収められて、北斎の画は、収められている画帖の17番目にあるという（以上（『新北斎展



図録』 p 319 より)。図は、見開きページの左に扇子をかざした太夫が正面を向き、右に才藏が横に太夫に向いている。

文化2 (1805) 乙丑 46 歳 北斎、東都画工画狂人北斎、画狂老人北斎、画狂人北斎、葛飾北斎、紫色鷹高 (隠号)、鷹高信士俗名助兵へ (隠号)、九々蜃北斎、九々蜃北斎老夫、俵屋宗理、  亀毛蛇足、画狂人、九々蜃、花押：こと (35 歳)、(富之助：19 歳)、阿美与 (17 歳)、阿鉄 (15 歳)、阿栄 (8 歳)

◇アンデルセン生 (~1875)。

◇花岡青洲、乳がん手術に始めて麻酔を使用。

◇2 月 16 日、江戸芝神明で勸進相撲があり、町火消「め」組の辰五郎と相撲の四ツ車大八の喧嘩。これを題材に二代目瀬川如皐が「御撰曾我閏正月」(文化四年)を執筆。

◇百姓が浪人から武芸を習うことが禁止される。

◇5 月 3 日、喜多川歌麿没 (53) (斎藤月岑『武江年表』より)。享和 4 年 (文化元年) に色摺り絵本が禁止されたが、『青楼絵本 年中行事』(十辺舎一九作。紫屋歌麿画)等 を出版し、歌麿は三日間の入牢をしていた。一方で、文化 3 年 9 月 20 日、54 歳没説あり。墓：浅草新堀端の専光寺(浅草北松山町)。

◇9 月、女浄瑠璃を禁止。

【文化 2 年頃の浮世絵等の価格】

◇文化 2 年、山東京伝の黄表紙『荏土自慢名産杖』(早稲田大学図書館蔵)に次の記載がある (15 丁裏の図左下に記載)。

「(略) 二八十六でやくしやゑ (役者絵) 二まい、二九の十八文でさうし (草紙) が二さつ、四五の廿なら大にしき (錦) 一まい (略)」。

※役者絵 1 枚 200 円、草紙 1 冊 450 円、大判錦絵 1 枚 500 円 (1 文=25 円で換算)

●狂歌絵本『狂歌百人一首 千年松笠』(『狂歌師像集』とも。色摺。北斎画。三河の国岡崎の三陽擣衣連の依頼によるもの。各平均 12.5×8.5 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/MOA 美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※宝尽しの模様の赤い縁取りをした黄土色の地に、三河地方を中心に活動した「三陽擣衣連」に関係する狂歌師の名とその肖像画、狂歌を描く。百人一首の絵札の趣。百図確認されているという。落款は、北斎画。勝山結女 (「ゆめ」か) の図のみ「九々蜃北斎画」。八声明近、千代栄光、淡月亭走涼、九十二翁元冬至の図は無款。浅子亭一成の図のみ二代宗理の落款。ヒーターモース・コレクションは 72 図の確認という (『ヒーターモース・コレクション北斎図録』による)。

※〈夷歌守〉〈棚珠厚丸〉〈三條小判志〉〈山寶亭長尉斗〉〈太羅多欄油小売安方〉〈八声明近〉〈柏古枝〉〈一丁亭羽狩〉〈勝山結女〉などの図。

●狂歌絵本『百囀』(正月。大本。墨摺一冊 7 図。東都画工画狂人北斎画。桑楊庵 (浅草) 干則編。西村屋与八版。各平均 26.4×18.2 北斎館/ボストン美術館/国立国会図書館/島

根県立美術館：永田コレクション蔵）※寛政 8 年（1796）『百さへつり』とは別本。色摺間判の後版もある。

※序文に「(略)あか翁（桑楊庵一世の頭光のこと）のもとつふみの名よ（元の狂歌絵本の題名）、かの百さへつりとしもふたゝひかうむらすことになんありける」（「国立国会図書館デジタル・コレクション」による）とあり、桑楊庵二世の干則が、桑楊庵一世の頭光（1754～96）撰による絵入り春興狂歌本『百さへつり』（寛政 8 年）を追慕して刊行したものであることが分る。

☆〈深川八幡宮〉

※背後に海辺の洲崎弁天。図の右下から左上に向かって、反り橋、石造りの二の鳥居、反り橋、隨身門、本殿と順に描かれる。門前には見世や露店が並び人々が賑わっている。背景に海辺の洲崎弁天が見える。図の左下から右上にかけて鷹の丸紋を描いた凧が上がっている。正月の風景。

☆〈駿河台春景〉

※図の右の駿河台の坂道に往来する人々が描かれ、背景に富士山、中央に神田の外堀が溪谷のように流れ、橋が掛かっている。

☆〈新吉原年礼〉

※吉原の新年の挨拶廻りの図。新造 6 名、禿 4 名、遊女 6 名、遊女屋夫婦の人々に、万歳の二人と頭巾を被って荷物を担いだ男などがぞろぞろと歩いている。袴姿の侍と茶坊主が行列を見物している。

467 新吉原年礼（国立国会図書館）



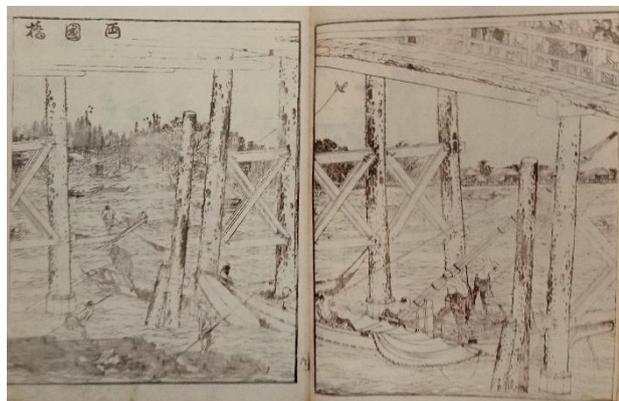
☆〈浅草観世音〉

※図右側に雷門が描かれ、その前の広小路には人々が往来し、左奥には火の見櫓、大神宮と東本願寺の屋根が描かれる。この画は、後に一枚摺り錦絵「浅草観音雷神門」として西村屋与八から刊行された。

☆〈両国橋〉

※両国橋下の橋桁の間を通り抜けるため帆を畳んだ船を中心に描く。右上部に僅かに橋が描かれ、橋上には往来の人々の雑踏が見える。背景には小さく浅草橋と、その前の数艘の舟が小さく描かれる。

468 両国橋（北斎館）



☆〈葺屋町〉

※葺屋町にあった市村座の正面を描く。手拭を被った木戸番が木戸札を売って

いる。番付を手にして示す男や、扇子で口元を隠して芝居の名題や役割を声色を使って読立をする二人の男たちの前では、人々がごった返している。図中左の市村座の看板に「亥の初春 したゆづりはほうらいそが」（信田樗蓬菜曾我）と書かれ、享和3年（1803）正月に上演された曾我狂言の演目が示される。但し、談洲楼焉馬（烏亭焉馬）の『花江都歌舞伎年代記』注によれば、この年正月の演目は「年男徳曾我」であるという（鈴木淳「北斎画『百轉』考」より）。

注）『花江都歌舞伎年代記』：文化8年。鶴屋喜右衛門版。江戸歌舞伎上演年表。談洲楼焉馬は正編を執筆。寛永元年～文化元年（1624～1804）までを記録する。続編（安政6年刊）は石塚豊介子の執筆で、文化2年～安政6年（1805～59）までを記録する。

☆〈御殿山〉

※御殿山での花見の宴が描かれ、桜樹越しに海が広がり、数隻の帆船が帆を下ろして浮かんでいる。桜の木の下では子どもが逆立ちをして遊び、図左の茶屋では遠眼鏡を覗く男などがいる。この図は、一枚絵として後摺されている（北斎画。22.0×33.4 西村屋与八版）。

●狂歌絵本『狂歌俳諧摺物帖』（この頃か。色摺）

☆〈鶯合〉（北斎宗理画。東洋文庫蔵）六歌仙に見立てた男五人と女一人が、鶯合の準備をしている。一人がすり鉢で鳥の餌を擦っている。

☆〈万歳〉（九々屋北斎画。東洋文庫蔵）花瓶に梅の小枝が生けてある部屋で、手をかざした女が二人いる。

●読本『絵本東嫩錦』（角書「復讐奇話」正月。半紙本五卷五冊。小枝繁作。画狂老人北斎画。見返しは画狂人北斎画。印画狂人。角丸屋甚助（衆星閣）他版。すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション/広島大学図書館蔵）

※北斎の読本挿絵初本といわれる（織田一磨『北斎』p88による）が、『小説比翼文』（享和4年：1804）が読本挿絵初本である。

●咄本『筆はじめ』（葛飾北斎画）「日本古典籍総合目録データベースより」より。

●艶本『艶本婦他美賀多』（「会本二見瀉」とも。墨摺半紙本。三冊）

※かつて百川子興（後の栄松斎長喜）や歌川豊廣作と考えられた本。紫色鴈高（画）。中巻第四図の画中の墓石に「雁高信仕 俗名助兵へ」の隠し落款がある。墓石に俗名を記すことで、厳しい出版統制の時勢に艶本から手を引く方向を示したものか。まもなく、この隠号（鴈高）は、溪斎英泉に譲る（『芸術新潮』1989年3月号「北斎」特集所収・林美一「北斎 艶本への挑戦」）。

※喜多川歌麿の後期の画風を模倣しているとして北斎の作品ではないとする説がある（リチャードレイン『伝記画集 北斎』p337）。

469 艶本婦他美賀多 (<https://aucfree.com> より転載)

※『絵入春画艶本目録』（白倉敬彦 平凡社）では、歌川派の



作とし、甚亭^{じんてい}大好^{だいこう}人^{にん}（朱楽^{しゆらく}菅江^{くわんかう}か）の序とする一方、礪川^{りくせん}亭^{てい}永理^{えいり}・喜多川^{きたがわ}歌麿^{かまろ}・北斎^{ほくさい}の画とする説もあるので検討を要するとしている（p96）。初版は墨摺判だが、色摺判もあるという（同著）。

●肉筆画「大原女^{おほはらめ}図^ず」（掛幅額装。絹本着色。画狂人北斎画。印^{いん}亀毛蛇足。94.5×30.3 ジェノヴァ東洋美術館蔵）

※永田生慈は「大原女^{おほはらめ}が黒木^{くろぎ}注^{しゆ}を頭にのせ、牛を引きながら売り歩く様子を描く。手は、享和年間の肉筆画「柳に牛^{うし}図^ず」や享和3年（1803）正月刊行の読本『古今奇譚^{ここんきたん} 蛋捨草^{たますてくさ}』六冊中に見いだせるものと共通。宗理型美人から文化年間へ移行しつつある時期のものと見なすことが可能であろう」とする（『秘蔵浮世絵大観 10 ジェノヴァ東洋美術館 I』p222）。

注）黒木：約30cmの長さに切った生木を、かまどで黒く蒸し焼きにして薪としたもの。京都の八瀬・大原でつくられ市中を売り歩いた（『大辞泉』による）。大原女は黒木売りと呼ばれた。全体に色彩鮮やかに描かれる。女の頭上の黒木の束には、桜の小枝が挿されている。

470 大原女図（ジェノヴァ東洋美術館）



●錦絵「市川團十郎^{いちかわだんじゅうろう}の暫^{しばらく}」（この頃か。大判。鳥居清満^{とりいきよみつ}筆意 画狂人北斎写之）

※目を剥き、口をかみしめて見栄を切る團十郎が、大首絵のように描く。

【この年のみ画号九々屋を用いる】

※九々屋：永田生慈『葛飾北斎』（吉川弘文館 2000年）では、北斎門人府川北岑^{ほくしん}（北嶺とも）の子孫の故府川俊氏談として、「北岑も九々屋を号しており、言い伝えでは『生活にきゅうきゅうしている』の戯号で『キュウキュウシン』と呼んでいたと筆者に語られたことがある」（p99）としているが、本稿では「くくしん」と読む。意味不明。この落款は文化2年だけに用いられる。

●肉筆画「雁を見る茶筌^{ちやせん}売り」（着色一幅。九々屋北斎画。印^{いん}亀毛蛇足。152.0×46.0 ボストン美術館蔵）

※法衣を着た茶筌売りが茶筌を挿した藁苞^{わらづと}を持ち、空行く雁の群れを眺めている図。

●肉筆画「円窓^{えんそう}の美人^{びじん}図^ず」（「まるまど」と読むか。この頃か。絹本着色一幅。九々屋北斎席画。印^{いん}亀毛蛇足。直径約30.5 シンシナティ美術館蔵）

※〈2005『北斎展図録』解説では「きゅうきゅうしん」と読んでいる。p330）

※赤い髪飾りをした島田髷の町家の娘が、唄の本と思われる冊子を開きながら読んでいる。ほおずきを口にして大首絵。

同画題「円窓の美人^{うたがわとよくに}図^ず」は歌川豊国が得意としたもの。

471 円窓の美人図（シンシナティ美術館）





●肉筆画「中国武人図」(この頃か。絹本着色一幅。画狂老人北斎画(花押)。81.6×17.6 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

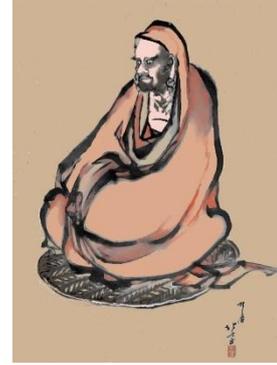
※『水滸伝』に登場する李逵といわれる。梁山泊の序列 22 位の暴れ者。針のような髪と顔を覆う髭の武人が、弓矢を背負い、右手にまさかりを持って、左足を前にして立っている図。

472 中国武人図 (島根県立美術館)

●肉筆画「達磨図」(紙本着色一幅。九々齋北斎席画。印亀毛蛇足。90・4×33.2 元麻布美術工芸館寄託・個人蔵)

※耳飾りをつけ、眼を見開いて座禅を組む達磨の図。全身を墨線で縁取りし、着物を薄い紅色で彩色している。

473 達磨図 (模写：Web「画像借景」より転載)



●肉筆画「菊慈童」(紙本着色一幅。九々齋北斎画。印九々齋。個人蔵)

※罪により深山に流罪となった少年が、菊の霊力を得て不老不死となる中国魏の説話から取材。図は、長い垂髪すいほつの少年が、両手を袖の中で重ねる拱手姿きょうしゆで立っている。文化初期にも同題の摺物がある。

474 菊慈童 (小樽芸術村 HP「今週の1点」より)



●肉筆画「鏡見美人図」(「鏡面美人図」とも。絹本着色一幅。九々齋北斎画。138.7×57.5 ポストン美術館蔵)

※立ったまま下に置いた鏡を見て、左手で後ろ髪を整えている女。鏡に映る顔は、菫紅ききべにの唇にはほおずきをくわえ

ている図。 475 鏡見美人図 (ポストン美術館)



●摺物「三囲花見茶屋図」

(この頃か。横長判色摺。九九齋北斎画。21.5×57.9 ハーバード大学サックラー美術館蔵)

※三囲神社境内の茶屋で、休んでいる花見客たち。部屋の棧きんに手をかけて外を見る女。その後ろに立って、袖口を口元に手を当てている女。部屋の中でむこう向きに座っている男。部屋に上がろうとしている荷物を持った小僧。茶屋の前の桜の木の側に立つ二人の女。茶屋の

葭簣の陰から隅田川の堤より低い鳥居を背にして、石段を上ってきた男の頭が覗く。境内の石彫の狛犬の背中に乗る子どもと、その側で紐につけた亀を引いて遊ぶ子どもがいる。狛犬の石台には「世話」「●中連」とあるので、元は全紙判で、下半分には狂歌連の歌が記されていたと思われる。

●摺物「王子のみち」（横長判色摺。この頃か。九九麿北斎画。20.0×55.5 ハーバート大学サックラー美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※図の右に「左り 王子みち」と書かれた石標のある船着き場に船頭が竿を突き立てて着けている。その前の道に傘と風呂敷包を肩にした小奴を引き連れた女が二人。図の中央から左にかけて田圃の風景が広がり、畦道には数人の旅人がある

●摺物「王子稻荷詣図」（この頃か。北斎画。色摺。19.1×51.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※王子稻荷門前の様子を描く。縦長の吊し提灯に「奉納王子稻荷」とあり、その下に横書きで「常磐津連」とある。「御神燈」と書かれた石燈籠の前に行く母娘。その後ろには赤子を背負った母親と付き従う小奴。遠くに鳥さしの棹を突きあげる男が小さく描かれる。図の左には、梅の木の後方に、水があふれている樽が描かれる。

●摺物「座敷狂言長柄二階傘踊図」（1月。色摺。画狂人北斎画。尾崎松四郎主催の歌舞音曲のおさらい会の番組表。下半分に逆さ文字を記す。画部分 18.7×51.2 全体 40.0×53.4 ポストン美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション/江戸東京博物館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※画中に「文化二乙丑」の書き入れのある同図があるという。図は、蠟燭をともした座敷で二重の天蓋の傘の柄を肩にして踊る少女と、その後ろで立烏帽子など着替えの準備のために座っている女。御簾の向こうで見物の婦人たちや、出番を待つ人たちが透けて見える。図左には富士と松と瑞亀の描かれた屏風の陰から、見物する袴姿の男の半身が見える。



476 座敷狂言長柄二階傘踊図（ポストン美術館）

●摺物「五月の景」（横長判色摺。画狂人北斎画。19.3×52.5 ハーバート大学アーサー・M・サックラー美術館蔵）

※鍾馗の絵を描いた五月幟や鯉のぼりの向こうには富士山。部屋には、団扇を持って縦膝の母親、その側には子どもが玩具の菖蒲太刀を持っている。それを見ている縁側に立つ

女。縁側には団扇の上に菖蒲打ちに使う菖蒲が置かれている。端午の節句の図。

●摺物「隅田川兩岸景色図巻」（烏亭焉馬應需於談州樓九々屋北齋席画。色摺。巻末の書き込みに「文化二年」とある。烏亭焉馬の依頼で焉馬の家で描いたものとするが贋作説あり。28.5×716.0 すみだ北齋美術館蔵）

※明治25年11月12日～13日に催された「古代浮世絵展」の出品目録には、この図の所有者は山形県坂田の豪商の出身で本間耕曹とある。その後、明治35年(1902)、浮世絵商・林忠正がパリから帰国する際に開いたコレクションの競売目録に写真でこの図を掲載している。その後誰の手に渡ったのか不明のまま、「幻の絵巻」とされていたが、平成27年(2015)に再発見され、墨田区が100年ぶりに1億4900万円で購入し、平成28年(2016)11月22日に開館した「すみだ北齋美術館」で公開した。

477 両国橋（巻頭部分）

※隅田川を両国橋から遡り、吉原に至る構図となっている。川の東岸には、川上に向かって、両国橋、回向院、大川橋、三囲神社、牛御前、弘福寺、長命寺、水神社（隅田川神社）、木母寺などが描かれる。



同じく川の西岸には、川上に向かって、柳橋、首尾の松、御米蔵、駒形堂、浅草寺、待乳山聖天、日本堤、吉原大門が描かれ、最後に吉原室内でくつろぐ男たちの様子が描かれる。



478 「隅田川兩岸景色図巻」（吉原室内巻末部分：すみだ北齋美術館）

●摺物「梅樹図」（「梅の花」とも。春。小判色摺。九々屋北齋画。島根県立美術館蔵）

※「丑の春」とある。左青寮甲岳の狂歌が記される（『年譜』による）。

●摺物「海鼠と独活図」（春。色摺。九々屋北齋老夫画）

※「乙丑春」とある。花楽庵他の狂歌が記される（『年譜』より）。

●摺物「休み茶屋」（色摺。北齋画）

※「丑ノ春」とある。千穂庵他の狂歌が記される（『年譜』による）。文化元年（1804）にも同題の摺物がある。

●扇面図「垣根のそばの遊女」（扇面。雲母紙に淡彩。画狂人北齋。山東京伝賛）

●絵暦「福助と美人年始の図」（1月。北齋画。『年譜』による）

●絵暦「福助と牛に乗る遊女」（1月。無款）

※遊女の帯に大小月がある（『年譜』による）。

●絵暦「福助とお多福の秘戯図」（1月。無款）

※画中の戯文に大小月が示される（『年譜』による）。

●絵暦「牛御前の恋人たち」（春画。小判）

※牛御前の鳥居の前で立ちながら交接する男女。小の月が柵に掛けられた提灯に記される（リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p163 による）。

●絵暦「牛石」（九々屋北斎画。色摺摺物。13.9×13.6 すみだ北斎博物館蔵）

※坐る牛に似た石。賛と狂歌の中に大の月が書き込まれている。飛石亭の主が小繁翁という人物に珍しい石を見せた中に、牛に似た形の石があることを思いだして、その絵を書き付けたと長文の賛に記している。「いにし夏のころほひ、飛石亭のあるし小繁翁にたいめせし時。珍らかなる石ともあまた見せ給ひつ中にも牛の形あやしきまで似たるありしを、ことし丑の春を向へて思ひ出たりければ、そを写しゑにして春のされことかひつけり、なを同しかたちなる物のあり所をかそふるに山城の白川山の溪、和泉牛滝山、加賀の那谷山、近江花開寺の裏山、洛西寺の山頂、みちのく塩竈の浦、同宮の松のほとり、本国にては大平川上等にあり。何れも大石にして靈異有 浅倉庵三笑（花押）

たれやなき尾とみへあしも角組はよく似し牛のはるの姿そ」

ゴシック部分、十、十一、九、二、四、八月が大の月を示している。

●摺物「飲中八仙」（紙本色摺。九々屋北斎画。各平均 21.5×9.3 すみだ北斎美術館/島根県立美術館蔵）

※杜甫の「飲中八仙歌」に詠まれた酒豪八人の文人（賀知章、汝陽王李璡、李適之、崔宗之、蘇晋、李白、張旭、焦遂）を題材にした見立図。飲中八仙図は古くから画題として好まれた。

☆〈跋〉（太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※程赤城注1・湖趙新（医師）が袷姿で正座する大田南畝の前で、扇の地紙に自らの名と大田南畝の名を記して書する図。図の上には「寄南楼香保留注2」として「飲中莫数 八人客 日本醉翁高四方 請見元朝三酌後 眼花落井屠蘇裏」七言絶句が記され、「於崎陽かほる写」とある。

注1) 程赤城：中国明の船主・医師・文人。長年にわたり長崎に来航。日本語に堪能で日本の酒と料理を好んだという。

注2) 南楼香保留：大田南畝の別号。

☆〈焦遂〉御高祖頭巾の女が提灯を下に下げ、酔った様子で棧橋の上を歩いている図。

☆〈汝陽〉屏風に着物がかけられている部屋で、箱車に肘をかけ何かを見やる女の図。

☆〈宗之〉風を左手を翳して見上げる垂髪の女の図。

☆〈蘇晋〉棚に福助人形とウラジロが飾られている部屋で杯を手に行っている角隠しの女の図。

☆〈知章〉神棚に鏡餅とウラジロが飾られた部屋で、机の上の本を読む女の図。

●摺物「千代紙を貼る二美人」（この頃か。色摺。九々屋北斎画。20.3×27.3 太田記念美術館蔵）

※千代紙を鉄で切って、壁紙に貼っている二人の婦人。床の間には花木を生けた花瓶がある。襖には富士の絵の脇に「九々屋北斎画」の文字が書き込まれている。図右上部と左半分に浅草庵他の狂歌が記される。

●摺物「山吹に桜」（「桜に山吹図」とも。4月。横長判色摺。九々屋北斎画。21.4×57.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※ゆったり流れる水面の上で、桜と黄色の山吹の花が垂れるように咲いている。長唄の二代目杵屋弥十郎(享和3年4月1日没)の三回忌追善のために配られたものとみられる。図左に、錦為他、17名の句が列記される。

●摺物「神田明神休茶屋」（半切判。色摺。九々屋北斎画。19.1×56.9 すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション蔵）



479 神田明神休茶屋（すみだ北斎美術館）

※神田明神の赤い鳥居から階段を上がった所にある休み茶屋で花見をする女性たちや子ども。茶屋の下には神田川が流れる。鳥居をくぐり石段を上ってきた男たちの頭だけが見える。図右の狛犬には子どもが乗って、亀を紐で引いている幼い子を見下ろしている。図左には遠くに富士山が描かれる。

●摺物「角隠しの女性たち 番組」（「女行列」とも。大奉書。色摺。九々屋北斎画。38.2×51.0 北斎館蔵）

480 角隠しの女性たち 番組（北斎館）

※荷物を持つ二人の女性を先頭に、揚帽子（角隠し）を被ったおびただしい数の女性が、土手のある田舎道を行列している。図の右には松ある小山から滝が流れ落ち、麓には桜が咲いている。



図の上に、「番組」「四十八手恋所訳」「蝶衛春姿見」「女鳴神瀬川帽子」「思ひのはぐるま」「妹背の柱建」の富本節の演目が横に併記され、図の中段と下段に記され

た文字から、富本豊初一門の深川芸者によるお浚い会の案内であることが分かる。文字の部分と絵の摺の具合が違ふことから、それぞれ別版と推測されている。

●摺物「菅原の上」（紙本色摺。九々屋北斎画。14.2×18.9 すみだ北斎美術館蔵）

※牛車の両横に立つ烏帽子を被った二人の官女。一人は梅の小枝を持っている。慈列亭の狂歌が記される。

●摺物「不動詣」（紙本色摺。九々屋北斎画。19.5×52.2 すみだ北斎美術館蔵）

※横長の摺物。「不動明王」と書かれた提灯が下がる入り口を出入りする人々。「河原崎座」と書かれた小さな幟が下がっている入り口の前では、水売りが桶から柄杓で水を掬い、客に差し出している。図の右では、盆栽を置いた前で煙管を銜えながら売っている男がいる。

●摺物「生花図」（この頃か。紙本横長判。摺物。東京国立博物館蔵）

※書物を積んだ台のある部屋で、角型の盆栽の前で、花瓶に梅の小枝を生ける女。浅草庵市人等の狂歌が添えられる。

●摺物「生花図」（この頃か。中判。紙本色摺。東京国立博物館蔵）

※前記横長判摺物の「生花図」とは別作。福寿草が生けてある丸い盆栽を囲んで、横兵庫髷の花魁が、床の間の花瓶に梅の小枝を生けながら盆栽の方を見ている。中に禿、左に年増がいる。（「丑九月」とあり、東都里松庵一寿（生け花作家）の門人三名の名披露に作られたものと『年譜』で説明しているが、横長判のものか、本図なのか不明）

●摺物「金魚すくいの子図」（この頃か。紙本色摺。北斎画。18.9×51.2。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/ホノルル美術館蔵）

※生簀の金魚を網ですくい取ろうとしている年増。縁台に立膝で座り、団扇を持ってその様子を見ている女。水を張った盥を持って年増の方へ行こうとしている男の子が描かれる。

●摺物「鐘衝堂の図」（11月。画狂人北斎画）

※錦賀（市川染五郎改松本武十郎）の、市村座顔見世での襲名披露に配布。「乙丑霜月」とある（『年譜』による）。

文化3 (1806) 丙寅 47 歳 画狂人北斎、葛飾北斎、北斎戴斗、葛飾北斎主人、東陽画狂人北斎、北斎、かつしか北斎、  之、印、画狂人、亀毛蛇足：こと(36 歳)、(富之助：20 歳)、阿美与(18 歳)、阿鉄(16 歳)、阿栄(9 歳)

◇3月4日、芝車町の明店より出火（車町火事・丙寅の大火）。死者1200人といわれる。

◇琉球使節来朝（尚瀨王即位の謝恩使）。

◇3月15日、長野小布施の高井鴻山生（～1883）。

◇9月20日、喜多川歌麿没（生年1753か。54）。文化2年（1805）没（53）説あり。

◇10月29日、五代目市川團十郎没（66）。屋号・成田屋。俳名：梅童、男女川、白猿、三升。定紋：三升。

◇ポルトガル使節団、江戸参府。

○曲亭馬琴、読本『墨田川梅柳新書』。

【合巻注時代に入る】

注) 合巻：江戸時代後期に行われた草双紙の一種。黄表紙が寛政の改革以後、風刺や諧謔を失い、かたき討ち物に転じると、筋書が複雑化して冊数が増し、3～6冊を1部に合巻して売ることになり、これを合巻と称した。形のうえでは式亭三馬作『雷太郎強悪物語』(1806)が前編5冊、後編5冊の合巻として出たのを初めとする(『ブリタニカ国際大百科事典』より)。

○式亭三馬、『雷太郎強悪物語』(初代歌川豊国画。合巻の初め)。

○山東京伝、『昔話稲妻表紙』。

○3月頃、「唐土名勝図会」(岡田玉山、熊岳文暉、大原東野民声画。名古屋・玉華堂版)

★この頃より浮絵を離れ遠近法に関心を持つ。

【馬琴宅に寄宿中、母の年忌の香典で馬琴と争う】

★春から夏にかけ3か月から4か月曲亭馬琴宅に寄宿する(飯田町中坂下。現東京都千代田区九段北1-14-21 世継稲荷〈筑土神社〉下)する。読本『新萱後伝玉櫛笥』(曲亭馬琴作。北斎画。翌年正月出版予定)の馬琴序文に「丙寅年画工北斎、わが著作堂に遊ぶこと、春より夏のはじめに至て三四箇月」とある。

★北斎の母の年忌に当たり、馬琴が北斎に香典を与えたところ、北斎はその香典の包み紙で鼻をかんで投げ出したので、馬琴が怒ったところ、親の香典を腹のたしにして長生きするのが本当の親孝行だと言い放ったという。

「嘗て北斎が母の年回注1に、馬琴其の困窮を察し、香奠許千金を紙に包みて与へたり。其の夕、北斎帰り乗りて、談笑の間、袂より紙を出し、鼻をかみて投げ出しけるを、馬琴見て大に憤りて曰く、これはこれ今朝与へし、香奠包の紙にあらずや、此の中にありし金円は、かならず仏事に供せずして、他に消費せしならん。不孝の奴めと罵りければ、北斎笑て曰く、『君の言のごとく、賜ふ所の金は、我これを口中にせり。かの精進物を仏前に供し、僧侶を雇ひ、読経せしむるが如きは、これ世俗の虚礼なり。しかず父母の遺体、即ち我が一身を養はんには。一身を養ひ、百歳の寿を有つは、是れ父母に孝なるにあらずや』と。馬琴黙然たりしと。加藤氏の話注2」(飯島虚心『葛飾北斎伝』p100 ルビは筆者による)

注1) 母の年回：母は小林平八郎の孫娘か、詳細不明。また、没後何回忌かも不詳。

注2) 加藤氏：脚注で、この人物不明としている。

この記事に続けて、飯島虚心は「これ親密なる朋友間の一時の戯言にして、交情の厚きは却て、この一条にて知らるゝなり」(p100)と述べている。

【木更津に逗留】

★6月頃、上総国木更津の豊が池(現千葉県木更津市朝日3丁目辺)の名主水野清兵衛宅に逗留する。

また、当地の日枝神社に1mを越える大絵馬「富士の巻狩図」を奉納(画狂老人北斎旅

中画。印之印。139.3×180.4 千葉県立上総博物館蔵)した。

※永田生慈が次のエピソードを紹介している。

水野清右衛門は、ある日、村の日枝神社に通るかかると、乞食のような男が境内の芝生に座り何か絵を画いているので、覗いてみると見事な富士山を描いていた。清右衛門はこの神社に絵馬を奉納したいと考えていたので、この男を自宅に招き、絵を依頼したところ、「唐仙人の楽遊」（九尺 2 枚の襖絵）などを描いたという（それらの作品は、明治時代に清右衛門の子が、数十銭で屑屋に売却したという）。さらに6月には日枝神社に大絵馬を奉納したという（『北斎美術館2 風景画』所収、「逸話にみる北斎の人間像」p 154）。

【行元寺の波に感銘を受ける】

また、行元寺（現千葉県いすみ市荻原2136）を訪れ、制作中の武志伊八郎注（通称：波の伊八）の欄間「波」を見て感銘を受けたという。

注）：武志伊八郎：宝暦元年(1751)～文政7年(1824)。現在の鴨川市に生まれる。



481 行元寺の欄間「波」（いすみ市観光ポータルサイトより）

【人体の骨格をしらざれば真を得ること能はず】

この頃の北斎の様子を『葛飾北斎伝』では、次のように記す。

「翁老年に至りても、勉強刻苦、画法を研究して、これ日も足らざるが如し。田辺氏の話に、予が父石菴脚注1は、翁と交はりしが、翁のことにつき、最も感服すべきは、翁が画道に熱心なること、是なり。翁人物を画くに、人体の骨格を、しらざれば、真を得ること能はずとて、接骨家名倉弥次兵衛脚注2の門に入り、接骨の術を学び、筋骨の究理をなし、しかして始めて人物を画くの真法を得たりと。翁が画法に、注意すること、概此の類なり。関根氏曰く、翁、板下を画くに、一筆一画といへども、謹々として苟せざるなり。かならず精細に下図をつけて、然る後に画きたり。もし少しく意に適はざる所あれば、何回にてもかき直したり。故に他の画工と異なり、画料甚だ貴し。これ、意匠と時間とを費すこと多ければなり。一説に、翁壮年の頃は、俳優の似顔画、および猥褻なる男女の画などもかきたりしが、中年画法を一変し、志を立て、北斎と号してより、天地間の物、何にても画かざることなけれども、唯俳優の似顔絵および猥褻の画は、決して画かざりしと」（p 215～216 ルビは筆者）。

脚注 1) 石菴：田辺石菴は徳川中期の儒者。天明元～安政三年(1781-1856)、七六歳。名は誨輔、字は季徳、通称新二郎。

脚注 2) 名倉弥次兵衛：徳川中期の接骨医。寛延三～文政一〇(1750-1827)。名は直賢。素朴と号す。柔術に長じ子弟に教授する傍ら、武備心流整骨を研究、明和年中に接骨医を開業。